

2-39

# 応用心理学論文集

第 7 集

第21回大会発表研究抄録

昭和31年4月7~8日・山梨大学会場



日本応用心理学会

140.4  
N77  
V.21

# 日本応用心理学会会則

- 第一条 本会は日本応用心理学会 (Japan Association of Applied Psychology) と称する。
- 第二条 本会は心理学およびこれに基づく学術技芸の応用発達を促進し、隣接諸科学との交流を図り、もつてわが国文化の向上発展に貢献することを目的とする。
- 第三条 本会は前條の目的を達成するために左記の事業を行う。
- (1) 研究およびその応用に関する諸業務との連絡、新分野の開拓、会員の親和増進
  - (2) 機関紙その他の刊行物の編集および刊行
  - (3) 大会その他の必要な会合の開催
  - (4) 外部からの要請による斯学研究および応用業務の受託あるいはあつせん
  - (5) その他必要な事業
- 第四条 本会の趣旨に賛同し、会員1名以上の紹介により運営委員会の承認を経て、所定の会費を納めた者を本会員とする。
- 第五条 本会の会員で永い間功績顕著な者は、運営委員会の議を経た上で、総会の承認を得てこれを名誉会員に推薦することができる。
- 名誉会員は会費を納める義務を有しない。
- 名誉会員は随時運営委員会に出席して意見を開陳することができる。
- 第六条 本会に左の役員を置く。
- 会 長 一名、副会長 一名、運営委員 若干名、幹 事 若干名
- 第七条 会長は大会当番機関の代表者、副会長は前期大会当番機関の代表者がこれに当る。この場合会長の任期は前期大会終了の翌日から大会終了の日までとし、副会長の任期は大会終了の翌日から次期大会終了の日までとする。また大会当番機関の決定は当該大会に先行する総会の決議による。
- 第八条 会長は本会を代表し会務を統理する。副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはこれに代る。
- 第九条 運営委員は総会において選出し、任期は二年とする。ただし再選を妨げない。運営委員は会長および副会長と共に運営委員会を構成し、本会の運営に当る。
- 運営委員は互選により常任委員若干名を選出する。常任委員は会長および副会長と共に常任委員会を構成し運営委員会の委託を受けて本会の運営を常時担当する。
- 運営委員会は会長が之を召集する。
- 第十条 幹事は会事務の必要に応じ、会員中から会長が委嘱する。
- 第十一条 本会の目的達成のために必要あるときは、随時委員会もしくは部会を設けることができる。部会に関する規定は別に定める。
- 第十二条 総会は春秋二回開催の本会大会の時に開く。
- ただし会長において必要があると認めるときは臨時総会を開くことができる。
- 第十三条 会員がひきつづき二年間の会費を滞納した場合には退会したものと見做す。また不都合な行為をした場合には運営委員会の議決によりこれを除名することがある。
- 第十四条 本会事務局を当分の間東京都千代田区神田三崎町日本大学文学部心理学研究室内に置く。事務局には局長一名および局員若干名を置く。局長および局員は会長がこれを委嘱する。
- 附 則
- 1、会費は昭和30年度から当分の間年額500円とする。
  - 2、本会会則は昭和30年10月29日から実施する。

## 序

本論文集は昭和31年4月7日、8日山梨大学学芸学部において行われた日本応用心理学会第21回大会において発表された研究の要旨を、字数1200字以内という制限の下で抄録の上当日提出された論文を集録したものであるが、その編集の責任を負わされた会場校の心理学教室の責任者として、この論文集の編集にあたって、予算其他の事情から、いろいろ無理な要求や注文を発表者をお願いしなければならなかつた点についてお詫びを申し上げますなければならない。特に前以て了解を求めておいた図や表を入れないことという制限事項についていさゝか厳格すぎる方針で臨み、これらを入れた原稿を返送して図表を除いていただいた点など、そのために論文の内容に無理を生じたのではないかと心配される点もある。

「交通事故防止対策」のパネルディスカッションは前回の大会からの継続研究課題でもあり、関係当局への進言の目的もあるので、その内容をできるだけ詳しく記録する必要があるところから、2時間にわたる討議の経過を録音に納めたのであるが、予算の関係からその全部を再録することができなかつたので、その要旨を発言者にまとめていただくようお願いしたところ、一部の方からはその原稿をいただいたけれども、他の方々は編集責任者たる私にその抄録作成をまかされたので、原稿をいただいたものはそのままこれを掲載し、録音にもとづくものゝ抄録は、発言者の氏名の下に、私が抄録したものを掲げることにしたので、いろいろ不備の点も多いことと思われるが諒承されたい。

「親子関係の研究法」のシンポジウムについては話題提供者の発言要旨を簡単にまとめて司会者に送り、そこでまとめていただくことにしたもので、発言者の原稿はそのまま発言者の発言要旨の標題の下に掲載したものである。

「交通事故防止対策」について特に発言要旨の原稿を送つていただいた山本晴雄氏・鶴田正一氏と、「親子関係の研究法」について同様発言要旨の原稿をおまとめいただいた牛島義友氏・松村康平氏・加藤正明氏とに対して編集責任者として感謝の意をさげたい。

「色彩と性格」のシンポジウムについても同様をお願いをしたのであるが、いろいろの御都合で原稿をいただけなかつたので、これは発言者とその話題を掲げるだけにした。

本大会終了後の本会運営委員会で、本論文集から巻致を表示すること、彙報欄を設けて本会の活動状況を記録すること、大会発表取消者を記録することなどがきめられたので、その方針に従つて編集することにした。

本大会を引きうけたものゝ、戦災の焼土に誕生した大学の設備の貧弱さと、心理学教室員の僅少と、かゝる大会開催についての経験の乏しさという悪条件の下におかれている山梨大学として、参加会員諸氏に多くの御不満を与えることを覚悟していたが、それにもかゝらず、全国各地から200余名の会員と100余名の臨時会員との参加を得150に及ぶ研究発表が行われ大会の成果について讃辞さえいただくことのできたことは開催当番教室の責任者としてまことに感謝にたえないところである。

昭和31年10月

日本応用心理学会  
第21回大会会長

石川七五三二

# 目 次

(○印は発表者)

## 1. 知覚・研究法・生理

- |   |             |       |         |    |
|---|-------------|-------|---------|----|
| 1. 固有速度に及ぼす音楽の効果 (第一報告) .....                               | 東 北 大 学     | 鈴 木   | い つ     | 1  |
| 2. 盲児の空間表象の研究 (第三報告)<br>—重量知覚に及ぼす空間表象の影響— .....             | 東 北 大 学     | ○大 菊  | 脇 池 義 哲 | 1  |
| 3. 垂直認知に関する実験的研究 (第三報告)<br>—垂直認知を規定する要因について— .....          | 東 京 大 学     | 藤 田   | 厚       | 2  |
| 4. 色感覚の精神物理学的操作の一方法について<br>—スペクトル視興奮度曲線による色覚の研究(其の1)— ..... | 茨 城 大 学     | 木 村   | 俊 夫     | 2  |
| 5. 直線と弧の組合せによる錯視 .....                                      | 都 立 大 学     | 今 井   | 省 吾     | 3  |
| 6. 応用視知覚研究 (10)<br>—レーダー・スクリーン上における指標の位置判断— .....           | 東京教育大学      | 小保内   | 虎 夫     | 4  |
|   | 日 本 大 学     | ○入 谷  | 敏 正     |    |
| 7. 交通事故防止に関する心理学的研究<br>—交通事故と地形条件について— .....                | 日 本 大 学     | ○小保内  | 虎 夫     | 4  |
| 8. 高速度自動車道の交通安全度について .....                                  | 攻玉社短期大学     | 安 東   | 功       | 5  |
| 9. 精神テンポに関する基礎的研究 (第12報告)<br>—その遷滅現象について— .....             | 早 稲 田 大 学   | ○望 月  | 稔 郎     | 6  |
|   |             | 三 浅 井 | 二 邦     |    |
| 10. 児童生徒の生活態度に対する調査の分析的研究 (その1)<br>—本研究の概要と問題点の抽出— .....    | 名 古 屋 大 学   | ○白 石  | 一 誠     | 6  |
|   |             | 中 山 本 | 治 輝     |    |
| 11. 児童生徒の生活態度に対する調査の分析的研究 (その2)<br>—問題点の究明への接近— .....       | 名 古 屋 大 学   | ○白 石  | 一 誠     | 7  |
|   |             | 中 山 本 | 治 輝     |    |
| 12. 児童生徒の生活態度に対する調査の分析的研究 (その3) .....                       | 名 古 屋 大 学   | ○白 石  | 一 誠     | 8  |
|   |             | 中 山 本 | 治 輝     |    |
| 13. Absolute Pitch に関する実験的研究 .....                          | 東 北 大 学     | 泉 山   | 中 三     | 9  |
| 14. 筋活動の両側の効果についての研究 .....                                  | 東 京 教 育 大 学 | 太 田   | 鉄 男     | 9  |
| 15. 催眠状態の生理心理学的基礎 (第一報告)<br>—覚醒時と催眠時における GSR の比較— .....     | 東 京 教 育 大 学 | ○原 大  | 野 清 太郎  | 10 |
|   |             | 山 岡   | 有 恒     |    |
| 16. 脳波の心理学的基礎研究 (3) .....                                   | 日 本 大 学     | ○山 岡  | 有 恒     | 10 |
|   |             | 長 沢   | 有 恒     |    |
| 17. 脳波の心理学的基礎研究 (4) .....                                   | 日 本 大 学     | ○山 岡  | 有 恒     | 11 |
|   |             | 長 沢   | 有 恒     |    |
| 18. 脳波の心理学的基礎研究 (5) .....                                   | 日 本 大 学     | ○山 岡  | 有 恒     | 12 |
|   |             | 長 沢   | 有 恒     |    |

## 2. 感情・思考・学習・記憶

- |   |                                |      |       |    |
|---|--------------------------------|------|-------|----|
| 1. 教護院収容少年の逃走について .....                   | 大 阪 府 立 修 徳 学 院                | 大 杉  | 隆 男   | 12 |
| 2. 大学生 (女子) の情緒について .....                 | 中 央 大 学                        | 赤 塚  | 泰 三   | 13 |
| 3. 幾何学的問題解決過程についての一実験 .....               | 大 阪 学 芸 大 学                    | 萩 野  | 勝 之 助 | 14 |
| 4. 計算と知能との関係に関する一考察 .....                 | 東 京 学 芸 大 学                    | 小 島  | 潔     | 15 |
| 5. 視覚デザインの心理学的研究 1<br>—美的分割について— .....    | 日 本 大 学                        | 古 牧  | 節 子   | 15 |
| 6. ドリル学習について .....                        | 静 岡 大 学                        | 中 沢  | 正 壽   | 16 |
| 7. 集団学習における協力について (5) .....               | 愛 知 学 芸 大 学                    | 田 中  | 正 一   | 17 |
| 8. 家庭科学習の心理 (第二報告) .....                  | 東 京 学 芸 大 学                    | 芦 田  | 昇     | 17 |
| 9. 嗅覚記憶における感情の要因 .....                    | 東 北 大 学                        | 小 野  | 尋 子   | 18 |
| 10. 加法計算における誤りの分析 (続報)<br>—感応理論の研究— ..... | 東 京 教 育 大 学<br>埼 玉 縣 高 麗 小 学 校 | 小保内  | 虎 夫   | 18 |
|   |                                | ○森 田 | 良 久   |    |

### 3. 発 達

1. 家庭環境と I, Q 及び学業成績の遂年的研究.....労働科学研究所 { 狩 野 広 之...19  
日本女子大学 { 鈴 木 光 子
2. 児 童 の 職 業 観 (1) .....むさしの児童 { 石 尾 長 雄...20  
教育研究会 { 関 口 富 千 子  
松 村 咲 子
3. 女子学生の怒り.....静岡大学 石 川 透...21
4. 青年期の異性交遊について.....横浜市立教育研究所 岡 田 寅 次...21  
名古屋大学 {
5. 青年期の生活意識について (その1).....社会事業短期大学 { 続 旭 有 恒 子...22  
久 世 妙 子  
泰 敏 安 雄
6. 家庭内の母親の地位の児童の社会的行動に及ぼす影響 (1).....東 北 大 学 小 室 庄 八...23
7. 妊娠時諸刺激の経験効果性 (2) .....京 都 大 学 田 中 昌 人...23  
—晩期妊娠中毒症産児の乳幼児期発育状態—
8. 騒音の身体発育に及ぼす影響について (第一報告) .....茨 城 大 学 猪 狩 涼...24  
—騒音の中で飼育された白鼠の身体発育について—
9. 身体発達の縦断面的研究.....順 天 堂 大 学 田 崎 仁...24

### 4. 言 語

1. 連想語反応についての発達的研究.....東 京 教 育 大 学 永 沢 幸 七...25

### 5. 人 格

1. 作業横顔法としての性格記号法と対人投射法としての.....社会心理教育学 { 阿 部 孫 四 郎...26  
補填緊張法との診断矛盾の照応 { 研 究 所
2. 青年心理学における定量化の「有効確実性」について.....山 梨 大 学 西 平 直 喜...26
3. プロジエクティブ・テクニクによる家族関係の研究.....お茶の水女子大学 松 村 康 平...27
4. Q-technique による青年の職業興味の研究 .....野間教育研究所 藤 原 喜 悦...27
5. 価値意識よりみた人格の発達 (第一報) .....東 北 大 学 石 津 み づ 子...28  
—小学校六年時代の価値意識—
6. 自我意識についての調査.....日 本 大 学 木 村 禎 司...28
7. 児童画の色彩と疾病傷害との関係について (その2) .....静 岡 大 学 勝 井 晃...29  
—絵日記の分析による「紫色」の問題—
8. 異常人格についての総合的研究 (第一報) .....東 北 大 学 丸 井 多 恵 子...30  
—願望法、自由画、ロールシャッハ法によつて—
9. 内田クレペリン検査においてある意図が作業曲線に及ぼす影響.....埼 玉 大 学 長 瀬 邦 三...31
10. 自律神経機能が人格形成に及ぼす影響に関する研究.....大 阪 学 芸 大 学 { 中 西 重 実...31  
—その予備的研究— { 堀 井 隆 洋
11. 婦人自衛官の性格傾向について (I) .....防衛庁陸上幕僚監部 { 近 喰 秀 大...32  
—情緒性、向性および性度— { 日 本 大 学 { 大 村 政 男
12. 婦人自衛官の性格傾向について (II) .....防衛庁陸上幕僚監部 { 近 喰 秀 大...32  
—精神健康度および職業興味— { 田 中 教 育 研 究 所 { 松 浦 健 児
13. 婦人自衛官の性格傾向について (III) —総括—.....防衛庁陸上幕僚監部 近 喰 秀 大...33
14. 国民性と習慣.....東 京 十 文 字 高 等 学 校 秋 葉 馬 治...34

### 6. 教 育

1. 質問法に関する一研究 (その一) .....名 古 屋 大 学 赤 木 愛 和...34  
—向性検査の項目分析 (第一報告) —
2. 幼 児 の 知 能.....埼 玉 大 学 { 山 根 薫...35  
金 子 保
3. 作業性格検査 (10) .....東 京 都 職 業 適 性 { 板 倉 善 高...35  
—クラスカラーの測定法— { 相 談 所
4. 学級集団構造と討議過程の関係について.....東 京 教 育 大 学 田 中 博 正...36
5. ソシオメトリック・リサーチによる学級社会の.....東 京 学 芸 大 学 田 中 熊 次 郎...36  
集団凝集性に関する考察

|  |                            |                             |    |
|--|----------------------------|-----------------------------|----|
| 6. 学業不振児の学級における社会的地位について.....                            | 岐阜大学学芸学部<br>附属加納小学校        | 宮 脇 修                       | 37 |
| 7. 高校卒業期の Manifest Anxiety の傾向 .....                     | 福 島 大 学                    | 工 藤 正 悟                     | 38 |
| 8. 教師の精神的環境に関する教育心理学的研究<br>—現代教師の不安と悩み(そのI)(そのII)— ..... | 京 都 学 芸 大 学                | 四 方 実 一<br>林 本 夏<br>岡 本 谷 盤 | 38 |
| 9. 教師の性格(3)—琉球人教師について— .....                             | 埼 玉 大 学                    | 山 根 薫                       | 40 |
| 10. 採点方法についての一考察 .....                                   | 新 潟 大 学                    | 池 上 喜 八 郎                   | 40 |
| 11. 一年生のかな学習について .....                                   | 東 京 教 育 大 学                | 中 野 佐 三                     | 41 |
| 12. 幼児の態度の発達と知能指数の恒常性との関係 .....                          | 東 京 学 芸 大 学<br>日 本 音 楽 学 校 | 堀 内 敏 夫<br>近 藤 かな 枝         | 41 |
| 13. 農村中学校 IQ 分布の実察 .....                                 | 近 畿 大 学                    | 山 田 久 喜                     | 42 |
| 14. 負数概念の発達 .....  | 京 都 学 芸 大 学                | 四 方 実 一                     | 43 |
| 15. 教科不適応の診断について(体育科における<br>問題行動とその原因について) .....         | 東 京 学 芸 大 学                | 佐 藤 正                       | 43 |
| 16. 自叙伝にあらわれた国立大学学生の宗教と社会思想 .....                        | 国 際 基 督 教 大 学              | 岡 部 彌 太 郎                   | 44 |
| 17. 高校教官による性格評定と大学成績との関係 .....                           | 金 沢 大 学                    | 多 田 治 夫                     | 45 |

## 7. 検 査

|  |   |   |    |
|--|---|---|----|
| 1. 興味型検査法第二の標準化に関する<br>研究(第一報—興味偏差値の動揺) .....            | 山 梨 大 学                                   | 石 川 七 五 三 二   | 45 |
| 2. 社会性発達検査の作成とその問題点 .....                                | 応 用 教 育 研 究 所                             | 吉 田 専 吉<br>平 沼 栄 一<br>小 見 山 辰 巳<br>堀 本 一 郎  | 46 |
| 3. 幼児用知能テストの標準化について .....                                | 東 京 学 芸 大 学<br>キ リ ス ト 教 幼 児<br>教 育 研 究 所 | 佐 藤 初 重   | 47 |
| 4. 知能検査の重みづけについて .....                                   | 田 中 教 育 研 究 所                             | 清 安 水 富 利 信<br>児 宮 玉 崎 省<br>中 村 沢 洋 子<br>田 中 根 祥 江<br>山 根 京 子 子                         | 47 |
| 5. 改訂 M, M, P, I 短縮版 .....                               | 日 本 女 子 大 学                               | 児 出 玉 田 省<br>渡 辺 則 和 子<br>磯 部 佳 靖 子<br>寺 玉 内 幸 和 子<br>登 島 幸 和 子<br>塚 本 美 喜 子<br>畝 本 靖 子 | 48 |
| 6. 日本人のロールシャツフ反応の研究(12)<br>—ロケーションの問題— .....             | 日 本 女 子 大 学                               | 児 出 玉 田 省<br>渡 辺 則 和 子  | 49 |
| 7. 日本人のロールシャツフ反応の研究(13)<br>—コンテンツについて— .....             | 日 本 女 子 大 学                               | 児 出 玉 田 省<br>磯 部 佳 靖 子  | 49 |
| 8. 日本人のロールシャツフ反応の研究(14)<br>—運動反応の問題— .....               | 日 本 女 子 大 学                               | 児 出 玉 田 省<br>寺 登 島 幸 和 子  | 50 |
| 9. 日本人のロールシャツフ反応研究(15)<br>—P, G, R 反応との相関— .....         | 日 本 女 子 大 学                               | 児 塚 玉 田 省<br>畝 本 美 喜 子 靖 子  | 51 |
| 10. 日本人のロールシャツフ反応研究(16)<br>—P, G, R によるカラーシヨツクの検討— ..... | 日 本 女 子 大 学                               | 児 戸 玉 塚 省<br>塚 田 彩 子<br>美 喜 子   | 52 |
| 11. Pfister Test について(第I報) .....                         | 国 鉄 労 働 科 学 研 究 室                         | 清 宮 栄 一   | 52 |
| 12. 適応性の診断について .....                                     | 日 本 大 学 学<br>精 工 舎                        | 長 谷 川 貢<br>浅 野 行 雄  | 53 |
| 13. 音楽鑑識力テストの実施(III) .....                               | 共 立 女 子 大 学                               | 玉 岡 忍   | 53 |

## 8. 社 会

|   |                      |           |    |
|---|----------------------|-----------|----|
| 1. 生活時間配置よりみた都市と農村の比較<br>—家事・労働・文化的な生活時間— ..... | 群 馬 県<br>荒 砥 南 小 学 校 | 石 綿 美 喜 雄 | 54 |
|---|----------------------|-----------|----|

|  |                      |      |     |            |
|--|----------------------|------|-----|------------|
| 2. 戦後10年間の社会現象に対する適応の一調査(第2報).....                               | 南山大学                 | 寺沢   | ひさ  | 54         |
| 3. 三角関係について(第1報).....  | 東京家庭裁判所              | 日上   | 泰輔  | 55         |
| 4. 電話交換作業の Action Research そのII.....                             | 広島大学                 | ○西兼正 | 山子戸 | 啓雷茂 56     |
| <b>9. 産業・職業指導</b>  |                      |      |     |            |
| 1. 職業指導主事の職務内容に関する研究.....  | 甲府工業高等学校             | 水上   | 資幸  | 56         |
| 2. 交通心理学研究(第二報告)<br>-選択反応時間テストによる合格域の設定の試み-                      | 東北大学                 | ○大志丸 | 鵬野山 | 義知欣 一文哉 57 |
| 3. 交通心理学研究(第三報告)<br>-選択反応時間テストにより仮定された合格域の<br>事故頻発者弁別への応用の試み-    | 東北大学                 | ○大志丸 | 鵬野山 | 義知欣 一文哉 58 |
| 4. 自動車長距離運転における疲労度検査.....  | 名古屋工業大学<br>愛知学芸大学    | ○村市  | 井川  | 忠典 一義 58   |
| 5. 災害テストの基礎的研究.....  | 立教大学                 | 山本   | 至朗  | 59         |
| 6. 交通事故防止について.....   | 国鉄労働科学研究所            | 鶴田   | 正一  | 59         |
| 7. 都内における自動車事故の原因研究<br>特に自動車損害賠償保障法実施の影響                         | 日本大学                 | ○渡浅  | 辺井  | 正昭 60      |
| 8. SRA 態度測定法の吟味(3)<br>-NKR法との比較研究-                               | 立教大学                 | ○安大  | 藤塚  | 瑞博 夫保 61   |
| 9. 職場における労働者の態度とその測定の問題.....                                     | 労働科学研究所              | 大須賀  | 哲夫  | 61         |
| 10. ソシオメトリーによる産業社会の凝集性の数量化について.....                              | 静岡大学                 | 北脇   | 雅男  | 62         |
| 11. 事務能率と文字に関する研究(読みやすさについて).....                                | 労働科学研究所              | 太田垣  | 瑞一郎 | 62         |
| 12. 成人用知能検査の一考察.....   | 人事院任用局               | 金平   | 文二  | 63         |
| 13. 紡績工の適性に関する研究.....  | 愛知学芸大学               | 堀内   | 安男  | 63         |
| 14. 個人における職業希望の発達に関する研究(1)-学年的推移-                                | 神戸大学                 | 増田   | 幸一  | 64         |
| 15. ろう児の職業指導に関する研究 -職業興味調査-                                      | 新潟大学                 | 畔上   | 久雄  | 65         |
| <b>10. 司法</b>  |                      |      |     |            |
| 1. 非行少年にみられるパーソナリティの一側面.....<br>-その実態調査より-                       | 長野少年鑑別所              | ○根河  | 本野  | 元 茂昭 65    |
| 2. 非行少年の更生について.....  | 東京家庭裁判所              | 山本   | 晴雄  | 66         |
| 3. G, S, R, によるうそ発見検査の研究(その一).....                               | 警察庁科学捜査研究所           | ○今山  | 村下  | 義素 正邦 67   |
| 4. Polygraph による実験的うそ発見の研究(その一).....                             | 警察庁科学捜査研究所           | ○今山  | 村下  | 義素 正邦 67   |
| <b>11. 臨床・異常</b>   |                      |      |     |            |
| 1. ゾンデイ・テストによる事例分析.....  | 三河病院                 | ○山高  | 田倉  | 悠紀男 兼 藏 68 |
| 2. ロールシャッハ・テストに於ける反応時間について.....                                  | 金沢大学                 | 田中   | 富士夫 | 68         |
| 3. Rorschach Test に関する研究(第27報)<br>-Horrorer Inkblot Test の研究(2)- | 金沢少年鑑別所              | ○酒佐  | 川竹  | 靖一郎 隆三 69  |
| 4. ロールシャッハ・TAT の臨床的研究<br>-M と TAT Variables との関係-                | 早稲田大学<br>慈雲堂病院       | ○瀧瀧  | 沢清  | 人子 69      |
| 5. 指筆法の実施についての研究(第1報 診断規準<br>作製への試み)                             | 横浜市立大学<br>日本社会事業短期大学 | ○外石  | 林井  | 大哲 作夫 70   |
| 6. 文章完成法テストの型式と特性<br>-刺戟文の長短による特性の相違について-                        | 精神医学研究所              | ○佐横  | 野田  | 勝男 仁 71    |
| 7. C. A. T からみた親子関係の一考察.....                                     | 東京都中央児童相談所           | 金平   | 輝子  | 71         |
| 8. 小学校に於ける学業不振児の研究(第2報)<br>-再診断による症状発生の条件分析-                     | 千葉県<br>教育研究所         | 大野   | 桂   | 72         |
| 9. 催眠暗示による夜尿癖の矯正.....  | 東京教育大学               | 大野   | 清志  | 73         |

|  |                |                  |    |
|--|----------------|------------------|----|
| 10. 神経症における社会文化的因子(第一報) .....                      | 慶応大学           | 阿部 正             | 73 |
| 11. 自己防禦傾向の発達の消長について .....                         | 群馬大学           | 内山 喜久雄           | 74 |
| 12. 非行少年の follow-up (5) .....                      | 東京都品川児童相談所     | 水島 恵一            | 74 |
| 13. 衝動診断学から見た精神病質の人格構造 .....                       | 金沢少年鑑別所        | ○佐竹 隆三<br>酒川 靖一郎 | 75 |
| 14. ゲシュタルト・テストに示される痴呆症状について .....                  | 金沢脳病院          | 市村 公正            | 75 |
| 15. 覚醒剤耽溺者の不安体験 .....                              | 慈恵医大神経科        | 竹山 恒壽            | 76 |
| 16. 催眠夢の発生に関する実験的研究-弐 .....                        | 東京教育大学         | 志田 氣吹<br>成瀬 悟策   | 77 |
| 17. 盲・ろう児童・生徒の研究-1. 要求水準の比較研究- .....               | 日本大学<br>平塚ろう学校 | ○森田 一司<br>松岩 本房  | 77 |
| 18. 聾児童・生徒の言語能力(その5)<br>- 語彙の調査結果とその問題について - ..... | 日本大学           | 森 一司             | 78 |
| 19. 学校調査より見たるろう児・ろう生徒の心身条件に<br>ついて .....           | 東京教育大学         | ○荒川 勇彦<br>古厩 勝彦  | 78 |
| 20. 賞罰に関する一考察(III)<br>- 特に非行少年の学習効果との関係 - .....    | 日本大学           | 駒崎 勉             | 79 |
| 21. 分裂病患者の概念的思考に関する一研究 .....                       | 前橋市立女子高等学校     | 大沢 博             | 80 |
| <b>12. パネルディスカッション</b>                             |                |                  |    |
| 交通事故防止対策について .....                                 |                |                  | 81 |
| <b>13. シンポジウム</b>                                  |                |                  |    |
| 1. 親子関係の研究法 .....                                  |                |                  | 82 |
| 2. 色彩と性格 .....                                     |                |                  | 84 |
| <b>14. 第21回大会発表取消者</b> .....                       |                |                  | 84 |
| <b>15. 日本応用心理学会彙報</b>                              |                |                  |    |
| I. 沿革摘要 .....                                      |                |                  | 85 |
| II. 役員氏名・機構 .....                                  |                |                  | 85 |
| III. 運営委員会・常任委員会記録 .....                           |                |                  | 86 |
| IV. 月例会 .....                                      |                |                  | 86 |
| V. 部会活動状況 .....                                    |                |                  | 86 |
| VI. 交通事故防止対策委員会 .....                              |                |                  | 87 |
| VII. 新入会員 .....                                    |                |                  | 88 |
| VIII. 会計報告 .....                                   |                |                  | 88 |
| ◎ 学術会議会員候補者の推薦 .....                               |                |                  | 90 |



# 1. 知覚・研究法・生理

## 1. 固有速度に及ぼす音楽の効果 (第一報告)

東 北 大 学 鈴 木 い つ

I 目的 我々の心理生理的過程に及ぼす音楽の効果については、従来相当多くの研究がなされて来たが、その結果は種々で、余り明瞭で一義的ではない。それは、音楽刺激が外界の刺激としては、非常に微弱であるためと思われる。そこで、ここでは音楽の効果を一からしめる様に音楽刺激の前に強い雑音を与え、対比的に音楽刺激の影響を拡大して引き起させようとした。影響を見たのは各人の指先の固有運動速度である。参考のために同時に脈搏を記録した。

II 刺激及び装置 雑音は noise 発生器による 70 フォンの白色雑音である。音楽はチェロ独奏によるサンサーンス作「白鳥」を選んだ。

運動の固有速度は電鍵を指先で叩くと、その運動がカイモグラフに導かれ、回数だけでなく、強さも同時に描ける様な装置を用いた。

脈搏の測定は山越製作所の製作にかゝるポリグラフによる。

III 実験手続 被験者は男子 12 人女子 2 人の大学生、被験者は楽な姿勢で椅子に坐り、左の上膊動脈の上に脈搏記器を固定する。そして、"用意" という合図で右手の中指を電鍵の上に置き、眼を閉じる。"始め" で早過ぎず、遅すぎず丁度よい速度で電鍵を叩く。

約 3 分 10 秒の実験時間は、初め無刺激で 60 秒 tapping をし、次に雑音を 30 秒与え、それから 10 秒の無刺激、そして 60 秒音楽をきかせた後に、無刺激の時間を 30 秒おいて、tapping をやめさせた。

雑音及び音楽は、被験者の前額面 40cm 離れたスピーカーから発せられた。

IV 結果 打叩の強さは雑音を与えると圧力が強くなり、音楽になると次第に弱まるのが 8 人、この逆の結果になつたのが 2 人、殆んど変化がないのが 2 人であつた。他の 2 人は測定不可能なために加えられない。

固有速度の回数の変化は、音楽刺激を与えると一般に減少する傾向が得られた。

脈搏に対する音刺激の効果については、増減の明瞭な結果は得られなかつた。

運動の固有速度は心理生理的個性の要素層と極めて深い関係にあると思われるから、以上の結果を、各個人の個性と関連づけたならば、更に興味ある問題が得られると思う。

## 2. 盲児の空間表象の研究 (第三報告)

### — 重量知覚に及ぼす空間表象の影響 —

東 北 大 学 大 脇 義 一  
○ 菊 池 哲 彦

1. 目的 盲児に容積の大きさが異つてゐることを認知させたならば、果して重量錯覚が起るであらうか。

2. 実験 Vpn: 宮城縣立盲学校児童 15 才—17 才 先天盲 10 名、後天盲 10 名。

刺激: (1) 標準刺激、600gr  $9 \times 9 \times 9$ cm 1 個、同じく  $23 \times 23 \times 9$ cm 1 個 (シャルペンティエ箱) (2) 比較刺激  $9 \times 9 \times 9$ cm、600gr  $\pm 75$ gr、50gr、25gr、0gr 計 7 個、系列はシャルペンティエ箱及び  $9 \times 9 \times 9$ cm 箱に対して比較刺激 7 個が random な順序で継時的に比較される。前者を L 系列、後者を S 系列と便宜上呼ぶ。第一日には大きさを知られないようにしてはじめ、S、次に L、第二日は大きさを教えて S、L の順に与える。第一日と第二日の間隔は二日乃至四日、刺激呈示時間は  $2.5 \pm 0.5$ sec 刺激間隔  $4 \pm 1$ sec 判断は  $5 \pm 2$ sec できるようにする。判断は 5 件法、結果の整理に於いては 3 件法に直す。実験に先立ちメトロノームを用いて拍子を学習させた。

結果の整理は Guilford に従つて D% を算し、それに対して A. L. Edwards に従つて分散分析及び岩原氏に従つて t 検定を行い分析した。

主たる検定の結果は次の通りである。

- (1) 第一日及び第二日に於ける L—S の差はいづれの群に於いても有意である 1% 水準
- (2) 第一日に比し第二日に於ける錯覚量の差は先天盲に於いては、L 系列も S 系列も有意でなく、後天盲に於いてはいづれも有意であつた。(1% 水準)
- (3) 後天盲に於ける L 及び S での錯覚量の増加にはいづれも有意でなかつた。

## 検討と結論

従つて、先天盲に於いては、大きさを知らせるといふ手続きによつて錯覚量はふえず、知らせなかつた場合と恒常の錯覚を示している。後天盲に於いては L・S. とともに大きさを知らせると消極的錯覚の量がふえる。このことは、触覚的フィードバックが視覚のそれに比して程大なるものであろうことを暗示するが Control がないので言い切れない。しかし、この場合後天盲では S の錯覚量も増えているがその説明は Set に求められるだろうと思われる。先天盲に於ける S の錯覚量が増えなかつたことはその重量知覚の分化の程度の差として理解されるであらう。先天盲の70%は、第一回目にすでに大きさの差を知つてしまつていたが、大きさの知覚の影響か表象の影響か不明であるとしても、それは重量知覚に影響を与えていると考えられる。

### 3. 垂直認知に関する実験的研究 (第3報告)

#### — 垂直認知を規定する要因について —

東京大学 藤田 厚

〔目的及び実験上の仮説〕 視覚的な手懸りのない空間に於いて身体を傾斜するとアウベルト現象を生ずるが、この現象には客観的垂直が身体傾斜と同方向に傾いて見える E 現象と、反対方向に傾いて見える A 現象とがある。これらの現象は見かけの垂直が身体傾斜と反対方向に傾く事、同方向に傾く事によるものである。一般的には E 現象は身体傾斜が比較的小なる際に、A 現象は大なる際に生ずるものである。さて、我々は明るい空間に於いて、多くの場合、客観的に垂直なる線分を網膜の垂直子午線上に結像せしめて来たため、その上に結像する線分を垂直と認知するに至つていられる。

身体が傾斜すると眼球の反対廻転が生じ、網膜の垂直子午線の傾きは身体長軸のそれより小とはなるが、この傾斜した垂直子午線を尙も我々は垂直と認知する傾向を持つている。私は見かけの垂直の位置をこゝに求め、「見かけの垂直は網膜垂直子午線と一致する。」と仮説する。

然し、一方我々の平衡感覚、筋感覚が働く限り垂直子午線の位置から自己の認知された身体傾斜をもどした位置、いわば補正位置を垂直と認知する傾向を持つと考えねばならない。この事から E・A 現象は身体傾斜の認知の不完全によると考えられるのである。即ち E 現象は身体傾斜を正しく認知する事、或は過大評価する事によるのであり、A 現象はそれを過小評価する事によると考えられるのである。こゝで私は「見かけの垂直は補正位置と一致する。」と仮説する。以上の二つの仮説に基き見かけの垂直を吟味する。

〔方法〕 暗室で20人の被験者の各々の身体を左側方に0° から180° まで30° 区切りで傾斜せしめ各身体傾斜に於いて被験者の前額面5mに呈示された長さ1m、巾0.5cmの照線により残像法で網膜垂直子午線の位置を測定し、直ちに照線を調整して見かけの垂直を認知せしめる。その際言語報告によつて認知された身体傾斜を時計の文字盤で報告せしめる。

〔結果及び考察〕 各身体傾斜に於いて眼球の反対廻転は微量であり、見かけの垂直と網膜垂直子午線は一致しない。又見かけの垂直は補正位置とも一致を示さない。見かけの垂直は垂直子午線と補正位置の間に示されるのである。

この事から、見かけの垂直は二つの位置の相互関係により規定されることが考えられる。反対廻転が大であればある程、身体傾斜を過大評価すればする程 E 現象は大、A 現象は小となるのであり、逆に反対廻転が小であればある程、身体傾斜を過小評価すればする程 E 現象は小、A 現象は大となると考えられる。更に二つの位置関係のみでなくそれぞれの位置を垂直とする傾向の相対的大きさを考えねばならない。垂直子午線を垂直とする傾向が大であればそれだけ E 現象は小、A 現象は大となり、補正位置を垂直とする傾向が大であればそれだけ E 現象が大、A 現象が小となると考えられるのである。結局、垂直認知を規定するものは垂直子午線と補正位置の二つの位置関係と、それぞれの位置を垂直とする傾向の相対的大きさである。

### 4. 色感覚の精神物理学的操作の一方法に就いて

#### — スペクトル視興奮度曲線による色覚の研究 (其の1) —

茨城大学 木村 俊 夫

色覚心理学に於いては刺激としての色や色感覚の数量的表示は常に必要とせられる。ところで刺激としての色の表示には次ぎの如き方法がある。

- |              |                                  |
|--------------|----------------------------------|
| (1) 物理学的方法   | スペクトル・エネルギー曲線                    |
| (2) 精神物理学的方法 | CIE-RGB System<br>CIE-XYZ System |
| (3) 心理学的方法   | Munsell Color Chart System       |

また色感覚の表示には所与の色感覚と等色する色により可能であり、この方法としては上記の(2)或いは(3)が用いられる。然しこの方法は間接的であると共にその色感覚の成立条件を十分に含蓄しない。

そこで  $S_{\lambda} = E_{\lambda} V_{\lambda}$  なる式を考える。 $S_{\lambda}$  はスペクトル視興奮度、 $E_{\lambda}$  はスペクトル・エネルギー、 $V_{\lambda}$  はスペクトル比視感度とする。つまり波長別明ルサ感度である。従つて  $S_{\lambda}$  は波長別明ルサ感覚曲線を表わすものである。従つてまた  $S_{\lambda}$  は色感覚曲線を表わすものでもある。

CIE-XYZ System の  $Y = \int E(\lambda) \bar{y}(\lambda) d\lambda$  の  $\bar{y}_{\lambda}$  は実質的には  $V_{\lambda}$  と同じ性格のものであるが、これは固定した順応水準に於ける多数人の  $V_{\lambda}$  の平均値で固定した値しか与えられていない。これに対し  $V_{\lambda}$  は様々な順応水準に於ける特定人の値を取り得る。また  $\bar{y}_{\lambda}$  は  $Y = \int E(\lambda) \bar{y}(\lambda) d\lambda$  なる形に於いてある限りそれは主体の側の感度を表わすよりは客体の側の刺激値を表わすものである。これに対し  $V_{\lambda}$  はどこまでも主体の側の感度を表わすものである。

そこで  $\rho_{\lambda}$  なるスペクトル反射率を持つ色紙を種々の順応水準に於いて見る時、その色の見えは  $S_{\lambda} = E_{\lambda} \rho_{\lambda} V_{\lambda}$  により算出できる。即ち  $E_{\lambda}$  なるスペクトル・エネルギーを持つ色光下で  $\rho_{\lambda}$  なるスペクトル反射率を持つ色紙を見る時は、十分に色光順応しているとすれば  $S'_{\lambda} = E_{\lambda} \rho_{\lambda} V'_{\lambda}$  で色の見えが算出できる。

但し、今日のところ  $V_{\lambda}$  に関しては Achromatic-general-Iuminance adaptation 及び Chromatic-general adaptation の資料しか報告されていない。然し、順応には General adapt の他なお Local adapt や Lateral adapt があり、Chromatic-general adapt の十分な資料と共にこれらの資料を獲得することが必要である。これらが十分に獲得できれば、そして更に  $V_{\lambda}$  を構成する基本的スペクトル比視感度としての  $V_{\lambda} = V_{R\lambda} + V_{G\lambda} + V_{B\lambda}$  の右辺各項が獲得できれば色覚を数量的に取扱うことが極めて楽になる。

ところで、 $V_{\lambda}$  は  $V_{\lambda} = \frac{S_{\lambda}}{E_{\lambda}}$  である物理的的刺激と心理的の反応との媒介者であり、この意味に於いて精神物理学的な値である。

## 5. 直線と弧の組合せによる錯視

都立大学 今井省吾

【目的】この図形に錯視がみられるとすれば、それは勿論 Figur 周辺に生ずる場効果によるものと考えられる。ところで、この図形は線分が角的に布置する図形と形態的に類似している。従つて、錯視の規定要因としては、(1)直線と弧の隔り、(2)弧の曲率、又は弧と直線となす角的布置、さらに(3)直線弧の長さ太さ、などが挙げられる。こゝでは、主にこれらの点について条件変化、量的測定を実施して場構造に吟味を加える。

【方法】実験図形は2種、(A)平行線の間或る曲率の弧を併置、(B)直線を挟んで曲率の等しい弧を両側に併置、(C)Gibson 図形。錯視量(D)はすべて或る半径  $r$  の円(曲率  $1/r$ )を一定の長さの弦で截りとつた円弧に等しいと仮定。変化刺激  $V$  は各種半径の弧(直線を含む)図形。また  $D$  を角的偏向量で表わすため量的指標として  $r(1/r)$  の代りに弧の両端における接線の角度  $\theta$  (弦の長さ  $\times$  曲率  $= 2 \sin \theta$ , 弧を含む、全円の中心が弦と張る中心角の  $1/2$ ) を採る。図形は何れも黒インキで白画用紙(18 $\times$ 25cm)に描く。標準刺激  $S$  (実験図形)の横に  $V$  を置き等価刺激値を求める。極限法。直線の長さ(標準5cm)、弧の弦の長さ(5cm)、線の太さ(標準0.25mm)。観察距離1M。被験者5名。実験計画、ラテン方格・乱塊法。なお、 $D$  の値は各条件下の平均値  $\bar{D}$  と基準条件の誤差  $N$  との差 ( $\Delta \theta = -\bar{\theta} N$ ) で示す。

【予備実験A】A図形。「弧の曲率一定、変数平行線の長さ、のとき弧の彎曲(D)はどう変るか」。弧の半径  $r$  10cm, 平行線の長さ  $l$  2~80mm。弧と平行線との最短距離  $d$  (弧の両端又は弧の midpoint から直線まで) 3mm。(結果)  $l$  2~10mm で  $D$  の変化は急激 ( $1.20^{\circ} \sim 1.70^{\circ}$ )、 $l$  20~80mm で  $D$  は飽和殆んど一定 ( $1.80^{\circ} \sim 1.90^{\circ}$ ) となる。

【実験1a,b】A図形。「 $r$ 一定、変数  $d$  のとき  $D$  はどう変るか」。(a)  $r$  10cm,  $d$  2~35mm, (b)  $r$  50cm,  $d$  2~35mm。(結果) a, b 何れも  $d$  が大きくなると  $D$  は双曲線又は指数函数的に減小。(a.  $2.35^{\circ} \sim 0.66^{\circ}$ , b.  $2.30^{\circ} \sim 0.39^{\circ}$ )。

【吟味実験 1a,b】A図形。「平行線の  $D$  はどうか」。(a)  $r$  10cm,  $d$  1mm, (b)  $r$  50cm,  $d$  1mm。(結果)

a, b 何れも弧の曲りと逆方向に歪化、弧の両端に近い直線 L の方が弧の中心に近い直線 L' よりも、また a は b よりも大きな歪曲 (a. L0.97°, L'0.54°; b. L0.55°, L'0.30°) を示す。

〔予備実験B〕 B図形。「d一定、変数 r のとき直線の D はどう変るか」。d 1mm, r 3~50cm。

(結果) r が増すと D は弧の曲りと逆方向で増大、極大を通過して漸減する。(max. r 20cm で 3.82°)。

〔実験 2 a, b, c〕 B図形。「r一定、変数 d のとき直線の D はどう変るか、r の太さ S も変数のときどうか」。r 30cm, d 1~30mm, l の S 一定 0.25mm; r の S, (a) 0.25 (b) 0.5 (c) 1.0mm。(結果) a, b, c 何れも d が大きくなると D は指数函数的に減小、S による D は b が最大、a, c は小、a がやゝ大きい。(d 1mm で、a. 2.91°, b. 3.40°, c. 2.71°)。

〔結論〕 量的吟味により、直線と弧の組合せ図形の場構造は直線分の角的布置による図形のそれと極めて類似すると考えられる。

## 6. 応用視知覚研究(10)

### —レーダー・スクリーン上における指標の位置判断—

|        |     |   |   |
|--------|-----|---|---|
| 東京教育大学 | 小保内 | 虎 | 夫 |
|        | 森   | 孝 | 行 |
|        | ○入  | 敏 | 男 |
| 日本大学   | 浅井  | 正 | 昭 |

(目的) 一般に、レーダー操作のやり方は、スクリーン上に投射された地図を区画する同心円があり、レーダー操作者はこの円内に現れる光点 (pip) の方向および円の中心からの距離を判定することである。本報告はこのレーダー・スクリーンに模したテスト用紙を作り、これについて基礎的実験を行った結果である。

(方法) 白紙に半径 10cm, 20cm の同心円を描き、これに 3 種類の距離のスケールを与えた。すなわち、A スケールでは半径 5 および 10 mile, B スケールでは 10 および 20 mile, C スケールでは 20 および 40 mile を仮定して判断させた。この各々について方向 0°, 30°, 240°, 270° の 4 座標軸を取り、各軸を 20 等分した点を刺激 (光点) 呈示位置とした。一つのスケール毎に 19 枚のテスト用紙を用い、各用紙には同心 2 円が描かれており、その内部には 1 箇の刺激点がマークされている。被験者は一定時間 (10 秒) 内に各用紙のマークされた位置と円の中心からの距離をすみやかに判定することが課せられる。被験人員は大学生 30 名、これを方向の違いに従い 2 群 (0°, 270°) (30°, 240°) にわけ、さらに各群を 3 群にわけた。(1 群 5 名)

(結果) 誤差の平均およびその標準偏差を求めた結果以下のことが明らかとなった。

(1) 各円の輪郭線上のマークに対する判定が正確であり、2 円の中央点のマークの判定がこれに次いで良く、その他の点では著るしく悪い。円の大きさのスケールが変化しても結果はほぼ同様である。

(2) 円の輪郭線上以外の場所では、判断は過大視される傾向がある。たゞし過小視もわづかながら認められる。なお、Bartlett 等の結果のように誤差が円の中心からの距離の函数とはならなかつた。

(3) 誤差が距離により増減する Bartlett のいわゆる rounding effect は C スケールに於ては著るしいが、A, B スケールではそれほどではない。

(4) 刺激呈示位置の方向を異にしても、以上の事象にはあまり変化がない。

(5) A, B, C スケールの差による位置判断の誤差は A, B, C の順に大きくなる。これはスケールの単位 (1 step) が A の場合は 0.5cm, B では 1cm, C では 2cm と粗になつていから相対的に誤差も大きくなる結果である。上述のように、円周上以外の位置において誤差の著るしいのは恐らく被験者が、位置、距離を数字的に言表する場合に特殊な判断傾性に影響されるものと思われる。

## 7. 交通事故防止に関する心理学的研究

### —交通事故と地形条件について—

|      |     |   |   |
|------|-----|---|---|
| 日本大学 | 小保内 | 虎 | 夫 |
|      | ○浅井 | 正 | 昭 |

交通事故防止に関する研究には多くの研究方法が考えられる。われわれは交通事故に影響を与えている空間的条件について研究を進めているが今回はその一部として地形条件と交通事故との関係を警視庁交通第二課提供の資料を基にして攻究した結果を報告する。

## 1. 交通事故多発地点と自動車交通量および歩行者交通量との関係

交通事故多発地点として昭和29年度、30年度において交通量調査の実施された交叉点30を選出した。これら30地点の事故件数と自動車交通量、歩行者交通量との間の列位相関を算出。自動車交通量との相関は昭和29年度0.695、30年度0.52であり、歩行者交通量との相関は昭和29年度0.34、昭和30年度0.44であつた。この数値から交叉点における交通事故と自動車交通量との間には比較的高い関係があることが窺われる。

さらに29年度において交通事故の発生した交叉点のうちから最高地点より10順位、最少地点より10順位の地点を選出、それぞれ事故件数と自動車交通量および歩行者交通量との間の相関を算出したところ前者では0.68後者では0.17最少10地点では事故件数と自動車交通量との相関係数0.15歩行者交通量との相関は0.36で、頻発箇所では自動車交通量と、最少地点では歩行者交通量と事故との相関が認められる。この事に関しては将来さらに検討を加える必要がある。

次に昭和30年度と昭和29年度の間に交通量調査の実施された同一地点について事故数の列位相関係数は0.89自動車交通量は0.95であり、これらの数値は各地点が殆ど同程度の交通事故の潜在危険性を持ち、同一の割合で事故が発生していることを示しているものと考えられる。

## 2. 交叉点における事故発生箇所の分析

交叉点における交通事故発生箇所は一見規則性に乏しいように見えるが、これを交叉点における四方向の交通量を各地点別に直行、右折、左折の交通量の全交通量に対する百分比を算出して整理すると次のようなことが明かにされる。すなわち事故は交叉点横断前に多くの事故（主として連続進行中に発生）が多く、横断後の地域に少い。この現象は交通信号によつて交通の流れが一度中断されることに原因していると考えられるが、多くの交叉点では電車の停留所が横断前の地域に設置されていることは検討の必要があらう。次に交叉点における右折交通が直進交通と接触する地点として交叉点内を四分割して見ると接触点における交通量が多い部分には多数の事故が発生している。これらの地点では事故の原因は加害車が横から来たものへの衝突事故が大半を占めている。この事に関連して交叉点における中心部における右折交通の内廻、外廻の問題について検討する必要がある。

この点に注意するならば事故を軽減せしめ得るであろう。

## 8. 高速自動車道の交通安全度について

攻玉社短期大学 安 東 功

高速自動車専用道路における事故のうち不思議な例（東京都八王子市内）は自動車は必ずカーブの内側の駒止柵を打ち破つて何回もノリシタに転落している。力学上から見れば遠心力によつて外側の駒止柵を破る筈である。この原因は運転者の心理的錯覚によるものとして当事者は判定している。

本題はこの錯覚に対して検討を加え、更に交通安全度と云う観点から、事故の防止策について私案を述べたものである。但し演者は専攻が土木工学であるため、工学的に傾く嫌がある。

### (1) 心理的錯覚とは如何なる種類のものか？

この道路は道路構造令による構造上の欠陥はないが、特殊な錯視を引き起し易い構造のものである。而してその錯視は正常なる知覚であつて、斜視的錯視（仮称）とも云うべきである。詳言すれば、一般に高速自動車道は地図で見ると鉄道線路の如く直線と円カーブとの連続からなつてゐる。しかるにこの円の部分を斜の方向、すなわち自動車の内から眺めると、誰が眺めても扁平な楕円形に見える。特に前方が降り勾配の地形である場合にはますます扁平な急カーブに見える。但しその道路は周囲に遠近視覚の手がかりのない築堤道路の如きものに限る。なお、この斜視的錯視は恰もシネマにおけるように、これを見る位置によつてだけ、その形態が変わるのであるから物理的錯視または幾何学的視的錯視とは異なる。

運転者（時速90キロ）は問題であるカーブ（築堤道路）にさしかかつた際、実際の円カーブ（半径200米）を急カーブの楕円形（曲率半径20米ぐらゐ）として知覚錯覚を起す。従つて事故は運転者がこの斜視的錯視を直感すると同時に、条件反射が働いてハンドルを切り過るために起るのであろう。

### (2) 事故防止策に対する私案

- (a) 運転者にカーブの半径の大か小かを正しく知覚させる標識を設置すること。
- (b) 安心感を与える駒止柵を徹廃して運転者の心理（危険）に訴えること。
- (c) 米国で実施してゐる岩乗で高価な鉄板製の連続壁を構築すること。

以上、このうち(c)を最良と思うが、心理学に関係が薄い。(a)は遠近を知覚させるため、両眼の視差によ

つて生ずるステレオ視一網膜に及ぼす実体視差的錯視であつて斜視的錯視を cover するに足るもの一を直感させる如き標識器を掲げるものである。但しその形状、数量、位置等は各現地について、それぞれ実施研究を要する。(b)は船を岸壁などに繋ぐ場合、緩衝材(フエンダー)を徹夜して置くと、逆に船を痛める程度が少ないと云う古智になぞらえたものである。

## 9. 精神テムボに関する基礎的研究(第12報告)

### 一その遞減現象について一

早稲田大学 ○望三浅 月島井 二邦 稔郎二

目的：本研究は精神テムボの打叩を行わせている時、刺激として暗算を同時に課した時の打叩と暗算を課さない時の打叩とを比較し如何なる変化が現われるか、又同様の比較を精神テムボより速い打叩の時、及び精神テムボより遅い打叩の時に行い、それぞれその変化を検討しようとしたものである。

手続：被験者は男女各4名計8名の高校生で先ず最初の5日間精神テムボを個人毎に測定すると共にそれを中心として課題テムボを決定し、これを習得させた。本実験は第1より第5の五つの実験よりなり、それぞれの実験は相互に影響しないように1~2週間ずつの間隔期間をおいて昭和30年9月~11月に実験した。第1実験では精神テムボで1分間打叩、1分間休憩と交互に6回行わせ、最初と最後の打叩を除く4回の打叩にはそれぞれ1桁又は2桁の数を1分間の打叩中10秒毎に計6数字与え、それを暗算で加算させると共にその間の1分間毎の打叩数を測定した。第2実験では暗算を行わず単に数字をきかせただけで、その他の手続は第1実験と同様に行つた。第3実験では暗算を課する回数を2倍の8回にしたほかは第1実験と同様な手続で行つた。第4実験では精神テムボより速い打叩をさせながら、又第5実験では精神テムボより遅い打叩をさせながら、それぞれ第1実験と同様な手続(但し終りの暗算なしの打叩を2回とする)を行つた。

結果：第1実験では暗算をさせた場合、第2実験では数字をきかせた場合、いずれも何ら刺激を与えない最初と最終の1分間の打叩数に比し、かなりの減少が見られた。この傾向は暗算を課す回数を2倍にした第3実験に於ても同様であつた。第4実験でもその減少は見られその割合は第1実験に比べ非常に著しく見られた。第5実験では以上の実験結果とは逆に暗算時に打叩数の増加を示した。

以上の結果を総合すると、(1)暗算を行わせる時又は数字をきかせる時、その打叩数が減少する傾向が精神テムボの打叩及び精神テムボより速い打叩の時見られた。(2)上記の打叩数減少の割合は精神テムボより速い打叩の時極めて明瞭であつた。(3)精神テムボより遅い打叩の時は逆に暗算時に打叩数の増加を示した。(4)、

(3)の事実は(2)の事実に相反するよう見えるが、実は同一の傾向、即ち暗算時において打叩数は精神テムボを基準としてそれに近づく傾向を示したものと思われた。なおこの傾向は我々の第4報告において不解決事態において課題テムボが精神テムボに復帰するという結果を得ているのと類似の傾向であり、暗算という云わば解決可能な事態でもかゝる傾向が推測せられた。

## 10. 児童生徒の生活態度に対する調査の分析的研究 その1

### 一本研究の概要と問題点の抽出一

名古屋大学 ○中山 白 石 一 誠  
山 嶽 治 磨  
本 輝 夫

児童生徒は学校生活を通じて成長発達しながら将来に対して一定の方向と目標を持つようになる。この過程において彼等は一定の生活態度を維持しながら、それらの相互作用として将来に対する態度を形成して行くことが可能であるように思われる。そこで吾々は巨視的に彼等の生活態度を(i)人間関係に対する態度(ii)生活環境としての学校生活に対する態度(iii)素質などを含めた将来に対する態度の三つの主要な側面から考察して、これらの側面がどのように関係し合っているかを究明すると共に、これらを分析するのに如何なる方法が適用されるべきかについての考察を意図して本研究に着手した。

研究は質問紙法により、発達段階の相異をもつた児童生徒の反応を分析することによつて遂行された。調査の対象となつた児童生徒は千葉県下の小学生男女100名(二校)中学生男女100名(二校)高校生150名(三校)で調査は昭和30年12月~31年1月に施行された。(本研究に直接利用した対象の数である)

一次集計では今後の分析の基礎として、以上の三側面の夫々の中心的支柱となる items をその内容及び反応分析を考慮して抽出すると共に、以後の集計に適切な group に纏める試みがなされた。

具体的には吾々は (i) 人間関係に対するものとして、友人、教師、成人、家族に対する態度、(ii) 環境 (学校生活) に対するものとして、学校生活における興味の所在、教科に対する態度、(iii) 将来の進路に対する態度として、両親の希望する職業、本人の希望する職業、その職業に進むための努力、ならびにその困難点を抽出して以後の集計の基盤を構成した。

二次以後の組合せ集計に資するために、これらの items の選択肢に含まれる Continuum を明確にすると共に、各 items 共2~3の group に分類された。二・三の例を上げると、対教師関係では、(I) 教師に対して好意的なもの、(II) 中間的なもの、(III) 教師に対して不満又は反抗的なもの、が教師に対する態度の Continuum の上で分類され、学校生活では、(D) 学校生活に対して積極的なもの (教科学習に対して積極的な興味を示すもの)、(E) 中間的なもの、(F) 学校生活に対して消極的なものが同様に分類され、将来の進路では、希望する職業について親子の一致、不一致が分類された。

これらの group に対しては夫々各側面に含まれる他の items との関係が分析され、その妥当性に関する考慮が払われている。

## 11. 児童生徒の生活態度に対する調査の分析的研究 その2

### —問題点の究明への接近—

名古屋大学 白中 石 一 誠  
○山 嶽 治 鷹  
夫

こゝでは一次集計によつて抽出された item が定義していると考えられる Continuum から、

- (1) 更に新しい Continuum をいかにして構成していくか。
- (2) それらの Continuum はいかなる構造を持っているか。
- (3) それらの Continuum はいかなる意味づけが可能であるか。

等について考察するのがこの段階の主要なねらいである。紙面の関係上二・三の具体例を以下に示す。

#### ① 対教師関係に関する Continuum の設定

こゝで対象とした教師に対する態度には各種のものが含まれているが、子供達が最も強く反応するもの (1) と、次に強く反応するもの (2)、の兩者を総合して考察するとそこにそれらの構造の大略が表現されるのではないかと考えられる。そこで先ずこの Continuum の一端に考えられる教師に対して (1) (2) 共非常に好意的な態度を示すもの (A type) と、他の一端として (1) (2) 共非常に反抗的なもの (C type) とを考えその間に一つの Continuum (ABC) を設定した。

#### ② 学校生活に対する態度に関する Continuum の設定。

学校生活に対して積極的な態度を示すもの (D type) と消極的な態度を示すもの (F type) との間に Continuum (DEF) を設定した。

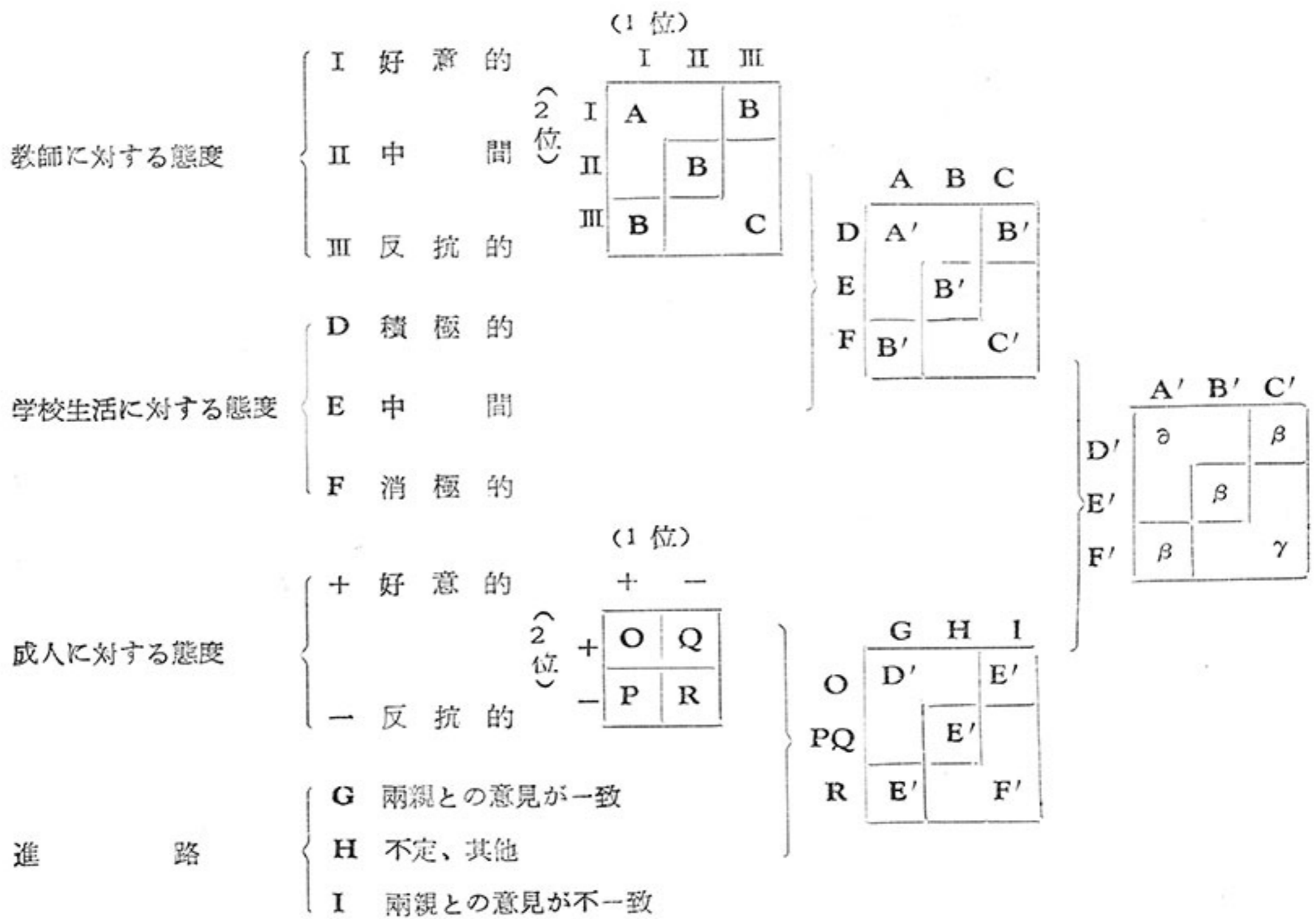
以上の様にして先ず基底となる Continuum を設定し、これらの Continuum 上の各調査対象の反応分布を考察すると共にこれに基づいて次の段階の Continuum の設定へと進んだ。

#### ③ Continuum (A'B'C') の設定

教師に対して好意的な態度を示し (A type)、且つ学校生活に対しては積極的であると見られるもの (D type) と、反対に教師に対しては反抗的 (C type)、学校生活に対しては消極的 (F type) なもの間には一つの Continuum を考えることが出来る。

前者を A' 後者を C' として (A'B'C') の Continuum を設定し、これらの Continuum 上の各種の分布を考察した。

以下これらを含めてこゝで考察した処理の一部を示すと下表の様である。



## 12. 児童生徒の生活態度に対する調査の分析的研究 その3

名古屋大学 ○白 石 一 誠  
 中山 嶽 治 鷹  
 山 本 輝 夫

### 分析結果の一例

本研究(その2)で報告した手順に従って行つた分析の結果の一例として、 $\alpha$ ,  $\beta$ ,  $\gamma$  群の構造について述べることにする。ここで $\alpha$ 群と云うのは教師に対して尊敬的態度をもち、学校生活では学習することを愉快と感じていて、将来の進路については両親の期待するものと本人の希望とが一致しているし、更に大人に対しては善意をもつていふと云うような回答を行つた人々を中心として、それに近い反応をした人々を含めた群である。これに対して $\gamma$ 群は教師に対して不満乃至は反感をもち、学校生活ではあまり満足されていなくて、両親の期待する進路を自分では希望しないで、大人に対しても悪意をもつ乃至は非難したいと云うような回答をした人々を中心とした群である。 $\beta$ 群は $\alpha$ ,  $\gamma$ の両群の中間的なものである。この三群に分けた割合を学校段階別、男女別に分けて比較すると有意な相異を示している。 $(\chi^2$  検定による有意性)。即ち小学校においては $\alpha$ 群が多いのが、高校においては $\gamma$ 群が多く出て来ることになり、その傾向は女性においてより顕著であり、更に男女間は各学校段階によつて相異していることが知られる。他の例としては $\delta$ ,  $\epsilon$ ,  $\zeta$ の三群に分けられたものがある。 $\delta$ 群は両親が子供を理解して呉れている満足感をもち、大人に対しても善意をもち、教師を尊敬しているし、学校の学習に満足している、と云うような回答をした人々を中心としている。 $\zeta$ 群はその反対の回答をしている人々の群、 $\epsilon$ 群は兩者の中間群である。この三群の割合も男女間には有意な差異が認められ、小学校で $\delta$ 群が優勢なのが高校では $\epsilon$ 群、 $\zeta$ 群にその優勢が移るような傾向が認められる。

### 本研究の總括と反省

この分析的研究で用いた方法の特質は、組合せ方法であり、又極端と考えられるものを左右に分離して二群とし、更に中間群を設ける群別法をとつている。これによつていくつかの items の回答から得られた重要と見做す側面をからみ合せて子供の態度を把握して行こうとしたものである。云わば外接多面体的接近法をもつて分類した類型間の構造の相異を男女別、学校段階別に比較検討したものである。

更に附帯調査として行つた学校側で作成して呉れた学業成績、知能検査その他の検査成績、家庭状況等々とからみ合せて考察する方法を研究して見たいと考えている。



標本校は協力理解して呉れる教員のいる学校に限定したため、任意抽出ではなかつたが、大きな研究調査の予備的段階としては選定標本とならざるを得ない。しかし地域別、学校段階別、男女別比較の可能なような工夫をして選んだものである。

### 13. Absolute pitch に関する実験的研究

東 北 大 学 泉 山 中 三

#### 発 表 要 旨

Absolute pitch とは「与えられた音程に対して、それを他の音程に関係づけず、それ自身として聞いて、しかもその音程を正しく表現すること」と定義されているが、歴史的には大別して二様の考え方を示す。即ち、ある音程は他の音程とは異なる *Qualität* をもつて居るのであり、人はそれを生来的聴覚の周波数特性をもつて明瞭に体験する (Reves) という素質説と、かかる能力は所謂絶対音感なる精度をもつたものではなく、全く経験的手掛りを得てなされるのであり、正しくは準絶対音感と呼ばれるものがあるという (Bachem) 二説がある。楽音を用いて個人のもつ能力を測定した研究は多いが、ピアノその他の楽器を用いた実験では音色、音量の特色が与える手掛りが大きく批判される。

音楽教育に役立つ Absolute pitch は果して、教育的に獲得された音感であるか。実験は音楽的に訓練を受けたものと、特別訓練を受けていないものについて行い、個人別な差とグループ間の差について考察された。

実験手続きは一列の6個の違った音程を予め記銘させ、それに番号づけをして検査日に再認させるのである。刺激音は発振器よりの純音で440振動から20)メルずつ隔つた系列と、100, 50, 20メルと隔つた系列の4種である。これを集団的に実施した Subjects は小学生グループ、大学生、成人のグループで各々音楽的に訓練を受けたものと、受けていないものにおいて結果を整理した。

- (1) 音程の絶対判断は音程距離に近い程むづかしい。各系列の成績の順位が一定。
- (2) 年令的グループ内の S, D は少なかつた。
- (3) 再認を日を置いて連続的に行うと成績が上昇する。
- (4) 音楽的に訓練を受けたものが一般人に比較して成績がよい。
- (5) しかしながら小学生について、担当教師の音感に関する評価を求め、その順位と先の成績との相関を求めたが、有意ではなかつた。

結局以上の如きテストに於いては、如何なるグループ内にあつても特別な能力を示すものは見出されず、各系列に同様な困難度の傾向を示した。更に絶対音感の所有者は訓練を受けたものに多く、日を置いての練習効果は教育的成果を予想されるものがある。

### 14. 筋活動の両側効果についての研究

東 京 教 育 大 学 太 田 鉄 男

実験の一般目的 筋の活動の性質を明にするために、その一部として活動の両側関係について従来の諸研究を吟味し検証するにある。

実 験 右前腕の屈筋作用と伸筋作用の系統的訓練をおこない、その両側性効果を見ようとするものである。

#### 実験手続

1. 右上腕を固定し、前腕の屈筋が十分に動かせるようにした。それ以外の筋肉は支持力が入らぬようにさせ腰掛の姿勢で行う。
2. 筋力の訓練として、極大荷重に余り接近せずしかも至適荷重よりも重い8ポンドと6ポンドの鉄重鈴を各人に応じて用いた。
3. 実験群と統制群各6人づつの被験者を小学5年生の1クラスから選んだ。
4. 実験群は25日間鉄重鈴を右手に持つて屈伸を1日1回5分間の割で25日間行つた。5分間の回数が多くなるように訓練した。
5. 両群は実験前と実験直後及び実験後10日目に握力計のテストをした。

結 果 (1) 実験群は訓練直後増加しているが、統制群は増加していない。両群の差は 0.05 の危険率で統計的に有意である。

(2) 実験群は実験後は急速に握力が減少する。

考 察 (1) 両側性効果についての訓練は、筋の持久性の増進過程に見られる急性局所疲労に対する被験者の tolerance の上昇により、筋の疲労感の耐久性が他の筋に移調したと考えられる。

(2) 運動の巧緻性 (motor coordination) が訓練の効果として両側に移調し、拮抗筋や他の筋による運動の干渉をさけることもありうる。

(3) 両側性の筋力の増加が練習停止後に急速に失われていくのは、かゝる増加が本質的には訓練における強い努力の効果によるものであることを suggest している。McCley はかゝる均合には交感神経及び内分泌腺の状態に関係し、神経興奮の強さも関係している、と述べている。Forbes は反射弧に見られる興奮或いは禁止の irradiation の効果がかような複雑な随意運動における神経系にも見られると述べている。

(4) 以上のことは次の如き Davis の研究により支持されうる。身体一部の筋の興奮が多くの筋の興奮を生じ、しかも簡単な反応でさえも広汎に亘つて構造的パターンがあつて、適応の体制として各部位の筋が参加すると考えられる。

(5) かゝる意味において筋の興奮或いは禁止の性質及びそのひろがり、とそのパターンの研究が痛感される。

## 15. 催眠状態の生理心理学的基礎 (第一報告)

### — 覚醒時と催眠時における GSR の比較 —

東京教育大学 ○原 野 廣太郎  
大 野 清 志

今迄催眠に関する実験的研究は数多くなされてきたが、それは "催眠状態" というあまり明確に規定されない現象に基いたもので、その基礎的実験は極めて少くない。本実験研究は、催眠状態の生理心理学的な基礎的事実を明らかにすることによつて、催眠状態の本質を究め、更にその臨床的応用への手懸りを提供しようとする。本報告には、次の五つの点に関する実験結果が含まれる。

(1) 覚醒時と催眠時における各種刺激に対する GSR, (2) 催眠時における GSR に及ぼす暗示の効果、(3) 催眠時の前後における覚醒時の GSR, (4) 覚醒時および催眠時の各刺激の潜時、(5) 覚醒時、催眠時に現われる GSR の特質。

装置及び刺激：(1) 心電図インキ書き記録器 (心電図および GSR の記録) (2) 刺激として、(イ) 光 (一辺 6cm の正方形曇りガラスを 6V 電池で照射) (ロ) ベル、(ハ) ブザー、(ニ) 暗算 (2けたの掛け算) (ホ) 痛刺激 (ペン先で刺す)

手続き：実験過程は次の三つに分かれる。(1) 被験者を暗室に導き、電極を付けて約 10 分後覚醒状態で各刺激光— 3sec, ベル— 1sec, ブザー— 1sec, 暗算— 瞬間、痛刺激— 瞬間) に対する GSR を記録、(II) (I) が終わると、直ちに催眠状態に誘導し、(I) と同手続きで GSR を記録 (III) (II) が終わると、被験者に対して、(イ) positive (実際には刺激が与えられないのに、与えられると暗示する) (ロ) negative (刺激が実際に与えられているのに、与えられないと暗示する) の両暗示を与えて各刺激の GSR 記録 (IV) (III) の終了後、被験者を覚醒状態に戻し、(I) と同じ手続きで GSR を記録。

被験者：小学校六年生男子一名、同四年生女子一名、計二名。

結 果：(1) 催眠時においては、覚醒時に比べて各刺激に対する GSR は減少するかもしくは消失する。これは睡眠時に類似している。(2) negative の暗示によつて GSR の禁止的效果、positive の暗示によつて GSR の促進的效果が見られる。これは痛刺激 (さす場合) に顕著である。(3) 催眠状態をはさむ前後の覚醒状態における GSR は、著しく異り、後の覚醒状態の方が前の場合より大きな反応を示す。この事は、催眠状態は自律神経系反応に対し禁止的效果と同時に潜在的促進効果をもつ事を示している。(4) 催眠、覚醒両状態における GSR の潜時は、催眠状態の方が大きくなる傾向があるが、厳密な測定と結論は今後の研究に待たねばならない (5) 一般に暗算は両状態であまり変化がなく、ベル、ブザーはやや異り、痛刺激は暗示の効果が著しい。

## 16. 脳波の心理学的基礎研究 (3)

日 本 大 学 ○山 岡 淳  
岡 本 有 健  
長 沢 恒

心理学の分野、特に個内変異や個間変異の研究に脳波を用いる場合、電極装着の部位による脳波の変化が重要な問題となってくる。われわれは先に本学会第19および第20回大会において、後頭部領域における矢状周上および正中線上との電極位置のずれによる $\alpha$ 波平均振幅の変化を報告したが、そこで多誘導同時記録による比較の必要性を痛感した。その後、三栄測器株式会社の好意により、16誘導の脳波を同時に記録することができたのでその結果をここに報告する。

今回の実験では、2名の被験者について前頭部から頭頂部を経て後頭部に至る線上（これを以下 F-P-T 線上と呼ぶ）に20mmおきに計16個（No. 1からNo. 16まで、普通用いられる前頭部の位置はNo. 2、頭頂部はNo. 8、後頭部はNo. 14）の関電極を装着した。また、左右の両耳朶に装着した電極を短絡して1本の不関電極とし、左右乳突起に装着した電極も短絡して1本の接地電極とした。電極の装着にはコロジウムを使用した。測定法としては、16個所の脳波のおのおのについて安静時60秒間の $\alpha$ 波（8~13C/S）1個の平均振幅および1秒間の平均振幅和を求めた。各部位毎の平均振幅の増減を検討してみると、その傾向は2,3の箇所を除いて両被験者とも大体一致している。まず電極No.1からNo.8にゆくにつれて振幅は徐々に減少する。ただしNo.2ではその前後の部位（No.1およびNo.3）に比較して振幅は相当に異なる。しかも1名の被験者はNo.2で極大、他は極小というように相反した変化を示している。次で、No.10からNo.14までの間は振幅の変動は殆んどみられない。そして、No.8からNo.10の間は両被験者とも極めて急激に振幅の変化を現わす。更にNo.14から後方に向つても $\alpha$ 波振幅は急に減少していく。従つて、No.3からNo.8までおよびNo.10からNo.14までの間は比較的振幅の動揺が少なく、それ以外の部位ではみかなりの動揺を示している。こうみると、標準的な電極位置をこの両区間内に置けば位置のずれによる振幅の誤差は少なくなるであろう。ここにおいて、従来用いられている標準的な位置とこの結果とを比較してみると、まず後頭部においては、電極位置がこれよりも頭頂部寄りにずれる場合には特に著明な誤差を受けないであろうが、後方にずれることは危険であるというべきであろう。また、頭頂部でも前頭部寄りにずれることは振幅に大きな差をもたらさないが、後頭部側に向つては急激な振幅の変化を示すことに留意すべきである。前頭部は上述のごとくいずれの方向に向つても振幅値の大きな変化がみられる。

以上の傾向は、1秒間の平均振幅和についても同様である。

## 17. 脳波の心理学的基礎研究(4)

日 本 大 学      山      岡      淳  
                         岡      本      俣  
                         〇長      澤      有      恒

当実験(4)では左F-T-O線上および左P-T線上における部位差を報告する。この電極位置はF-T-OについてはF-P-O線前頭部(電極No.17)からF-T-O線に沿つて正中線後頭部(No.14)に到るまで計12本の電極を約22mmおきに着けた。いわゆる側頭部の電極No.は23となる。P-T線上ではF-P-O線頭頂部No.29から側頭部に向つて計8本の電極を約26mmおきに着けた。F-T-OとP-T線はNo.23で交わる。 $\alpha$ 波の測定法については(3)の報告の通りである。

〔結果〕まずF-T-O線上の結果について述べる。F-P-C線上前頭部No.17よりもNo.18がやや振幅が低く、No.19ではNo.17と同程度に上昇しNo.20(前頭と側頭との中間)あたりでさらに振幅の増大が見られる。この点から側頭部に向つて徐々に振幅が下降し、丁度No.23(側頭部)が他の誘導部位に比して著しく低くなつている。側頭部から後頭部に向つて再び振幅の上昇が見られ、No.25~26あたり(丁度側頭部と後頭部との中間)が振幅最大となる。No.23を界にし、前頭部の方は振幅差はそう著しくないが、後頭部の方はその差が著しく急激に上昇する傾向がある。この位置から後頭部に向つて振幅が再び下降し、No.27.14(後頭部)あたりで振幅変動が少くなる。他の被験者と較べるとNo.2だけに差異が見られる。しかしその他の点、すなわち前頭と側頭部との中間あたりに振幅の高まりがある点や、特にNo.23に明瞭な振幅の極小な部位が見られる。また、この部位から後頭部に向つて振幅の極大傾向が見られる。これらの事柄は本川氏(1944)の研究と類似している。

次にP-T線上の結果について述べる。No.29頭頂からNo.33に向つてやや振幅の上昇傾向が見られNo.31~32で振幅の極小を示し、再びNo.33で上昇が見られる。この位置は頭頂と側頭との中間部位に当る。この位置からNo.34.35と振幅が下降し、特にNo.35においてはF-T-O線上における振幅の変動と同様に、明瞭に振幅が最小である。この線上では、2名の差異は僅少である。

当研究(4)について、以上から要約をすれば、① F-T-O 線上における  $\alpha$  波平均振幅の変化をみると、No. 23(側頭部)に振幅の最小位置が、側頭から後頭に向つて最大位置がみられる。また、前頭と側頭との中間附近にも振幅の極小位置がみられるがそう著しくない。② P-T 線上においても、やはり No. 35(側頭部)に振幅の極小位置があり、また、側頭と頭頂部との中間にも極小位置があるが、側頭の場合ほど明瞭ではない。

以上の結果は1秒毎の平均振幅和についても同様である。

## 18. 脳波の心理学的基礎研究(5)

日 本 大 学 ○山 岡 本 榮 淳  
岡 長 澤 有 一 恒

電極位置についての(3)および(4)の報告を総括し、それと関係して他に2.3の知見をえたので報告する。

F-P-O 線上、F-T-O 線上および P-T 線上における  $\alpha$  波振幅の変化状況は(3)および(4)のようであるが、この結果についての個人差が当然問題となる。従来の研究報告およびわれわれの過去の実験結果とはほぼ同様であるが、今回の2名の被験者について更に検討してみる。F-P-O 線上および F-T-O 線上においては両被験者の個々の対応する部位の振幅値大小関係は一見一定性がないようであるが、その振幅が著明に大きくまたは小さくなる部位およびある範囲に亘つて余り振幅値が変動しない部位は両被験者とも大体同様である。他方 P-T 線上では振幅の絶対値に若干の差があることは勿論であるが、その振幅値の推移状況は極めてよく一致している。このことから「誘導部位による  $\alpha$  波振幅の相対的な差異も人格研究において検討されるべき問題であらう」(第17回大会で報告)という言葉に反復したい。

任意の時間を選び、その時間内の各誘導脈波ごとに振幅のヒストグラムを作つてみると、その形状は同一時間に記録されたものでありながら皆多少とも異つている。次に別の時間を選びそのヒストグラムを作つて、兩時間の同じ部位から誘導されたもの同志を較べると、どの誘導脈波のものも、兩時間でその形状に変化を来している。しかし、各誘導脈波とも兩時間で皆全く同様の変化の仕方を示している。従つて第17回大会で「脳波特にお  $\alpha$  波振幅の個内変異は相当大であるが、誘導部位による  $\alpha$  波振幅の相対的差異はその個人によつて特有である」と述べたことが、このヒストグラムの場合にも当てはめられることになる。

以上安静時脳波についてみたが、今回の記録中にみられた開眼閉眼による脳波様相の変化および音刺激に対する変化についてみる。細胞構築的には誘導された部位によつて、その脈波変化の仕方に差異がある筈である。開眼、閉眼に際しては兩被験者とも、音刺激に対しては1名のみ、No. 13の電極より後方の部位とNo. 12よりも頭頂部寄りの部位との間に興味ある差異がみられた。すなわち閉室内開眼により No. 13より後方の部位の方が約0.5秒早く、 $\alpha$  波が消失する。閉眼するとこの部位では直ちに閉眼安静時  $\alpha$  波よりも大きい波が突発的に出現するのに No. 12よりも前方の部位では閉眼後もなお0.7秒ぐらゐは小さな不規則な  $\alpha$  波しかみられない。また音刺激に対しては No. 13より後方の部位の方が抑制小で、その恢復も早い。これは No. 13, 14 辺りが視覚中枢に相当することと考えると興味深い。

以上被験者は少いが16箇所づつの脳波を同時に記録してえた知見を基として単に個内変異、個内変異だけの場合に留らず、感覚や知覚の実験においても、その電極装着部位は慎重に決定し、かつ常にその決定された部位に電極を装着することが必要であらう。

## 2. 感情・思考・学習・記憶

### 1. 教護院収容少年の逃走について(1)

大阪府立修徳学院 大 杉 隆 男

教護院収容少年の問題行動の一つとしてあげらるゝ逃走(無断外出)の心的メカニクスを考究しようとしたものである。

対象になつた少年は、大阪府立修徳学院収容少年中無断外出経験を有する79名である。先づ、無断外出の実態と、この研究の手がかりを得るために、3月10日現在に於て、大雑把な、少年の傾向(性格・気分・情動・人間関係—対教師と対同僚)と、無断外出(無断外出年月日、帰院年月日、外出目的、外出理由、外出中の行動)状

況を回数順に調査した。

この予備的調査の結果を、課題の第一回として、ここに報告する。

無外経験少年79名の在院期間は、3ヶ月の最短から6ヶ月1日の最長にわたり、無外総件数は270件であった。この件数を在院総延月数で割る事に依つて、個人の平均無外意図率0.15を得た。

入院からの6ヶ月を、環境順応の学習期間として、6ヶ月目を基準として整理の結果次の5群に分類出来た。

- 1 群 当初6ヶ月に無外をして、その後度数のない群
- 2 群 当初6ヶ月の無外度数に比して、その後度数の減少してゆく群
- 3 群 当初6ヶ月の無外度数と、その後の度数の等しい群
- 4 群 2群の逆で、当初6ヶ月の度数に比して、その後度数の増加する群
- 5 群 1群の逆で、当初6ヶ月に度数なく、7,8ヶ月目から無外度数をみられる群

群毎に、当初6ヶ月、7~12月、次から1ヶ年毎に区切つてその経過をみると、4,5群は1,2,3群に比して、各期間に於ける無外意図率は当初6ヶ月を除いて高い。

最初の無外から最後の無外までの期間を動揺期間として、各群の平均動揺期間を見ると、1群3.8ヶ月、2群15.3ヶ月、3群15.3ヶ月、4群22.9ヶ月、5群30.5ヶ月になつた。

無外月別頻度に依ると、9月から2月が高く、3月から8月が低く、1月、8月は許可して全員の殆どが自分の家庭に1泊の外出をするのでその翌月の2月、9月が殊に度数が高い事は注意を要す。

少年の傾向調査と関連して見たのでは、唯同僚との関係の良くないものに若干の関連性が認められ、他の傾向では見るべきものはなかつた。

I, Q によつて見ると、1,2,3群は80.7, 4,5群は84.1の平均智能の差が見られた。

無断外出は入院当初の6ヶ月、所謂環境学習期間が最もその度数が多い事、4群5群の如く、この期間に度数が低く、その以後に増加してゆく傾向に、この課題の問題があるようである。

## 2. 大学生(女子)の情緒について

中央大学 赤塚 泰三

1. 問題と方法 人格の基本構造とその発達法則をさぐるためには現在の情緒的緊張の実態を明らかにすることが必要である。その一方法として「喜怒哀楽恐淋」の六情緒に区分し、約3,40分自由記入法によつて中学高次大学生男女について調べてみた。(昭和30年7月~12月)

2 結果の考察 ここでは大学女子を主とし男子と比較しながらその大要を述べる。

(1) 女子の情緒の豊かさ 応答された各情緒の頻数、%は次のようである。

|   | 女 (218名) |       | 男 (244名) |       | 無 答 |     |
|---|----------|-------|----------|-------|-----|-----|
|   | 頻数       | %     | 頻数       | %     | 女   | 男   |
| 喜 | 454      | 22.4% | 252      | 13.2% | 1   | 18  |
| 怒 | 286      | 13.7  | 236      | 17.0  | 6   | 26  |
| 悲 | 312      | 15.4  | 196      | 14.7  | 7   | 29  |
| 楽 | 400      | 19.8  | 268      | 19.4  | 3   | 25  |
| 恐 | 246      | 12.2  | 208      | 15.0  | 17  | 41  |
| 淋 | 334      | 16.5  | 224      | 16.2  | 6   | 27  |
| 計 | 2,032    | 100.0 | 1,384    | 100.0 | 40  | 166 |

この全体的傾向によつて、女子が男子より情緒的緊張の多いことが伺える。女子の情緒の動く順位は「喜楽淋悲怒恐」であるに対し、男子では「楽・喜・怒・淋・恐・悲」の順となる。

(2) 女子の情緒の特徴 各情緒的緊張を場面別に見ると次のようである。(喜楽は内容がほとんど同じ故喜のみ示す。)

|   | I 個人的 (対自我) |       | II 社会的 (対友人・家族・学校等) |       | III その他 |      |
|---|-------------|-------|---------------------|-------|---------|------|
|   | 女           | 男     | 女                   | 男     | 女       | 男    |
| 喜 | 46.7%       | 70.7% | 51.9%               | 28.5% | 1.4%    | 0.8% |
| 怒 | 19.6        | 13.6  | 76.1                | 57.6  | 4.3     | 28.8 |
| 悲 | 46.8        | 60.2  | 48.1                | 37.8  | 5.1     | 2.0  |
| 恐 | 52.0        | 62.5  | 34.2                | 37.5  | 13.8    | 0.   |
| 淋 | 52.1        | 69.4  | 44.9                | 25.9  | 3.0     | 4.5  |
| 計 | 44.0        | 55.0  | 51.2                | 37.5  | 4.8     | 7.5  |

女子は社会的場面の情緒的緊張が多いのに対し、男子は「怒」以外は個人的場面の情緒に傾く。個人的情緒は女子では「喜」よりも「淋恐」が多いのに対し、男子では「喜」と「淋」をほぼ同等に味わう。社会的情緒は男女共対友人関係が圧倒的に多いが、女子の方がより大きい。また対家族・学校関係でも女子は男子よりも情緒的緊張が大きい。「怒」は男子は主に社会の不正・矛盾に向つて起すに対し女子はむしろ友人に対して起す。(社会的情緒の分析表省略)

(3) 女子の情緒の内容 女子の情緒的緊張の主なものを列挙すると次のようである。

|     | (喜)                | (淋)      | (悲)      | (怒)      | (恐)                   |
|-----|--------------------|----------|----------|----------|-----------------------|
| 個人的 | 自己充足感・自由感          | 孤独感      | 自己無能感    | 思うままにならぬ | 将来の人生                 |
|     | 願望の実現              | 自己感傷     | 人生の無常    | 焦燥感      | 死の不安                  |
|     | 仕事の完成              | このままの青春? | 病弱       | 自己矛盾     | 自己の本性を知る事             |
|     | 性格をほめられる<br>趣味にひたる | 自己失望感    | ひとりでに悲しい | 内心の不満    | 嘘・悪事後<br>劣等視される<br>結婚 |
| 社会的 | 友人との会談             | 親友がいない   | 友の誤解・疎遠  | 友の皮肉・悪口  | 友情の変化                 |
|     | 手紙・プレゼント           | 友の非情     | 友の軽視     | 友の裏切り    | 先輩の注意                 |
|     | 親の愛情               | 友の無理解    | 恋人の非情    | 友の破約     | 親の死・病氣                |
|     | 休暇・帰省              | 友との争い    | 家庭不和     | 友の侮辱・不人情 | 先生の叱責                 |
| その他 | ニュース               | 長い旅      | 戦争の犠牲    | 社会の矛盾    | 酷漢<br>暴力・不良<br>異性の尾行  |
|     | 移住                 | 秋        | 生物の死     |          |                       |

### 3. 幾何学の問題解決過程についての一実験

大阪学芸大学 荻野勝之助

幾何学の問題解決過程において、その解決に必要とする事項を同じように含む問題を幾つか、その順序をかえて与える時、その解決過程にどのような差異を生じるか、又同一被験者は、それぞれの問題解決において、どのような類似性をもつかを、考察しようとする。

この実験では、主として集団実験によつたが、各実験の後で答の確かさと、解決過程とについて、個別的に調査検討した。被験者は、まだ幾何を学習していない高校上55名をえらび、問題解決に必要な要素である「三角形の内角の和は  $2iR$  である」という定理を詳細に説明した。

次に被験者をA(14名)、B(15名)、C(14名)、D(12名)4つのグループに分け、角に関する次の三つの問題を、それぞれ順序をかえて提示した。

問題 1, 七角形の内角の和は  $10iR$  であることを証明せよ。

問題 2, 次の図で示した角の和を求めよ。

問題 3, 次の図で示した角の和を求めよ。

Aグループは、①-②-③、Bグループは、①-③-②、Cグループは、③-②-①、Dグループは、②-①-③の各順序である。

この実験は、結果的にみて次の条件分析的研究への問題を見出したにすぎないものであるが、得られた問題の中、主要なものは、次の点であると思われる。

1, ②, ③の問題においては、被験者に少々難かしすぎたせいか、②においては2名、③においては1名の正解者をみたにすぎなかつた。①の問題については、夫々Aグループ7名(50%)、Bグループ8名(53%)、Cグループ10名(71%)、Dグループ6名(50%)の正解者があつたが、グループ間における大きな差は見られなかつた。

2, ①, ②, ③の問題を、解決図形のもつている共通的な要素と思われる分類によつて、a, b, c, d, e, fの6つの図形に分けた。①の問題においてd, e図によつて解こうとしているものは、各グループ全員が解決にまでいたつているのに反し、c図によつて解こうとしているものは、各グループ解決にまでいたつていないものが含まれている。これは、少くとも、c図における場合試行錯誤的になんともなく補助線を引いているものがc図にあることを意味している。事実、その後の調査検討において、c図をとるものは唯「三角形」という概念から、

何となく三角形をつくつてゆくのに對し、d, e 図のものは、「三角形の内角の和は $2\angle R$ だから三角形に分ければよい。」として三角形をつくつている。

3, ①の問題において、a, b, c の図形をとつたものは、②、③の問題においても、矢張り、a, b, c による解答をしている。(73.5%) ①を d, e によつて解いているものは、②、③において a, b による解答をとることは稀である。(10.6%) つまり、幾何学的な問題においては、同じ系統の問題に對し何時の場合でも、同じような図形によつて、解こうとする傾向をもつ場合が多い。

#### 4. 計算と知能との關係に関する一考察

東京学芸大学 小 島 潔

知能と計算能力との關係を検討して、計算の適当な学習時期を發見しようと考え、基数5個の累加(問題A) 4位数2個の加算(問題B)及び2位数3個の加算(問題C)の3種類を計算問題として取上げ、これらについて東京都杉並区の一小学校4年生約180名について調査した。第1回目は昭和29年4月、次いで同年10月、昭和30年5月と3回に亘つて調査した。各問題とも時間は5分に制限した。

第1回目の男女合せた場合の正答数平均は、A...16.21, B...19.41, C...16.25で、知能との相関係数はA... .383, B... .514, C... .589である。

第2回目には、正答数平均がA...20.09, B...23.35, C...19.71であり、知能との相関係数はA... .423, B... .512, C... .578である。

第3回目では正答数平均がA...24.20, B...26.41, C...23.74であり、知能との相関係数はA... .568, B... .487, C... .488である。

知能と計算能力との相関係数は兩者の關係が最も釣合ひのとれた時に最大となり、知能に比して計算問題がやさしすぎ、又はむずかしすぎる時は小さくなるであらうとの予想を立てたのであるが、僅か3回だけの検討では不十分かも知れないにしても、かゝる予想を実証することの見込みはかなり有望であると思つている。調査結果の数字が或る程度かゝる予想の実証可能性を示していると思う。

又調査結果において、問題Aと知能との相関係数は回を重ねる毎に上昇し、第3回目には .568であるところから、此の種の計算問題は第4学年の後半が学習時期として適切ではないかと思われる。問題BとCとは共に知能との相関係が回を重ねるにつれて減少し、殊に問題Bでは正答数が他の問題のそれに比して大であるところからも推定し得る如く、第4学年以前、特に第3学年の半ば頃が適当な学習時期ではないかと思われる。Cの問題は第1回において計算問題としては最大に近い相関係数を示すところから、第3学年の後半から第4学年の前半にかけての期間が適当な学習時期であるように見える。

一方知能段階毎の成績を見ると知能偏差値34以下の児童は3種類の問題何れも普通知能児(偏差値45~54)より1年以上のおくれを見せている。例えば問題Aの場合知能偏差値34以下の児童は第3回目の成績が凡そ12題で普通児では、第1回目に既に16題の成績を示している。此のような事態は普通児と知能偏差値65以上の児童との間にも見られる。即ち普通児は計算成績で知能優秀児より凡そ1年のおくれを示している。従つて前に述べた学習の適切な時期についての推定は普通児に對するものと言つてもよく知能のすぐれた児童や知能の劣つた児童に對しては又特別に考えなければならない。

今回の試みはまだ問題發見の程度で今後は更に予想や推定の追求に進みたいと考えている。

#### 5. 視覚デザインの心理学的研究(1)

— 美的分割について —

日本大学 古 牧 節 子

最近、商業・工業・建築・服飾等においてデザインの役割が非常に重要視されるようになって来た。建築・家具・機械のデザインはもとより、ポスター、ショウインドウのディスプレイ、グラフィックデザイン、パッケージング等の効果にデザインの良悪が非常に影響することが認識されて来た。視覚デザインを行う場合、点・線・面・立体・空間・色彩・明暗などの要素をどんなに配列した場合もつとも好ましい印象を与えるかが重要な問題である。この配列の法則には、調和・反復・対比・均衡・比例等が考えられている。本研究は比例の問題を取上げ実験した。

1) 方法 デザインの中に多く用いられる5種の四辺形<sup>(1)</sup>1:1, <sup>(2)</sup>1:1.31, <sup>(3)</sup>1:1.618, <sup>(4)</sup>1:1.732, <sup>(5)</sup>1:2)を、観察者から3m離れた目の高の場所に幻灯機によつて投影した。各四辺形の恒常辺は20cmである。観察者は以上の5種の各々の四辺形を垂直のbarで分割した場合どんな比で分割したらもつとも美的であるかを報告した。同じ手続により、縦長い四辺形を水平のbarで分割する場合、どの位置で切ればもつとも美しいかについて調べた。観察者日本大学心理学科学生男女20名。

2) 結果 長い部分に対する短い部分の比をもつて表わした。観察者によつて右よりに分割するか、左寄りに分割するか異つているが、同一観察者が四辺形によつて右寄りにしたり、左寄りにしたりすることはない。(右寄りに分割した者55%、左寄りに分割した者45%、中央より上で分割した者20%、中央より下で分割した者80%)以上の結果を総括すると次のようになる。

(1) 正方形から長四角になるに従つて分割の比が大きくなる。

(2) 中央附近(1:1.2)附近に分割線をもつて行く観察者と、黄金比附近で分割する観察者の2つのタイプがあり、同一観察者はどんな四辺形に対してもほぼ同一の比で分割する傾向が見られる。(同一個人内の分割比のS, Dは.32である。)

(3) 縦長い四辺形と、横長い四辺形とにおける分割比を比較すると、どの四辺形の場合でも縦長にした場合の分割比の方が大きい。(横平均、1:1.726, 縦平均、1:1.83)

(4) Le Corbusierは1:1.618からなる黄金尺を作成し、これをもつとも美しい分割であると述べているが、本実験においてはいずれの場合も、1:1.618より比が大きくなつている。

(5) 同一観察者に同じ実験を繰返した場合、差が見られるかどうかを調査したが、各観察者は、それぞれ独自の分割尺度を持つていて、どんな場合にもその尺度に照して分割している傾向があり再検査において殆ど差が見られなかつた。

## 6. ドリル学習について

静岡大学 中澤正壽

I 目的 現場の教育実践の中において、児童の読みの能力の重要な要因としての漢字の読字力が、ドリルの時間を特設してそのために作られた材料としてのカードの学習を継続することによつて、どのように向上するかを明らかにして実践に基礎づけを行う。

II 方法 静岡市郊外の児童数550人程度の小学校の全児童を対象。昭和30年10月より31年3月にわたつて現行教科書(光村国語)より、各学年の新出漢字、読みかえ漢字をとり出し、これを新出の順に25字づつ一組にしてカードを作つた。

先づ、読みの実態を知るために、2年以上の各学年に対し、前々学年25字、前学年75字、現学年25字、合計100字(2年生だけは前学年75字、現学年25字)をテストした。

実態調査以後、毎週月曜から土曜までの第一学習前の10分間をこのカード学習にあてた。またカードは与えられたものを各自家に持ち帰つて自由に練習することが出来るようにし、カードの進捗は自由にして、個別にテストを受けて進む自由進歩法とした。

そして12月と2月と2回その効果判定のためのテストを行つた。

III 結果 先づ実態調査の結果からは、a) 平均成績において、いづれの学年においても女子が男子より相当によい成績を示し、b) 標準偏差からみると女子が男子よりも小さく、まとまつている傾向が見られ、更にc) 男女ともに学年が進むにつれて標準偏差が大きくなり、従つて優劣の差が大きくなる傾向などが見られた。

次に効果判定テストの結果からは、a) 男女とも、また各学年ともいづれも効果が顕著である成績を示し、b) 標準偏差においては回を重ねるにつれて小さくなり、依然として女子が男子より小さく、高学年に行くに従つて大きくなつて居り、c) 男子の向上率が女子の向上率に近づく傾向を示した。

更に、漢字そのものについて結果を検討してみると、各学年とも前学年に出た漢字よりも現学年に出た漢字の学習成績がよくなつている。そして更にさかのぼつて検討すると、前々学年新出の漢字の成績が最高であり、現学年のものがこれにつき、前学年のものが一番低い傾向を示している。これは頻度数と新奇性という要因が作用しているのではないかと解釈される。

この学習全般にわたつて、児童の自発的努力が高まり、特に学業不振児が優秀児よりも、喜んで努力する傾向も観察された。



## 7. 集団学習に於ける協力について (5)

愛知学芸大学 田中正一

1. 研究の目的及動機 最近集団学習の問題が注目されている。そして之によつて児童生徒の個別化と社会化とを同時に果そうとする新しい傾向が見出される。本研究では先に、集団学習の場を通して集団の発達過程に於て、児童生徒の協力関係が如何に変化し進展するかを見て新しい体育指導の基盤としようとして中学生及び小学生を対象としてそれぞれ等質集団と異質集団とに分けて実験を試み等質集団よりも異質集団の方がより効果的である事をみたのであつた。ついで昨年の体育学会では特に異質集団を三つの集団、即ち AADD (A 集団)、BBC C (B)、ABCD (C) の中でC集団がより効果的である事を発見した。今度は更に之を未開拓の分野であるリズム運動の創作表現過程に適用して社会性→人間関係→協力関係の指導上より効果的な集団構成の方法を見出そうとしたのである。

2. 方法 予備調査により四名から構成された A 集団 (ABCD)、B 集団 (AADD)、C 集団 (BBC C) の三集団をつくり実験を行つた。(基礎技能を ABCD の四段階に分け集団を構成したのである。)

a) 手続き 各集団共既成作品の第一節を指導し第二、第三節を各グループで創作表現させ終了後各個人に質問用紙に記入させる。観察者は言語行動記録用紙、表現の評価用紙を完成三日目は以上と同方法による。

b) 被験者への指示 (1) 各グループで創作表現を三日間行う。(2) 題材の指示。(3) 第一節は既成作品でその後は各グループで創作表現をする。(4) 20 分間練習し後発表をする。(5) 発表後質問用紙を完成する。(6) グループのモラルを高めるための指示を与える。

c) 実験操作 三集団同じ部屋の少し離れた場所で練習させ、発表時には他集団のかん賞をさげさせた。

### 3. 結論

a) 協力的言語は何れの場合に於てもグループ構成法 ABCD (A) 集団がすぐれていた。(t = 0.1% 有差有り。)

b) 集団内の個人の地位の変化を算出したが A 集団は各回共たえず分化し各々の課題解決の役割を有していた

c) 集団の構造の変化より、A 集団は他よりもその地位の役割が分化されていた。

d) 集団のモラルは A 集団は他よりもリーダーの発生速く、正確さやモラルも高く明朗化された雰囲気をかもし出していた。

e) 美的創作表現は観察者の評価より A 集団は他より高次の位置で評価されていた。又被験者も A 集団はより高い美意識を持つていた。更に足跡からみても他よりも A 集団がすぐれていた。以上から ACB 集団の順位で構成法の結果が示され、理想的なグループ構成法として A 集団がよい事が実証された。

## 8. 家庭科学習の心理 (第二報告)

東京学芸大学 芦田昇

調査対象は小学校の場合の三校に継続する性格を持つ三地域の中学校—東京都下町の普通の I 中学校、山手の高校進学率の高い T 中学校及び某大学の附属 S 中学校—の各学年一組の生徒である。児童との差異に注意しながら家庭科の相対的位置を見れば、家庭科に対する評価傾向は性差が著しく男子は殆ど最下位におくが、女子は 2, 3, 4 位におく。併し中学校では S 中の 2, 3 年及び T 中の 3 年の様に男子と全く同じ傾向に変わるものがある。これには進学の問題が影響しているのではないかと思われる。

学科に対する好悪の百分比から「好」を拾つてみると女子は小学校で 85~100%、中学校では 60~89%、学年とともに概して比率は降る。男子は小学校で 25~83%、中学校では 4~71%、その間に女子に見られぬ学校差が統計的に認められる。T 校は比較的变化がないが I 校は学年とともに好む者が増加し、S 校はその前に相当する小学校では初め殆ど女子と変らなかつたのであるが年とともに激減している。

好悪と教師の家庭科の成績評価との関係を見ると男子児童には殆ど相関を認め難いが女子児童及び中学生の場合は概ね逆相関を示し、成績の良い者程家庭科を好まないと云う珍現象を呈している。

好悪の理由は相対的に女子に好む者が多く男子に嫌う者が多い関係で好方には女子、嫌う方には男子の意見が多い。これらは「学習場面の条件」「学習内容」及び「学習効果」に要約することが出来る。場面条件としては実習の有無が興味の生命であり単なる講義は嫌われ、これに関連して教師に對する不満がある。最も多くの理由は具体的実習内容に関するもので、女子の好む理由は裁縫と調理に集中、嫌う理由は男女とも裁縫が多い。「効

果」に関しては男女とも実用価値に重味をおき、女子は現在の生活にそれを認める者が多く、男子は将来の必要を予想する傾向がある、それぞれの見地から価値の有無を好悪の理由とするのである。又他の学科に比較して余り頭を使わずに理解出来ることが興味をそゝり好感を持たせる一方、理解困難、不器用などが自明のこととともに興味を失わせるのである。彼等が家庭科について日常考えることは、女子では調理、裁縫、手芸、男子では工作、又両性とも実習及び実用価値に関して希望的意见が多いが、教授法、教師批判、学習内容、学習態度等に対する不満も少なくない。

彼等の日常家庭生活で行うお手伝を見ると、初歩的な食事の手伝(雑用)、掃除、洗濯が一般的なもの、これとても殆どきまりきつた簡単なもので、中には家庭の職業に関するものもあるが多くは家庭科学習に殆ど関係のない雑多なお使、ふとんの仕末、水まき、風呂たぎと云う類で、家庭科で特に興味の持てる方面(調理、裁縫及び男子の工作)は普通問題にされていない。

## 9. 嗅覚記憶における感情の要因

東北大学 小野 尋子

快という印象、あるいは不快という印象はどちらがよく把持され、想起されるであろうか。

こゝで発表します実験では、快、不快という感情調を示す刺激として匂いを比較的中性的なものと同連合させることによつて試みた。

匂いの把持と想起を如何なる実験手続によつて臨めることが出来るか。先づ第一に再認法があげられる。しかしこの手続は、多くの匂いをかく場合嗅覚疲労がおこるであろうから妥当ではない。第二に匂いをかいですぐそのあとに匂いの名前を与えるという実験手続もある。がこの場合匂いの名前の長さがまちまちで subject による親密さの程度がちがう。そこで私は匂いとは独立した中性的言葉として一音節の無意味綴字を匂いと組合せることによつて匂いの把持を調査した。

実験材料は、広い感情的性質をもち、強さの等しい12の匂いを選んだ。無意味綴字は card にタイプされ匂いと組合せて呈示した。その組合せは Benzol-jum, Lemonoil-vil, Vanilla-kad, Cinnamon-rik, Taroil-har, Roseoil-tuP, Cloveoil-guz, Cardamon-poo, Citrovela-seb, Camphor-wef, Jasminoil-zog, Ammonia-fav である。6対づつ二系列にわけて呈示された。subject は心理学科の学生20人(男13人女7人)。subject は匂いの記憶についての実験であるから出来るだけよく覚えるように教示された。

実験方法は、subject は匂いをかき直ちに無意味綴字を読む、次の匂いまで15秒の間隔を匂いの順応と疲労をさけるためにおいた。6対の刺激は random に4回呈示した。その後匂いを ranoam に呈示し無意味綴字を再生させた。第二系列も同様、匂いを呈示してから反応するまでの時間を測定した。最ごに今用いた匂いを任意に快→不快の順に並べさせた。これにより匂いの感情調をみる。

実験結果と考さつとして、第一に匂いの感情価について、20人の subject の平均順位は、1, Vanilla, 2, Cinnamon 3, Jasmin oil, 4, Lemon oil, 5, Camphor, 6, Benzol 7, Cardamon, 8, Taroil, 9, Citrovela, 10, Rsecil, 11, Clove oil 12, Ammonia である。各匂いについての感情価の程度に相当の Variation があるが、殆んど全ての subject は Vanilla を最も快、Ammonia を最も不快と分類している。この快不快の順序は快、不快をきめるのではなく、匂いの相対的感情価を示している。

第二に匂いの想起率について、これは匂いと連合された無意味綴字の想起率と匂いの快、不快の関係を比較するためになされた。感情的順位と想起率の順位の間  $rs = 0.26$  であつた。最も想起率のよいのは Vanilla-kad で95%、一番悪いのは Jasmin oil-zog の35%。最も快な匂い Vanilla は一番想起率がよく、又一番不快な匂い Ammonia も想起率がよい。両極端の匂いが想起率がよいことが示された。

第三に匂いの想起率と反応時間の順位の間  $rs = 0.72$  で高い。こゝでも最も快あるいは不快な匂いが反応時間が速かつた。

この実験から匂いの把持は快の方が不快よりも僅かに優れていることが示された。

## 10. 加法計算における誤りの分析(続報)

### — 感 応 理 論 の 研 究 —

東京教育大学 小保内 虎 夫  
埼玉縣高麗小学校 ○森 田 良 久

目的 さきに基数+基数、くり上りなしの計算における誤りを分析し、そこに見られる規則性を報告したが今回の報告は、さらにこれを細かに分析しての規則性を心理学的に考察しようとするものである。

実験方法 A, 数字の自由再生。一つの数字(基数)を口頭で与え、これに対して任意の数字(0から15まで)を自由に再生させる。刺激に用いた数字は0から9までの数字10個。順序をかえて2回呈示する。被験者は小学3年、54名。

B, 加法計算。基数+基数、くり上りなしの問題を口頭で与え、口答させる。被験者は小学3~6年、279名。

結果 A, 数字の自由再生。(i) 隣接する数字ほど再生されやすく、遠ざかるにつれて再生が弱まり、数字間隔に関して勾配をつくる。

(ii) 小さい数字を再生する勾配と大きい数字を再生する勾配との差をとると、刺激数字に隣接したところでは過大再生が著しく、そこから離れるにしたがって中性的となり、ごく離れたところでは、むしろ過大再生の傾向が見られる。しかし、後の二つの場合はまだ十分明瞭でない。

B, 加法計算。誤りは脱落と転化にわかれ、前者は41.4%, 後者は58.6%。

(i) 脱落の誤り。(イ) 一つの数字が、その数より大きい数と組合わされた場合と、小さい数と組合わされた場合とを比較すると、前者の方が脱落する傾向が強い。これは、前述した数字の自由再生の傾向、すなわち、大きい数字が再生される傾向が強いため、小さい数が禁止されて再生されないことによる。

(ロ) 0を除く数字の組合わせにおいて、小さい数字は脱落しやすく、大きい数字は再生されやすい。これは(イ)の系として説明される。

(ハ) 同一の数字であつても、先行刺激になる場合の方が、後続刺激になる場合よりも脱落の傾向を強く示す。これは二つの数字を前後して与えるため、二つを記憶に保持することが必要であり、この場合、先行数字は逆向禁止の効果を受けることによる。

(ii) 転化の誤り。(イ) 正答に隣接した数が誤り再生されるものが最も多く、正答との間隔が離れるにつれ、誤り再生は規則的に減少し、感応再生曲線を描く。

(ロ) 数字の自由再生の感応曲線と誤答の感応曲線とを比較すると、前者においては大きい数字が再生される傾向が強く、後者は小さい数字が誤り再生される傾向が強い。また、後者は正答から離れるにしたがい、前者よりも再生量の減少する度が高い。このような相違の生ずるのは、計算においては、単なる数字の再生ではなく、数字を加えるという心理過程が入ってくるためであつて、この相違の量は、計算過程が数字再生に及ぼす影響を示すものになる。

### 3. 発 達

#### 1 家庭環境と I. Q 及び学業成績の遂年的研究

労働科学研究所 ○狩 野 廣 之  
日本女子大学 鈴 木 光 子

研究目的 I. Q と学業成績との関係は従来数多く研究されて来たがこの関係が家庭環境によつて如何に変化するかを遂年的に考察した。

方法 東京K小学校の児童を入学時より卒業まで6年間連続して鈴木ビネー知能検査を行い、同時に学業成績、家庭環境について調査した。

結果 (1) 両親の学歴と I. Q 及び学業成績 父親の学歴と I. Q との関係に於いては父親が大学高専卒の群と小学校卒の群との間には6年間を通して4から8の差を以つて大学高専卒の群の方が I. Q 高く、しかも両者はほぼ平行した推移をたどる。母親の学歴と I. Q との関係に於いては女学校卒の群が小学校卒の群よりも1から8 I. Q 高く、II年で小学校卒の群が女学校卒の群に近づくがその他は大體平行した推移を示す。又、父親が大学高専卒、母親が女学校卒の群と、両親揃つて小学校卒の群とを比べると、6年間を通して前者の方が後者よりも高い I. Q をもち、両者はほぼ平行した推移をたどる。

両親の学歴と学業成績との関係についても、父親の学歴が高い程学業成績はよくなり、しかも高学年になるに従い学業成績は上昇する。母親の学歴との関係に於いては、女学校卒の群は小学校卒の群よりも、はるかによい成績を示し、(0.5シグマ前後の差) 両者とも、II年に於いて一旦低下しその後上昇するが、女学校卒の群は再び

低下の傾向を見せ小学校卒の群は更に上昇する。これを両親揃つての学歴として見ると、父親が大学高専卒、母親が女学校卒の群と両親とも小学校卒の群の間には0.5シグマ以上の差がみられ、前者は波型の推移を示し、後者は一旦の低下の後上昇する。

(2) 兄弟数と I, Q 及び学業成績 先づ I, Q との関係は6年間を通して兄弟数が少い程 I, Q は高く、兄弟2人以下の群と、4人以上の群とではほぼ平行した推移を示す。学業成績との関係は兄弟3人の群が最もよく、兄弟2人以下の群は兄弟3人の群と4人以上の群の中間より出発し両者にまたがつてジグザクの推移をたどり遂には最もよい成績を示す様になる。かように兄弟数の少い群は、多い群よりも I, Q は高いにも拘らず学業成績はよいとは云えない。I, Q と学業成績の推移を比較してみると、いずれも I, Q は低学年で上昇し高学年で下降するが学業成績は低学年で下降し、高学年で上昇する傾向がみられる。

## 2. 児童の職業観 (1)

むさしの児童教育研究会 ○石毛長雄、関口富千子  
泉美年子、松村咲子

児童の職業に対する将来の希望、選択の動機を明かにすることにより、職業観を発達的に検討するため次のような予備的調査を実施した。

手続 (1) 被調査者 4才～6才幼稚園男子児童131名、女子児童113名、計244名

(2) 日時 昭和30年10月～昭和31年2月

(3) 方法 個人面接

指示 1, 「あなたは大きくなつたら何になりますか」或は「何になりたいと思いますか」。

指示 2, 「どうしてですか」或は「どうして一になりたいのですか」。

(4) 整理の手続

(イ) 指示1及び2によつて聞きとつた将来の希望職業及び動機を、男女、C. A, M. A 別に集計し、次に指示1:2の関係をみる。

(ロ) 指示1については山下氏、東京二師教育調査部に準じて次のように分類した。

(I) 専門的職業、(II) 事務的職業、(III) 商業、(IV) 熟練及び半熟練職業、(V) 漠たる夢、(VI) 無答

(ハ) 指示2については山下氏、K, Reininger 氏に準じて次のように分類した。

(I) 家庭的環境の影響、(II) 社会国家のため、(III) 特定の態度より来る動機、(IV) 経済的動機、(V) 漠然たるもの、(VI) 無答。

結果 I, 将来の希望について

(1) 男女別分類の順位は次の通りである。

男 IV V II VI I III, 女 V VI I IV III II

(2) 具体的職業として男子はIVの運転士が多く(28.4%)次いで運動家、女子は漠然とお母さん、お嫁さんが多く、次いでIの先生であり、男子に比しV, VIが多数であることは職業に対する意識の相異を示している。

II, 選択の動機

(1) 男女別分類の順位は次の通りである。

男 III V VI I II IV, 女 VI III V I (II IVなし)

(2) こゝに於ても女子はV VIが多くI-(2)と同様のことがいえる。

(3) 発達的にみた場合年令と共にIについてはV, IIはV, VIが減少しその傾向はCAよりMAに顕かである。

III, 希望職業とその選択動機の関係

(1) 男子で最多の運転士はIIIの「漠たる憧れ」Vの「どうしても」が多い。

(2) 女子の先生はIIIの「好きだから、面白いから」と「漠たる憧れ」が多い。

IV, 他の調査との関係 山下氏、東京二師、Boynton P. L, 氏等の調査は対象がいずれも小学校児童以上であるがこれらと比較すると、

(1) 前記の調査では希望職業として専門的、事務的職業が多いが、本調査では熟練半熟練職業及び漠たる夢が多い。

(2) 動機についてはII, III, Iが多かつたが本調査ではIII, V, VIが多く、(1)と共に年令的社会的差異が反映してゐるように思われる。

### 3. 女子学生の怒り

静岡大学 石川 透

#### 1. 調査対象

A, 本大学女子学生135名(主に1年生、平均年齢19才3月)

B, 静岡市内の女子高校3年生72名

2. 調査方法 怒りに関する日記を1週間つけさせる。1日に1件ずつ、その日の最強の怒りを記録させる。怒りの強度を5段階法で評価させる。

#### 3. 調査期日

A, 昭和30年5月~10月 B, 同年6月~7月

#### 4. 結果

- (1) 件数 A, 445件 平均1人当たり3.3件 B, 334件 平均1人当たり4.5件\*\*
- (2) 強度 Aでは5(最強)13.4%、4が29.1%、3が26%、2が20.6%、1が5.0%、無答5.7%。Bも大体同じで、3の19.2%、無答10.2%に差がある。
- (3) 発生時刻 A, Bとも午後が多く、午前、夜がこれにつぐ。午前はBの方が多い。
- (4) 発生場所 Aでは自宅37.1%、学校23.4%、寮や下宿11.7%、交通機関10.6%、路上3.6%、アルバイト先1.6%、その他10.1%。Bでは、Aとの差のあるものは自宅55.1%、寮や下宿0.9%、交通機関5.1%、その他5.7%、アルバイト先0%、他は同様。
- (5) 継続時間 A, Bとも一分未満から永久まであり、強度に比例して時間の長くなる傾向がある。20分以下のものは大体Aに多い。
- (6) 原因 個人的精神的(A74.7%、B65.5%\*\*) 身体的(A6.6%、B11.5%\*\*) 物質的(A5.6%、B13.7%\*\*) 己的(A3.2%、B3.9%) 社会的(A1.5%、B3.1%)
- (7) 対象 自己(A3.4%、B4.2%) 父(A4.3%、B4.2%) 母(A11.1%、B10.4%\*\*) 同胞(A14.6%、B18.7%) 友人(A27.6%、B24.1%) 教師(A5.1%、B9.5%\*\*) 他人(A29.8%、B12.0%\*\*) 社会、動物物質、天候。
- (8) 内部的衝動 いらいらする、むつとする、かつとなる等の感情と共に、口惜しい、不快、言語的攻撃、身体的攻撃、拒否等が伴っていて、A, Bとも同様。
- (9) 表現 言語的攻撃(A26.3%、B22.3%) が最も多く、表情(A12.6%、B13.7%) 沈黙(A11.5%、B11.7%) 表現なし(A11.5%、B14.0%) 八当たり(A10.5%、B11.2%) 抑制(A9.0%、B5.6%) 逃避(A5.1%、B2.8%) 身体的攻撃(A2.4%、B5.9%\*\*) その他(A2.1%、B0.9%) がある。
- (10) 解消過程 自然受動的(A42.2%、B37.1%) 原因消滅(A33.6%、B24.7%) 気分転換(A6.6%、B5.4%) 直に(A2.0%、B2.9%) 継続中(A5.5%、B8.2%) その他。
- (11) その後の行動への影響 「なし」(A47.9%、B45.5%) 能率低下(A8.4%、B4.2%\*\*)。反省的になった、不快、対人関係分離、八当たり、「良い」、その他は、A, Bとも同様でいずれも10%以下。

### 4. 青年期の異性交遊について

横浜市立教育研究所 岡田 寅次

方法 第19回大会で東京学芸大学佐藤正氏の発表をきき、対象を広範囲に求め、男女差、年齢差、学歴差、地域差を追究したら面白いだろうと考えたが、その実施方法に困難点があつて着手できないでいた。偶々本市の社会教育課で、青少年の実態を調査して社会教育の基礎資料にしたいとの希望があつたので、対人関係の中に異性交遊を含めて、16才から25才までの男女を三つの代表地域(商業地区、工業地区、農業地区)で1/4の抽出比を以て選び出し、無記名しかも封筒入で回答させた。内容は異性の友人を何名持っているか、その結合要因は何か、異性交遊を望むかどうか、異性交遊の障害点はどこにあるか等を選択肢によつて捉えたもので、結果はすべて標本見本に対する%で比較した。(註、詳細は研究記要(6)で報告)

結果 異性交遊を相手の人数からみると、男女差は殆んどないが、年齢別にして男女差を追究すると前期(16才~18才)では殆んど差がなく、中期(19才~21才)で女性が幾分高率、後期(22才~25才)になると男性の方がやゝ高率になつている。一般的には、年齢と共に上昇し、後期で相手の人数が整理されているが、この特定化は女性の方が目立つ。男性の学歴差は殆んどないが、女性は高教者の方が高率になつており、地域色も相手の数

量の上にはあらはれていていた。

結合の要因で、男性は心配悩みの相談者として異性をえらぶ点で女性よりも高率だが、この要因が同性結合として作用する点では女性の方がぐつと高い。女性の異性結合で男性よりも目立つて高率なのは、尊敬する友人、スポーツ趣味娯楽の友人等で、年齢によつて変動のあるのは男女共に「好感の持てる人」で、中、後期で上昇する。学歴差は、前、中期では殆んどないが、後期になると、どの要因も高教者が高率にあげ、特に「好感の持てる人」については著しく多い。ところが地域差として、農村地区でこれを低率にあげているのは何か意味がありそう。

異性交遊の障害点で男性側が女性よりも高率にあげているのは、恥かしい、若すぎる、交際下手、心の重荷、金がかかる等で逆に女性側が高率にあげているのは、まわりがうるさいというのであつた。障害点は年齢によつて変化し、年をとるにつれて減少するのは、若すぎる、気がすまぬ、相手がない等で逆に増加するのは、心の重荷、失敗経験、金がかかる等である。学歴差をみると、義教者は劣等感からくる障害点を多くあげ、高教者は勉強に関係あることがらをより多くあげている。地域差としては、農業地区がズレており、他の地区よりも高率になつているのは、気がすまぬ、まわりがうるさい、自信がない等である。しかし交際下手を障害点とすることは、かえつて農業地区の方が低率になつていて面白い。

## 5. 青年期の生活意識について (その1)

名古屋大学 續 有恒、旭 妙子、○久世 敏雄  
中部社会事業短期大学 秦 安雄

(1) 問題意識：青年期においては、生活空間の拡大、分化にともない、現実の矛盾・障害に遭遇する機会が多くなる。それ故、青年は自己の生活についていろいろ体験しつつ次第に人生観を確立するようになる。すなわち、生活そのものを通して人生における様々の価値を追求するようになる。われわれはこの様な青年期の価値意識、価値体系、換言すれば生活意識が経験的にはある程度その人々の生活する地域、社会、生活様式全体の中に見出され、物の考え方、礼儀作法などとなつてあらわれてくる事実を指摘することができる。しかもこの様な地域や生活程度による差異を明らかにしようと思つた実証的研究はあまり多くはなされていないように見受けられる。

さらに、この様な人生観の確立は、青年期にはたさなければならぬ重要な課題の一つであり、同時にそれを研究して行くことはパーソナリティを解明する一つの方向であると考えられる。

かかる理由から、われわれはあえて青年期の価値意識、価値体系、換言すれば生活意識を問題とし、その第一段階として地域、生活程度による差異を明らかにしようと思つたのである。

(2) 方法：調査対象は中学校4校、高等学校2校、各学年1組ずつである。地域による差異は中学校の場合名古屋市統計課の資料により、2校は所謂下層階級を背後にもつ標本として選んだ。高等学校は名古屋市内で1校、名古屋周辺の農業地域から1校を選んだ。(註1)

生活程度による差異は別の目的から作成された質問紙(註2)により採取した主観的な貧富の程度による応答を利用している。

質問用紙は記名型式であり「家で最もほしいもの」、「家族意識」、「基本的要求」、「生活程度」、「幸福」について調査している。(註1) 高等学校では普通課程で進学就職の別のないクラスを対象とし、やむを得ない場合には就職コースを対象とした。(註2) 職業観の形成に関する研究(V) 續有恒、名古屋大学教育学部紀要第2巻。

(3) 結果の考察ならびに今後の問題 「家で最もほしいものは何か」において、比較的生活に身近な要求が多いという事実、「基本的要求」のうち、経済的要求が多い事実、更に「生活態度」において実業家のような生活が重要だとするものが多い事実等を考える時、労働者階級を代表する地域と、所謂上層階級を代表する地域の間には生活意識に相違があるらしく思われる。

そして労働者階級を代表する地域では生活に身近な要求が充たされていないのではないかと推測される。従つて、今度の問題は地域生活程度をできるだけ客観的に把握し、更に、自由に記述的な質問を選択肢に発展させて、彼らの生活に比較的身近な問題、又身近でない問題についていかなる差異がみられるかを検証する事が望まれる。

最後にこうして質問の項目間の関係を明らかにすることも生活意識を明らかにしていく場合有効な一方法であると考えている。

## 6. 家庭内における母親の地位の児童の社会的行動に及ぼす影響 (1)

東 北 大 学 小 室 庄 八

1, 本研究は東北大学に於ける文部省総合研究費による「東北農村家庭の構成と環境に関する基礎的研究」の内、私が担当した研究の1部である。私の中心課題は家族関係の児童の Personality に及ぼす影響について研究することである。

2, 方法 : (1) 児童の調査 — Sociometry Test, Guess who Test, 長島適応性診断テスト、教師の評価、作文記述。

(2) 聴取による当該児童家庭の家族関係の調査。

(3) 家族関係の調査の項目によつて児童調査の結果を分析する。

3, 結果の1部

(1) Sociometry Test の結果

(a) 家族関係で父優位の家庭では、児童間の積極的關係は高く、消極的關係は低い。母優位の場合は反対の傾向が見られる。(b) 旧家分家転入の關係では児童間の積極的關係は旧家に最も高く次いで分家、転入家族の順になつている。(c) 姑の有無、しつけの中心者等の關係からは積極的立言が出来なかつた。

(2) Guess who Test の結果

(a) 父母の優位關係では、児童間の指導性について父優位の児童に多い。転入家族の児童では子立的傾向が見られる。(b) 旧家分家關係では児童の指導性は、旧家の児童に多く分家転入家族の児童に少い。協力性では旧家の児童に少い。

## 7. 妊娠時諸刺戟の経験効果性 (2)

— 晩期妊娠中毒症産兒の乳幼兒期發育状態 —

京 都 大 学 田 中 昌 人

### I, 目 的

第一報告では妊娠末期産科的諸疾患と分娩様式別に生後の發育状態を調べ、産兒兒童期の知的・身体的發育状態においては統計的な有意差を認められるとはいえないとの結果をえた。今回はそこに派生した問題の一つとして晩期妊娠中毒症をとりあげ、妊娠末期の緊縮性末梢血管症が乳幼兒期の發育状態にいかなる影響を与えるかをみんとしたのである。

### II, 手 続

「被験者」1949年より1954までに京大産科で分娩した母親4399名中より妊娠中毒症傾向の認められたもの998名をえらび、調査依頼に応じてくれた236名の産兒を被験者にした。被験者の年齢は2才から7才に及び、男女相半ばしている。

「診断」母体には産婦人科医が、子供には小兒科医があわせ診察を行つたが、こゝでは1955年2月より3月にかけて行つた発達検査を中心に報告する。方法は個別的面接法。用いた道具はK(京都兒童院)式発達検査器具及び發育状態を調査するために作成した質問紙である。

「整理方法」母体妊娠中毒症をその程度により4段階に分類。(産婦人科医の判定による)各段階母体産兒を更に男女別に集計、必要に応じて年齢別の集計を加えた。

### III, 結 果

i) 被験者出産時の母体年齢、分娩時使用補助手段、合併症などを検討した結果、資料取扱いの上で特別な配慮を必要とするとの結果はえられなかつた。

ii) K式乳幼兒発達検査の結果、妊娠中毒症による影響ありと認めることはできない。

iii) 首のすわり、ねがえり、坐位、つかまり立ち、ひとり歩き、疾走など各行動発達の始めの月数、父母の認識、人見知り、ことばの始めの月数において妊娠中毒症による影響ありと認めることはできない。

iv) 現在の身長、体重、胸囲、頭囲、体格、体型、栄養状態に妊娠中毒症による影響ありと認めることはできない。(頭囲までは厚生省発表の資料にもとずき、後三者は満川元行考案の乳兒用ペンタゴグラム曲線図表によつた。)

v) 身体的一般状態、顔面、頭部、胸部、心臓部、肺臓部、腹部、背椎、生殖器、肛門、四肢の診察におい

て妊娠中毒症による影響ありと認めることはできないが、アレルギー性疾患の傾向については、更に検討を加える必要があるとの結果がえられた。

vi) 以上の結果に妊娠中毒症の程度により、又男女差、年齢差による違いはみられなかつた。

#### IV, 結 論

晩期妊娠中毒症は産児の乳幼児期発育に有意な影響を与えるとは認められない。ただし、まだ残続効果の問題に決定的な結論を与えることはできない。

### 8. 騒音の身体発育に及ぼす影響について (第1報告)

#### — 騒音の中で飼育された白鼠の身体発育について —

茨城大学 猪 狩 涼

生産・分配・交通・娯楽などの社会活動が活潑になると、そのために放出される騒音が増大してくる。またこれに伴つて、いわゆる騒音問題も次第に重大さを増してきた。

騒音はわれわれの心身に影響を与えていることはあきらかなことであるが、こゝでは身体発育にどのように影響するものであるか、ということを実験によつて観察したわけである。

同腹の白鼠10頭を体重が均分されるように、実験・統制の2群に分ち、生後第43日から100日までの間、連続型100フーンのブザー音を刺激として飼育した経過において、体重については3昼夜ごと、身長については17日ごとに測定を続けた。その結果、

A, 騒音は体重発育を抑制する。

a) 抑制される度合 刺激から解放される前の30日間についてこれをみると、

$$\frac{\text{統制群の平均体重} - \text{実験群の平均体重}}{\text{統制群の平均体重}} \times 100 = 6.3$$

となる。

b) この抑制効果は刺激開始後7日(約)であらわれる。

c) 刺激から解放されると10(約)日間の停滞期を経過して回復上昇する。

この抑制現象が何によつて引き起されるものであるか、ということについては、騒音が体内のビタミンB<sub>1</sub>をひどく消耗させるとする説明が信ぜられてよいであらう。

B, 身長についても、体重発育とほぼ同じような経過をたどる。

なおこの実験において観察された、二、三のことをあげると、

C, 喫嚙活動がにぶる。

飼育箱内に配置した喫嚙板の残面積で実験群が統制群よりかなり大である。これは騒音が対象を抑うつ性傾向にするためではなからうかと思われる。

D, 性成熟を促進する。

実験群では性的動作が6日早くあらわれ、初産の分娩もまた6日早い。これは騒音が性関係のホルモン器官の発達を刺激し、またその機能にも何等かの作用を及ぼすことゝしなければならないのかも知れない。また都市の女子の初産が農山村のそれより早くなつていることも関連することではなからうか。

E, 繁殖がにぶる。

生後第180日までの分娩数を比較すると、15:32で実験群が劣つている。飛行場周辺の鶏の産卵が激退するといわれ、都市人口の増加が農山村のそれより低いということと一脈相通ずる問題であるように思われる。

### 9. 身体発達の縦断面的研究

順天堂医科大学 田 崎 仁

1, 研究の目的 身体発達の横断面的研究は文部省の「身体発達統計」を始め、組織的な研究がなされているが、同一個人(また集団)について、出生から成熟期の継続的な研究(縦断面的研究)は、その重要性が認められておりながら、今日までほとんどなされていなかつた。本研究は順天堂大学、体育学部の学年研究の1つとして、昭和29年度から発足したものである。その研究の主な目的は次の通りである。

(1) 身長・体重・胸囲・座高等の発達に関する類型学的研究



(2) 身体発達に関する遺伝学的研究。

(3) 身体発達に関する環境的要因の研究。

2. 研究の方法 身体発達について、逐年研究は、方法上に難点があるので、便宜的方法として、質問紙法および学校調査によつて、出生時及び小学校入学後の「文部省身体統計」の結果を、個人別、年次別に記入して、その結果によつて、次のような考察を行つた。

3. 研究の結果

(1) 個人別発達曲線を作り、その結果によつて、発達にどのような型があるかをみた。それによると、身長、体重、胸囲につき、次の四種の型がみられた。

A 標準型 横断面的研究にみられる発達曲線である。たとえば身長では、小学校1年から中学校1.2年ごろまで直線的に増加し、その後1時急激な増加し、後停滞する型である。

B S字型 初め緩慢な発達、後に急速な発達を示し、その後停滞するもの。体重はこの型が標準型である。

C 凸状型 始め急速な発達を示し、除々に停滞するもの。

D 中休型 始め正常な発達を示すが、後一時休止し、再び上昇し始めるもの。

身長では、Aが多いが(81.6%)体重、胸囲はB(78.3%)座高はCを除き、他の三つの型共に均分している。

(2) 出生時、入学時、完成期の身位の相関をみた。個人によつていろいろ異なるが、全体的にみれば、この相関はかなり高い。その相関係数は次のようであつた。出生時と就学時では、身長において0.66、体重は0.15、就学時完成時は身長0.63、体重0.54であつた。すなわち、出生時、小学校入学時、完成時の列位の変化を調べてみると、個人によつては、変化の大きいものもいるが、全体的にみると、入学時に上位のものは、完成時にも上位にあるものが多い。

(3) 父と子、母と子の完成時の体位の相関を調べた。これは、父、母の完成時の体位を知る方法がないので、現在の身長と体重の記録によつた。その数も少いので、その結果の妥当性は問題であらう。参考書のために、一応その結果を求めてみた。それによると、親と子の完成時の身長、体重の相関は、あまり高くはないが、ある程度の相関がみられた。特に、母と子の体重の相関が高かつた。(0.61)

## 4. 言 語

### 1. 連想語反応についての発達的研究

東京教育大学 永 澤 幸 七

(目的) 連想語反応が年令的相違、環境的相違により、いかなる組織的变化をするかを検討し、年令別環境別による分類の標準設定に役立てようとする。(方法) 刺戟語は Woodworth や Jung の刺戟語を参考にして20個えらび、無意味語は10個選定した。(第1) は刺戟語に対する反応語の量的な面を各刺戟語ごとに分類し、頻数の多いものを1位より5位まで選りだし、年令別、性別、環境別すなはち小学生男女、中学生男女、高等学校男女(普通、定時制)、大学生男女、職業人男女により、いかなる分布であるかをみる。(第2) は成人と児童、あるいはその他の高学年生徒はいかなる連想の範疇をつくりだしていくかを比較検討する。(第3) は同じ刺戟を双生児の対に実施し、一卵性と二卵性でどのような反応の類似性があるか、刺戟語を与えて反応するまでの時間を測定し、その比較を行つた。被験者は小学生男女67名、中学生315名、高校生319名、職業人160名、双生児82名(1卵性23名、2卵性18名)、期間は30年11月より3ヶ月間に渡つて実施し、双生児の場合は、昨年2月、東大附属中学双生児入学試験の際、個別に実施した。(結果) 一般的に云つて、年令が低いほど、とくに小学生にとつては、一つの刺戟語に対して解釈的傾向が強い。さらに、はつきり意味がのみこめず、あて推量で答えているものもある。それが年令が進むにつれて文学的色彩を強くする。ことに女子には、それが強い傾向がある。学年の進むにつれて、ある一定の反応語が選ばれるようになり、あまり動揺しなくなつていく様である。例としては、暗い反応語は、中学生以後は夜となる。男の反応語に対しては女の反応語である。また小学生では動作的表現の反応を示し、中学生になると性的な色彩が上位を占めてくる。第2の場合は、成人は反対の範疇に属するものを多く反応する。例えば暗いに対する明るい、児童は見えない、中高生は夜というように形容詞一名詞の範疇に反応する。また、児童は形容詞的なものが多い。例えば男に対して、強い男と反応するが、成人は男に対して女という反応となる。児童は動詞的範疇の反応が多い。例えば、鉛筆に対して、児童は、かくものと反応す

るが成人は試験と反応し協応的な範疇の反応となる。接近の範疇の例は、やわらかいが、ふわふわするとなり、成人になると同類の範疇に属する傾向がつよい。第3の双生児EZ 23名、ZZ 18組(D, Zを含む)を刺激語に対する反応語の時間反応の全部の平均で比較すると、Gousholdaの式を用いると、EZ, ZZにおいてのA, Bの対の20回の平均の差は、(各人の20語の反応時間を平均しこの平均について双生児の対ごとに差を求め、それを合計し、対の数で割る)  $mDz : mDe = 2.72 : 1$ となり、人格の領域において上の層を示し、遺伝が環境よりも強く出ておる。

## 5. 人 格

### 1. 作業横顔法としての性格記号法と対人投射法としての補填緊張法との間の診断矛盾の照応

社会心理教育学研究所 阿 部 孫 四 郎

プロフィール・メソッドとしての性格記号法とプロジェクティブ・メソッドとしての補填緊張法は共にいずれも10万を越えるデータがある。それを整理しながら、同一人に同時に施行された事例について両方法の性格診断の照応して考察したい。

もともとプロフィール・メソッドは行動面に直接現れるものの把握であり、プロジェクティブ・メソッドは行動面に現象しないものを行動面に投射する方法であるから、両方が同一でなければならないという理屈はない。外面如菩薩内心如夜叉ということも両者の照応には起り得る訳である。従つて両方の診断結果の間に高い相関を期するのはもともと誤であると共に、これら2つの方法の一方のみによつて診断を決定するのも危険な話である。性格診断には2つ以上の多角的方法がとられなければならない。

結果からいえば両方の診断結果の間の相関は極めて低い。もしも両方の診断法の間に高い相関があるならば、何もわざわざ2つの方法を併用するには当たらないのであつて、低ければこそ両方法を適用する必要がある。また下意識をさぐり出すプロジェクティブ・メソッドが根本で、行動面を把えるプロフィール・メソッドは枝葉の参考資料だということ方も適切ではない。また性格をあらわすのに性格学的専門語を使用するか、日用語を使用するかについても重大な相違が出て来るもので、日用語には社会的評面の内包されるのが原因となる。この社会的評価を性格の健全不健全と混同するために、診断矛盾が大きくなつて来る。性格の診断は行動面と下意識面との立体的構造に於てとらえられるべきである。

性格記号法では知能因子(1)、残効因子(2, 3)、感情因子(4)、緊張因子(5)の正常異常の外に各年令段階に応じた作業量を運動因子とし、大学から小学1, 2年にいたる総合曲線を境とするA, B, …… Gの7段階に分ける。例えば性格記号Co35p14は高校中学間の作業量で、知能欠陥と感情欠陥があるが意志緊張は正常であり、元の曲線が記号から復元できる。

補填緊張法は補填緊張の成立により性格認識に際して自己の性格が他人に反映することを手掛とする方法で、VQの強外向性と強内向性、AQの単純性、表現の日常語による性格特質—その確からしさはアンダ・ラインの数によつて示される—によつて表示される。

これら両方法を同一人に対して適用して両診断を照応すると全く矛盾した例が多く見出される。確実な性格として絶対的信頼のある性格記号はXo12345の形であるのに、その人が補填緊張法では強外向性や単純性や表現「ずるい」であつたり、感情欠陥者Do35p4がVQもAQも共に普通で、表現が「しまりあり、かつぱつで、きがおおき」かつたり、知能欠陥者Fo235p1のAQが単純性で表現が「きがきく」であつたり緊張欠陥と残効欠陥のあるZo1p235が単純性で、「すなおではで」だつたりする。性格は立体的に考えるべきだ。

### 2. 青年心理学における定量化の「有効確実性」について

山 梨 大 学 西 平 直 喜

青年心理学の定量的資料を分析し、①定量化を全面的に否定する立場、②素朴な定量化、③精密な定量化の三者を見出し、夫々の長所と短所によつて、定量化の基礎「有効確実性」を結論づけた。

青年心理学の定量化は、その特殊性によつて、

i 分析の単位が molecular でなくして molar でなければならない。青年の全生活空間・全 Personality を分析単位とする。

ii 定量化が、直接経験し得ない経験的事実を、間接的測定によつて定量化した媒介変数であり、妥当性が問題となる。その数値は、間隔尺度や比率尺度でなく、名義尺度・順位尺度である。

iii 定量化の Sampling は、命題が、<青年は……である>という形式である以上は青年全体が母集団となるが、条件分析的な立場から、一条件内での Sampling とし、比較的因果法によらねばならない。

iv 定量化の過程において、実態記述のための定量化と、仮説検証のための定量化があり、現在の資料は混同されているが、両者は別の科学性を持つものと考えねばならない。(比較因果法の重視・研究項目の妥当性、信頼度、検定のノンパラメトリック性)。

以上の青年心理学における定量化の有効確実性の立場に立つて、多くの数値を検討すると、なお現在の青年心理学は科学的にかなり粗雑なものと言わざるを得ない。

このような立場での定量化は、次第に量と質の統一としての、記号化・トポロジー的表現・ソシオメトリック・(力動的な) 類型論・Q-technique などの方向に発展するようにオリエンテイトする。つまり、推計学の無視は勿論のこと、又一方的に推計学的知見が青年心理学的知見を制約するのではなく、両者が交互浸透的に媒介しあうことを切実に要求するのである。

### 3. プロジェクティブ・テクニクによる家族関係の研究

お茶の水女子大学 松村 康平

家族関係は、①閉鎖性をもつ。②いわゆる研究の対象とするにはあまりに実践的である。③日常生活と直結した動的関係である。このことに留意し、①プロジェクティブ・テクニクを選び、②診断即治療、研究即教育の立場から、③生活縮図的場面を構成して、研究を進めている。現在までに主として実施したのは、遊戯技法による研究、CAT による研究、心理劇による研究である。ここでは、日本版 CAT による家族関係の研究法を中心に述べる。

母親の認知構造変革の試みとして、①子どもの反応、②母親の反応、③母親が子どもになつての反応の3つを求め、それを母親に示すことによつて、母と子の認知構造の一致、不一致に母親が気づいて、「アア、ソウカ」という洞察体験を得るように導き、効果のあがることを既にみたが、今回は、反応の分析から、統覚の範囲・要求構造を把握し、母子関係の診断と改造に、更に一步を進めた。

日本版 CAT の実施者は井口純子。実施期間は、昭和30(1955)年7月から10月にわたっている。実施対象は、お茶の水女子大学附属幼稚園児(年長組)男女各5名及びその母親、山梨縣甲府市大里小学校・朝日小学校及び山梨縣中巨摩郡押原小学校の1,2年児、男女各5名づつ計20名、及びその母親。実施場所は、附属幼稚園のみ児童学研究室、他はすべて家庭訪問により各家庭において実施した。

発達的にみると、反応における列挙の数と絵の中の像の関連のさせ方に特徴がみられる。子どもの発達による母子関係の変化をみると、統覚の重心(「チロはどれ?」によつてとらえられる)及び欲求の表出(「どれになりたいの?」によつてとらえられる)の一致・不一致に對して「前者つまり物を媒介とした母と子の一致に比べると、後者つまり心を媒介とした母と子の一致の方が、低い。この心を媒介とした一致は、1,2年生におけるより幼稚園児において低い。しかし、役割演技によつて幼稚園児との一致が高くなる。」

子どもにのみあらわれて母親にあらわれない反応は、①列挙②非関連的な反応であり、母親にのみあらわれて子どもにあらわれない反応は、①一般化のみられる反応(例えば「みんな」という言葉での一般化。)②形容詞的把握の多い反応③理由づけの先立つ反応④他者への働きかけ表現としての反応である。母親の反応型としては、①対人型 a, 母性的 b, 教育的 c, 奉仕的。②対自型 a, 自己防禦的 b, 自己顕示的。③対物型 a, 感情描写的 b, 理知的を区別できる。

母子関係の類型としては、①類型A=自然にいだかれる欲求の一致は低い、役割演技により母が子に近づき一致の高まるもの。②類型B=自然にいだかれる欲求比較的一致・役割演技でより一致。③類型C=前者不一致、後者で一致度高まらず。④類型D=前者一致、後者で高まらぬか低まるもの、をあげることができる。

### 4. Q-technique による青年の職業興味の研究

野間教育研究所 藤原 喜悦

研究の目的 Q-technique によつて、青年の職業興味を明らかにする。

研究の方法 被験者として、短期大学生9名(男子5名、女子4名)を用い、Q-sorting をさせる。

職業興味を、対人的社会的、自然的、機械的、実業的、芸術的、研究的の6領域に分け、それぞれの領域に属する項目を20個ずつとし、合計120個を、自己の最も好むものから、かなり好き、どちらでもない、かなり嫌い、最も嫌いの順序に11段階に配別させ、それぞれの段階に所定の枚数が来るよう割当を行ない、その分布状況がほぼ正常分布をなすようにした。

各項目に与えられた評定に関して、被験者相互を相関させ、その相関マトリックスをセントロイド法により因子分析を行い、Stephenson のいう simplest structure を求めた。その結果、得られた因子についての factor array を求める。つぎに各因子についての、それぞれの項目の因子得点が、興味の6領域に関して有意な変動を示しているかを、分散分析法によつて検討した。

研究の結果 因子分析によつて3つの因子が得られた。分散分析の結果、各因子に関して、興味の6領域は有意義(5%の危険率)な変動を持つていることがわかった。その結果、第1因子(プラス因子)は研究的領域を好まないこと、第2因子(マイナス因子)は芸術的領域を好み、機械的領域を好まないこと、第3因子(プラス因子)は芸術的領域を好まないことが明かにされた。

また、9名の被験者は第1因子を多く持つ3名の被験者、第2因子(マイナス因子)を多く持つ3名の被験者、第3因子を多く持つ2名の被験者、第1因子および第3因子をともに多く持つ1名の被験者、の4グループに分けられた。

## 5. 価値意識よりみた人格の発達 第1報 —(小学校六年時代の価値意識)—

東 北 大 学 石 津 み つ 子

態度、興味、欲求、動機等と関りあつて行動の背景になつている価値が扱はれる。

人間のその様な価値意識は年令的な発達に従つて、種々の factor によつて変化することが予想される。ここでは小学校6年の男女10名づつの生徒がどの様な事柄を価値的なものとして要求し、どの様な事柄を求めないかについて、Allport-Vernon の価値の研究を多少変化したものと、田中教育研究所の職業興味検査とを用いて観察した。

### 結 果

1, Allport-Vernon のテストでは男女共に理論、政治、社会の各価値への要求が比較的高く、経済的、宗教的、審美的な価値への要求は比較的低い。職業興味検査では科学、機械、戸外などの項目への要求が男女共に高く、書記とか、男子では音楽、女子では計算の項目に対する要求が低くなつている。

2, これらの項目について、男女の間に有意の差があるものがみられた。Allport-Vernon テストでは審美的価値は女子が多く選択し経済的価値は男子が多く選択する。職業興味検査では、計算の項目を男子が、音楽の項目を女子がそれぞれ多く選択している。

3, 各価値項目の相互の関係について、男子では、政治と経済、社会と宗教、経済と審美的の各価値の間に正の相関があり、理論と経済、政治と社会、政治と宗教、社会と審美的の各価値間には負の相関がみられた。女子では社会と経済の間に正の相関、社会と審美的、理論と審美的、理論と宗教、理論と経済の間に負の相関がみられた。

## 6. 自我意識についての調査

日 本 大 学 木 村 禎 司

自我に関する意識について知るため、その手初めに Psychol. Forschung 24 B, 5 H, の巻頭にある H. Becker の「自我認識と他我認識、自我意識および個体的な指導区式と状態区式との研究」にある一質問票を使用した。これは40の質問からなり、初め4問は自由に自己の特性、長所、短所、および自己と反対な性格像について記述させる。残りの36問は択一質問で例えば同僚と愉快か、不快や不機嫌なことが多いか、が組になり、前者を選べば社会的、後者なら個人的で従つて自我意識的ということになる。また几帳面か、なり行きにまかせる方かという場合後者が自己意識的。感情に関する質問では動揺し、興奮し易く、外に表はし、固執する方がその反対より自我意識的である。他人に対しては開放的、奉仕的、同情的、社交的の反対が自我意識的、自己に満足しているより不満足、実際家より理論家、衝動的より意志的、転換的より固執的、優越感より劣敗感、妥協的よ

り批判的、大局的より細部的、自然的より技巧的、一般に適應的より、不適應的を自我意識的とする。各質問の答えを A, B に分け B に答えたものを（時に反対の質問もある）、自我意識的と解釈する。

被験者は大学1年の男女学生二千名近くであるが、今日はその一部について報告する。女子学生は少数なのでその全部65名、男子は夜間部で工学部の土木、電気科（各104名、107名）および法文学部の50名である。女子は昼夜間を通じ、夜は法文、昼は薬学科、医進コースが多い。

まず採一質問についての結果は、Aの数を集計したので、その数値の低い方が自我意識の高いことになるが、女子は  $M=19.49$   $S. D. =3.65$ , 土木科は  $M=19.92$   $S. D. =2.98$ , 電気科は  $M=18.35$   $S. D. =4.03$ , また法文学部は  $M=18.00$   $S. D. =3.54$  である。土木と電気および法文との間には0.1%以上、女子と法文とでは0.5%の危険率で有意の差がある。女子と電気との差は7%位の危険率になる。土木と女子とが自我意識が低く、法文と電気とが高いというのは興味がある。なお個々の項目について調べると、男女を通じて共通に高い特徴（80%以上）は仲間と一所にいて愉快、一定原理に従って行動するというより現実に即応して行動する、注意は流動的より集中的などで、青年らしきが見られる。

特に自我意識の高い法文学生について見ると、大胆、慎重、真面目、失敗にこだわり、現実に批判的、技巧少く、評判が良く、細事に気が付き、思慮的である。女子と土木とは共通したもの多く、環境と調和し、感情の転換速く、感情的、衝動的、自己を主張すること少く、土木には義侠的、女子には自己貫徹的な所がある。自由記述による自己の特徴と採一質問の答とでは上位者と下位者の間には一致が見られ、中間者は性格記述もあいまいである。

## 7. 児童画の色彩と疾病傷害との関係について（その2）

### 一 絵日記の分析による「紫色」の問題一

静岡大学 勝井 晃

児童画に於ける表現内容と描画時の児童の内的状態や Personality との間に何等の関係のある事は多くの人々によつて認められ、検証されつつあるが、とくに色彩と Personality との関係について R.H. Aischuler の提説以来我国に於ても一部の人々によつて強くその因果関係の信頼度が主張されている。本研究は、それらの中で特に主張される「紫色」の使用率と疾病傷害との関係について検討するために、児童の絵日記をとりあげ、調査分析してみた。

次に参考資料として肢体不自由児の自由画及び、モザイク模様塗り絵使用色を調べてみた。

#### 〔調査方法〕

静大附属小学校一年生児童44名30年4月より31年2月迄の絵日記計1,017枚

静岡療養園（肢体不自由児）43名自由画、及びモザイク模様塗り絵計130枚

絵日記文及び出欠表により明らかに病欠席をした場合、怪我をした場合、欠席しない迄も、不快で予防注射や投薬をした場合、及び家族のものの病欠や祖父母の死亡等の場合の絵日記をぬき出し（計154ケース）その場合の使用色、特に紫色の使用部位等を調べる。

肢体不自由児の場合は、自由画を描かせ、次に三角形のモザイク図形に、好ましい色、嫌いな色で模様を塗り込ませその色を調査する。

#### 〔調査結果〕

(1) 健康時下の色彩使用率 1位、黒(83%) 2, 赤(60%) 3, 緑(56) 4, 茶(55) 5, 肌(53) 6, 青(45) 7, 水(43) 8, 黄土(39) 9, 灰(36) 10, 黄緑(36) 11, 橙(34) 12, 黄(33) 13, 焦茶(31) 14, 桃(28) 15, 紫(28) 16, 群青(20) 17, 黄橙(18) 18, 藍(18) 19, 白(10) 20, 灰緑(10)

(2) 病欠怪我時下の使用率、1, 黒(90) 2, 肌(68) 3, 赤(66) 4, 青(63) 5, 黄土(48) 6, 黄(47) 7, 茶(47) 8, 水(45) 9, 紫(42) 10, 緑(41) 11, 橙(38) 12, 桃(37) 13, 灰(37) 14, 黄緑(34) 15, 焦茶(30) 16, 群青(18) 17, 黄橙(18) 18, 白(16) 19, 藍(1) 20, 灰緑(0)

(3) とくに疾病ケースの多いV, Pの紫色使用率(個人別)

M(健康時下=60%、疾病時下=86%) Ko(45%、50%) Y(43%、33%) H(43%、50%) Ta(37%、33%) Ka(27%、29%) T(43%、13%) To(19%、23%) I(72%、72%) Ko(27%、33%) Ku(22%、25%) Sa(19%、14%) E(37%、75%) Ta(13%、33%) O(17%、22%)

(4) 肢体不自由児の自由画に於ける使用順位(%は省略)

1 赤、2 黒、3 緑、4 茶、5 黄、6 水、7 桃、8 黄土、9 灰、10 肌、11 青、12 白、13 紫37%、14 黄緑、15 橙、16 黄橙、17 焦茶、18 群青、19 深緑、20 藍。

(5) 「モザイクテスト」による好きな色(使用順位)

1 赤、2 桃、3 黄、4 水、5 緑、6 橙、7 紫、8 黄緑、9 黄橙、10 肌、11 青、12 灰、13 白、14 深緑、15 群青、16 黄土、17 茶、18 藍、19 黒、20 焦茶。

(6) 紫色使用部位と疾病部位との関係

A) 疾病部位と使用部位とがほぼ一致しているもの—16%。B) 疾病部位には無関係であるが身体の一部に使用してあるもの—43%。C) バック其他無関係な部位に使用してあるもの—41%。

〔考 察〕

(1) 健康時下の紫使用率は疾病時下の場合、優位的に上昇するとは断言出来ず、個人別にみても疾病時使用率の高いケースは健康時下も高いのであり両者は相関がある(結果(1)(2)(3))

(2) 使用部位と疾病部位との関係はほとんどない。(結果(6))

(3) 肢体不自由児に於いても健康児と較べて、特に特異点はない、又紫使用率も有意ではない。但し、好き嫌いに於いては実数に於いて好ましい色のグループに属する。

(4) 全体的に見て、絵日記と云う条件下に於ては疾病傷害と紫表出率との間には、さ程高い相関は認められなかつた。但し特殊なケースの中には、全般的に疾病時下極端に紫色表出をするケースが認められた。この問題は単に特定一色についてのみ論ずべきでなく、使用色の全体的ダイナミックから究明されるべきだと思ふ。

## 8. 異常人格についての総合的研究(第1報)

—願望法、自由画、ロールシャツハ法によつて—

東 北 大 学 丸 井 多 恵 子

Personality は、複雑多面的なもので、一種類の方法だけでは、いかに精密に行つても到底把握し難いと思われる。それで projective technique の中での異つた三種類の方法を同時に用いる事によつて異常人格を総合的に研究しようと思つた。テストは、転生願望法、自由画及びロールシャツハ法で、精神病患者について実施された。しかし、この発表の直接のデータは15例に過ぎず何ら確定的な結論は出し得ない。唯第1報として、この範囲内で知られた事を報告する。

テストは精神病院にて個人面接により行つた。V,p は11例が精神分裂症、後は進行性麻痺、躁鬱病等であつた。転生願望法は第19回応用心理学会で大脇教授が発表された如く、生れ変りたい動物名とその理由を求めるものである。自由画は、クレヨンで写生以外の好きな画を描かせる。

これらの結果の他、テスト中の所見、及び臨床のカルテによつて病名、症状、療法等を各個人別の整理用紙に分類記載した。

まず個々のテストについて考察する。

ロールシャツハ法と精神病、殊に精神分裂症との関係については多くの研究がなされて来ている。当実験結果は大体それらと一致しているが、把握型で、DW型或はW-Dd型の代りにD-W型、W-D型が優勢である事、決定因でC、CFの代りにFCが破瓜病型でも、高くなつている事等に不一致点が見出されるが、その理由は更に研究を待たねばならない。

転生願望法では、一般に正常人同様、鳥類、哺乳類が多く選ばれる。時に甚だ個人的な異常性を含む反応が見出される。又、鶏、猫等の反応は自発性を欠除し非協力的な V,p に多く他のテストにも空想性の欠陥として現われる。

自由画では薬物との関係、特にレセルピン、ウインタミンとの関係が興味ある。愛精病院の加藤氏が第31回東海道精神神経学会で発表された内容に関して、必ずしも確証し得なかつたが類似した結果が見られた。同氏の云われている事の他に、黒或いは灰色で全図を覆う傾向も考えられる。

このように各テストは又各々異つた変数を持ち、それらを相互連関させて一つの personality 像を解明する事は甚だ困難だが価値ある事と思われる。これら三テストを通して見る事によつて、ある傾向の存在を確認し得るような例が二三見出されたが、更に多くの解釈は今後の報告によりたい。

## 9. 内田クレペリン検査においてある意図が作業曲線に及ぼす影響

埼玉大学 長瀬 邦三

問題 パーソナリティー統一に必要な因子として意図又は目的といったことを考え、その役割を知ること。

目的 内田クレペリン精神作業検査が個人の固有傾向なるものを示すということ又その個人曲線の固有傾向を固定するためには同一検査を数回反復してその平均曲線を見るのが理想的であること及び個人の曲線はこの検査に關する経験又は予備知識の有無には影響されないといったことなどを認めた上で、もし定型を目指して作業させた場合被験者固有の曲線はどのような影響をうけるかということを見ようとする。

対象及び実験年月日 大学生四名で三十年六月から三十一年一月の間。

実験の手續 実験は三系列に別れ第I系列は戸川、横田共著の本検査法解説に示された條件で、週一回宛三回反復実施する。その後五ヶ月の冷却期間において第II系列にかかるがその前に各被験者の曲線の特徴及び定型について詳説し、それから定型を目指して作業する作業量もベストをつくしてやれという意味の指示を与える。そうして次に文章完成検査の形式による定型の記述を求めた後で実験作業にかかる。この指示と定型の記述とは実験毎にくりかえしやはり週一回宛三回続けて実施する。第III系列は前系列実験終了後四週間を経てから前系列の実験のときと同じ條件で一回だけ実施する。

整理方法及び結果 各実験系列ごとに四名の作業量の平均を出す。次にこれらの平均曲線（但し第III系列は実験回数一回故その結果だけの四名の平均曲線）と定型曲線との間の相関々係を統計的に求めようとして、各単位時間の作業量による序列をきめ、その序列間の関係をスピアマンの列位差法によつてみようと試みた。その結果は、

(1) 定型曲線と第I系列の平均曲線との間の  $r_s$  は休憩前0.68 (a) 休憩後0.27 (b)

(2) 定型曲線と第II系列の平均曲線との間の  $r_s$  は休憩前0.85 (c) 休憩後0.55 (d)

(3) 定型曲線と第III系列の平均曲線との間の  $r_s$  は休憩前0.74 (e) 休憩後0.41 (f)

である。これら (a) - (f) の係数中休憩前のもの (a, c, e) はいづれも自由度13で (a) は1%で (c) は0.1%で (e) は1%でそれぞれ有意、休憩後のもの (b, d, f) はいづれも自由度8で (d) 即ち定型と第II系列の結果との間のものだけが5%で有意であつて他は何れも有意でない。然しこれらの係数の絶対値の間の差も全然無視することはできないと思う。次の問題は、実験対象の年齢及び数を異にした場合並びにもつと別の意図をもつてやる場合どのような結果がでるかということにあると思う。

## 10. 自律神経機能が人格形成に及ぼす影響に関する研究

### — その予備的研究 —

大阪学芸大学 中 西 重 美  
堀 井 洋 隆  
○猪

問題：自律神経機能が人格又は性格形成に及ぼす影響についての解析は Eppinger, Hess, Wenger, Kempf, Freeman, Darling, Darrow, 沖中、中、酒田、肥田野等によつて研究され若干の知見が得られている。我々は自律神経機能の作用について行動を指標とし研究した結果、副交感神経機能興奮状態は行動を促進的に作用せしめ交感神経機能興奮は抑制的に作用せしめた。（時間的、個体的条件により若干の問題がある）且つ又、自律神経機能の敏感症形成の研究においても同様の結果を得、所謂、自律神経機能緊張型の成立を予測し得る。このことは又人格の決定を示唆するものと思はれる。

そこで我々は人格形成への予備的段階として自律神経機能各緊張型の身体的症候とそれらから考えられる心理学的症候から若干の問題を作成し研究調査した結果、若干の知見を得たのでここに報告する。

手續：被験者は某大学学生26名、問題は交感神経機能興奮症候から25問題、副交感神経機能興奮症候から25問、計50問題で問題用紙を被験者に与え“はい”“いゝえ”“?”の何れかに解答せしめた。

結果：交感神経機能興奮問題。X<sup>2</sup>検定の結果5%以下の水準で有意であつたものは、※疲れ易いですか。※寒いのを直ぐ感じますか。※いつも手足が冷えますか。×寝つきが悪いですか。※食事の時は食事がまづいと思いませんか。※よく便秘をしますか。※ちよつとした事に気がなりますか。※よく睡眠を摂ることが出来ませんか。※気むつかしやですか。×いつも不満が多いですか。×よく気が利ぎますか。×思案するよりも活動する方が好きですか。※人の前になると声がふるえますか。※人の前で字を書くことがむづかしいですか。※人の前で

よく赤面しますか。×人の前で急に相手の名前を忘れる事がありますか。×人の前でよく動悸がしますか。

の各問題でこれらの問題について“はい”と解答した反応率が50%以上の水準のものは11問題（※印で示す）“いえ”6問題（×印で示す）である。副交感神経機能興奮問題。X<sup>2</sup>検定の結果各反応間に5%以下の水準で有意であつたものは、×よく軟便をしますか。×よく唾液を出しますか。※非常に甘いものが好きですか。※いつもよく食事をしますか。×いつものほせますか。×よく下痢をしますか。※人から指図されるのが嫌ですか。※冗談をよく云いますか。※肉や魚類が嫌ですか。×いつもねばつこい汗を出しますか。※他入に直ぐ同情しますか。※辛棒強いですか。※規則正しい生活が好きですか。の各問題で“はい”と解答した反応率が50%以上の水準のものは8問題（※印）“いえ”5問題（×印）である。

結論：これらの結果から（1）交感及び副交感神経緊張型の成立を予測することが出来（2）ひいては自律神経機能症候から人格形成の診断にも応用し得るであろう。自律神経機能と学力との関係については基礎的研究において若干の知見が得られているが、これらの問題については後の機会にゆずることとする。

## 11. 婦人自衛官の性格傾向について（1）

### —情緒性・向性および性度—

陸上幕僚監部 近 喰 秀 大  
日 本 大 学 ○大 村 政 男

第19回大会において「婦人自衛官のパーソナリティの研究」と題し、第2期看護婦課程学生群の情緒性と向性について報告したが、ここにおいてはさらに第5期および第6期の看護婦課程学生群をも加え、情緒性・向性および性度の面から彼女たちの性格傾向を明らかにしようと思う。

#### I 情緒性<sup>(1)</sup>

過敏性・社会的内向性・公衆前の自我意識（劣等感・認識的欠陥および自閉的傾向などを包含する。）および抑うつ<sup>(2)</sup>の4次元と全体的視点である情緒性の5つの予診領域から見るとおうむね次のとおりである。

各期に属する婦人自衛官群は情緒性の4次元においてはある程度相違が見られるが、総合的視点に立つて見た場合は、各期の平均値間に有意な差<sup>(2)</sup>がなく、ホモジニアスと見てさしつかえなかつた。他の対象の平均値と比較すると、情緒性において婦人自衛官群は防衛大学校学生群よりも有意に高い傾向を示したが、一般の男・女大学生群よりは有意に低い傾向を示していた。彼女たちのなかで特に適応不良の要任意者（神経質的パーソナリティ）は8%であつた。なお27%は麻痺や無感覚さえ臨時的鑑別で認められなければ、非常にタフなパーソナリティを持つているように思われた。情緒性反応<sup>(3)</sup>の平均反応率は41%で防衛大学校学生群と等しく、一般の男・女大学生群の53%・59%から見れば相当に低い。

#### II 向性<sup>(4)</sup>

各期の婦人自衛官群の向性は情緒性の場合のようにホモジニアスではなかつた。全体としては外向的な指標を示していて、極端な脱逸（超外向・内向域）を示したものはわずか4%に過ぎなかつた。第19回大会において発表した第2期看護婦課程学生群と保安大学校第1期受験者群<sup>(5)</sup>との比較では、やゝ低い向性指数を示していたが婦人自衛官群は一般の女性群より外向的ではないかと思う。

#### III 性度<sup>(6)</sup>

各期の婦人自衛官群のうち、第6期のものだけが性度の研究対象になつた。彼女たちのすべてが著しい男性的傾向をとり、一般の男・女大学生<sup>(7)</sup>（女子短大学生を含む。）よりも有意な差で男性的であつた。なお彼女たちはゴッフの標本群のひとつである米国のカレッジ女子学生よりも有意な差で男性的であつた。

（註）（1）情緒性診断票（大村）による。（2）この場合マーシャルのS検定によるC, Rを用いた。（3）情緒性診断票における40問に対する反応率の平均を指す。（4）ウエノ式向性検査（上野陽一）による。（5）近喰・松浦による研究で、第1管区・第2管区からの抽出見本。（6）Harrison G. Gough "Identifying Psychological Femininity" Educational and Psychological Measurement, Vol. 12, No. 3, 1952, P. 427-P. 439 （7）女性のみ大学の標本。

## 12. 婦人自衛官の性格傾向について（2）

### —精神健康度および職業興味—

防衛庁陸上幕僚監部 近 喰 秀 大  
田中教育研究所 ○松 浦 健 大 兒



## I 精神健康度について

(1) 調査の主旨——集団の性格傾向をは握し、指導の目標設定に役立てるとともに、道徳面を除いた情意的面について社会的適応力を欠く者を発見し、正しい解決策をとるための資料とする。そのため、婦人自衛官(第4期看護婦課程学生)73名を被験者として精神健康度調査を実施した。

(2) 調査の構成——この調査は①情緒②意志③社会性の3方向(質問項目60)および10題の検証尺度(質問項目10)から構成され、結果は健康度段階として最優から最劣の7段階、評価段階としては+2から-2までの5段階に標準化されている。

(3) 調査の結果——まず、精神健康度段階をパーセントで現わすと、最優0, 優12.3, 中の上28.8, 中39.7, 中の下16.4, 劣2.8, 最劣0, で+2から-2の評価段階にわたり、ほぼ正常分布の型を示している。このうち、劣段階の者について情緒・意志・社会性別の均衡を見ると、数名の者を除いて「バランス」が欠けており、適応障害をきたすものといえる。次に、現在の学業成績によつて上位群と下位群にわけて、健康度評価段階との割合をみると、+2段階では上位群38%であるが、+1段階では67%、0段階では45%、-1段階では41%と順に少くなり-2段階になると上位群のものは1名もない。このことは調査の妥当性を示すと共に、健康度の高いものは比較的学業成績が優秀であるといえる。

## II 職業興味について

(1) 検査の主旨——職業興味は情操の一種であるから、性格の重要な部面を形成し、配置や適性の問題と関連して、進むべき職業方向を決定すると共に、興味の個人別プロフィールは教育や指導に適用して、職務に対する不適応の要因をみいだす資料となる。このため婦人自衛官(第3期看護婦課程学生)61名を被験者として職業興味検査を実施した。

(2) 検査の構成——この検査は、3つの職業活動項目を1組とする100組(12の検証尺度を含む)の問題から構成され、その結果は1, 戸外、2, 機械、3, 計算、4, 科学、5, 説得、6, 美術、7, 文芸、8, 音楽、9, 奉仕、10, 書記の10分野について偏差値段階で示され、さらにプロフィールに現わすことができるよう標準化されている。

(3) 検査の結果——各分野別に5段階(偏差値)に区分してみた。このうち職業分類表で看護婦関係の示す興味としてあげられている、「科学」「奉仕」の2分野について、その結果をみると、科学の分野では-1(興味がない方)、-2(非常に興味がない)段階に較べ0(普通)、+1(興味がある方)、+2(非常に興味がある)段階の者が多い。また、奉仕の分野でも-1、-2段階では消極的な興味傾向を示したが、0、+1、+2段階では非常に積極的な興味を示し、看護婦学生として非常に好ましい態度を示していることがわかる。

しかし、被験者のなかには1%程度ではあるが、このような分野に非常に興味がない-2段階のものもみられた。

## 13. 婦人自衛官の性格傾向について(3)

### — 總 括 —

防衛庁陸上幕僚監部 近 喰 秀 大

大村発表の情緒性、向性および性度と松浦発表による精神健康度および職業興味との総括を述べると次の通りである。

情緒性診断票によつて彼女たちのパーソナリティの一面を見ると、ごくわずかの情緒的不安定者(即ちこゝでは脱逸者と見なす)を除き、安定した情緒性を示していた。このことは、神経過敏に対して強固であると云い得られるであらう。彼女たちのこの傾向は曾て同様なテストを実施した防衛大学校の学生群と匹敵するもので、一般の男女大学生群よりも有意に低い傾向を示していた。彼女たちは陸上自衛隊に所属する前は国立病院、診療所および療養所等の看護婦であつたため、かような傾向が現われたものと思われる。

情緒性反応率は防衛大学校の学生群と等しかつたが、一般の男女大学生群より著しく低い傾向をしめした。

向性はウエノ式向性検査によつて把握したものであるが、情緒性の場合と異り各期によつて相違が見られたが一般に外向的な指標を示し、ごくわずかのものが超外向域、超内向域に属していた。

一般にナース、グループは外向的であると云われているが、ここでもその傾向が窺われる。

性度は Gough, H. G. (ゴッフ、ハリスン、ジー) のテストを用いて把握したのであるが、その結果、彼女たちのすべてのものが強い男性的傾向をしめし、他の男、女標本群よりも有意な差を持つていた。

ゴッフに従えば、男性的傾向をしめした彼女たちは覇気満々としている、明晰な思考、自信、保守的、頑固

な、分別のある、緊張した等と云う特性を持つているように思われる。

精神健康度では段階的にみると、最優、最劣のものはなく、中間的段階のものが一番多く見られ、中の上>中の下>優>劣と云う順に低くなっている。

評価段階ではほぼ正常分布の型をしめしており、健康度劣のものについて、情緒、意志、社会性別によるこれらの均衡を観察すると、数名の者を除いては、適応障害を来しているものと思われた。

また、学業成績によつて上位群、下位群に分けて、健康度評価段階との割合をみると、健康度の高いものは、比較的学業成績が優秀であることが窺知された。

次に職業興味について検討してみると、分野別に5段階に区分し、ナースのしめす興味として、科学、奉仕の分野について観察すると、科学の分野では、いずれも好傾向の結果を示し、奉仕の分野でも積極的な興味を大半のものが示していることがわかつた。

## 14. 国民性と習慣

東京十文字高等学校 秋 葉 馬 治

我々日本人には一般的にいつて、まだ自分の考えというものが欠けているように思われる。かつては善かれ悪しかれ、一つの考えを持つていたように我々は感じていた。自分の考えを持つていないということは、この考えを作り上げるための考え方や考える習慣を持つていないということの意味する。故に特に敗戦後は何でもあり合せの思想に手当たり次第飛びつく傾向がある。

云う迄もなく我が国は古い歴史の国柄で元より国民性が存していた。しかし国民の思想行動には一貫性が無いように思われる。否一貫性の無いのではない、あつても弱いと云わなければならぬ。

今日迄先覚者と云われた人々は我が国民性の優秀であると云うことを指摘することに終始した。大東亜戦争の前後、事変の進展につれ、我が国民性だけが優秀であると盲目的に主張され著しく自己批判力を鈍らせた。終戦後、民主的の過程が始まると国民性改造の主張が強くなつて来た。過去に於て民主主義の思想が出現しても、その勢力は微弱なものであつて、国民性はこれに対して絶対不動の威力を有するものと考えられていた。かくの如き事態に於ては国民性の改造が一般的に問題とされる可能性は存しない。然るに今日に於ては民主主義の要請が絶対的なものとなり、すべてのものは従来とは反対にそれと対決され、これによつてその存在理由を確証されなければならないことになり、国民性もその例外をなすものではない。これまで民主主義に対して国民性が主体的決定者の地位にあつたが、今や国民性に対し民主主義が主体的決定者の地位に立つに至つた。

民主主義に於ける国民性の改造は心理的に見て、良習慣の育成にある。良習慣の育成は幼時から始め、無意識的に進め、更に徹底を期し、その上に家庭、学校、社会と総合的に歩調を一にすべきである。

## 6. 教 育

### 1. 質問法に関する一研究(その一)

#### 一向性検査の項目分析(第1報告)一

名古屋大学 赤 木 愛 和

1. 目的 質問紙(調査)法における応答の意味として、「肯定」が何を否定した上での肯定であり、「否定」が何を肯定した上での否定であることを明らかにしようとする。

2. 目標 論点の一侧のみを単独に提示して肯定一否定をもとめる場合と、論点の兩側を一對の分枝として提示して選択をもとめる場合とでは、同じ文句の項目であつても、そこに成立する意味・事態が変化するか否かを検討することにより、対としての適合性を吟味する。

3. 方法 材料として淡路円治郎氏の向性検査(自己評定用)の改訂版を用いて次の3種を作つた。

調査 E 外向的項目群を単独に提示するもの。

調査 I 内向的項目群を単独に提示するもの。

調査 P 外向的項目と内向的項目とを一對として提示するもの。

上記3種を引續き実施した。但しEとIとは実験者が朗読して、被験者は回答用紙に応答を記入するようにした。

被験者は名古屋市内の夜間高校生69名。

#### 4. 結果・考察

1) 向性指数については、調査Eではより外向的な平均値(120)、調査Iではより内向的な平均値(81)、調査Pではその中間の平均値(112)を得、それぞれの間で有意な差を示している。

2) 3種の調査のうち2つづつの組合せについての相関係数はそれぞれ有意ではない。

3) 一貫性の考察。3種の調査のうち2つづつの組合せについて、各項目毎に、一貫した応答の比率をもとめ、これの起るべき確率(各項目或いは各分枝の通過率=反応率から期待される)との差を検定した。その結果有意な項目として、単独提示相互(E-I)間で10項目、単独提示と一対提示とではE-P間で34項目、I-P間で25項目、この三者すべてに共通するもの8項目を指摘し得た。またE-I間では、一貫性のない項目が1~2あった。

5. 残された課題 今後さらに150C2の組合せについて同様の検討を行い、対として適当なものを選定し検証実験を行つて行きたい。

## 2. 幼児の知能

埼玉大学 山根 薫保  
○金 子

I 研究目的 本研究は幼稚園児について、田中寛一著幼児用田中B式知能検査を用いて幼児の知能分布を見ようとしたものである。

II 研究対象 中小都市4地域5校の幼稚園について、生活年齢5才級から6才級の次年度就学児童、男376名、女359名、合計737名について行い、これらは1年又は2年保育コースの園児でそのうちわけは1年保育コース児童345名、2年保育コース児童392名である。児童の家庭の職業は会社員35.8%、商業18.8%、公務員18.6%、自家営業7.1%、鉄道員4.6%、農業1.1%、その他の職業11%であり、父母の教育程度は父が旧専門学校以上23%、母が旧高女以上が47%という家庭の子供達である。

III 研究方法 テストは4名ないし6名づつ、各々の幼稚園において児童達がいつも生活している部屋を使用し、他一切は手引書によつた。条件統一のためテストは主に山根が行なつた。

IV テスト期間 昭和28年10月より29年1月まで、昭和29年10月より30年1月まで、昭和30年10月より31年2月までの3期間を使用した。

#### V 結果と考察

(1) 全体の知能偏差値分配は平均52.3、中央値52.0、S.D. 9.3、歪度0.12で大体のガウス分布であつた。

(2) 男子・女子の知能偏差値平均は、共に52.3で、S.D. は男子9.2、女子9.4で男女の差は認められなかつた。

(3) 出生順位との関係を見ると、知能偏差値の平均は第1子50.6、第2子55.7でこの間には5%以下の危険率で差をみとめられる。

(4) 生れ月と知能との間にはなんら関係をみとめられなかつた。

(5) 父母の教育程度との関係は、父が旧制専門学校以上を卒業している場合は、知能偏差値平均54.7、母が旧高女以上を卒業している場合は54.0、父は旧専以上、母も旧高女以上卒業しているものは55.1であつた。これに対して父が旧中卒業以下では48.2、母が高小卒業以下では46.7となり父母の教育程度の高いものは知能も高いという事が5%以下の危険率で有意に示されている。

(6) 家庭の職業別知能偏差値平均を頻数30以上の職業についてみると、商業54.0、公務員53.5、会社員51.7、自家営業50.7である。

(7) (イ) 保育年数と知能偏差値の関係を見ると、1年保育コースは49.0、2年保育コースは55.3を示し危険率5%以下で2年保育コースの知能は高い事が認められ、この点桐原葆見氏の幼稚園教育を受けたものが受けないものよりも就学時に知能が高く幼稚園教育効果の現われとしているが、同様の事がこゝでも云えよう。(ロ) 1年コースと2年コースについてテスト項目別知能点の開きをみると、順に3.0・4.6・1.5・3.1・3.3となり2年コースが高くなつている第2テストの差が大きく、第3テストの差が小さい。

## 3. 作業性格検査(+)-クラスカラーの測定法

東京都職業適性相談所 板倉善高

人間関係の底流をなすものは、そのグループ内の情緒的雰囲気いわばグループカラーが主なるものではあるま

いか。

これを科学的に測定する一つの方法として試みたのが、連続簡易作業によつて捉えられた作業性格の応用である連続作業はかなの書換作業でもよく、完成作業でもよく、クレツペリン式の加算作業でもよく、又抹消検査でもよい。初め15分間作業—5分間休憩—15分間作業する。

現れた作業曲線型は(1)正常型(下弦型)(2)上昇型(3)下降型(4)突出型(5)陥没型(6)平均型…と現象的な6つの類型に分け、別表のように、休の前後でグループ毎に集計する。(表省略)

まず能力(作業速度)の順位は

II群—III群—I群

| 性格は          | (休前)         | (休後)     |
|--------------|--------------|----------|
| 安定・溫和さ<br>順位 | N…… III・II・I | II・III・I |
|              | U…… I・II・III | I・III・II |
|              | S…… II・III・I | II・III・I |
| あき・むら<br>順位  | D…… I・II・III | I・III・II |
|              | O…… III・II・I | III・I・II |
|              | I…… I・III・II | I・II・III |

信頼度の高い休後の曲線型で結論すると、

(イ) II群が最も安定して、おとなしい、少々無気力にも見える。

(ロ) I群は不安定で、尖鋭アクティブの者、呑込みの遅い者等雑多ではしやぎ易いグループ。

(ハ) III群は概ね兩群の間、Oが多いから「気の弱い」分子が目立つ。

このような具体的な資料があれば、学級の編成、指導が的確に行われるものと思う。

#### 4. 学級集団構造と討議過程の関係について

東京教育大学 田中博正

本報告は、会議方式による自由討議を行前と、行つた後で、学級の生徒が相互に受け入れあつている程度の変化に関するものである。生徒が相互に受け入れあつている程度が等しく、従つて同質と見なされる統制組を置き、50人からなる4年級の1学級を実験組とした。自由討議は1回30分、1週2回、3週間にわたつて、計6回行つた。議題は次のようなものであつた。「お友達と仲良くするにはどうしたらよいでしょう。」生徒が相互に受け入れあつている程度は、社会距離尺度によつて表わした。自由討議の前後2回行つた社会距離尺度の結果に有意差をもつた変化が見られた。この変化から、次のことが推測された。

- ①殆んどどの生徒が、自由討議の後では、他生徒を以前よりも受け入れるようになる。
- ②特に、この傾向は男子より女子に著しい。
- ③或る生徒が、他生徒を受け入れる程度と他生徒から受け入れられる程度が類似してくる。
- ④変化は凡べて一様のものでなく、各人各様である。

#### 5. ソシオメトリック・リサーチによる学級社会の集団凝集性に関する考察

東京学芸大学 田中熊次郎

集団の社会心理学的内面構造を明かにし、下位集団の相互関係などを中心に、集団凝集性を考究するには、sociometric testの結果から、(1) Sociogram、(2) matrixなどをえがく方法が、従来、便宜とされてきた。しかし、これらの精密適確な図示や表示には、かなりの時間と労力が必要とされる。その不便を補い、簡明に集団凝集度を数量化するためには、(3) Indexなどの試みがなされてきている。この研究では、従来用いられてきた Indexなどを問題として検討する。

(1) 被験群 東京都西多摩郡A小学校(山村)、同新宿区T小学校(商店街)、それぞれ、5年児童各3学級。そのうち、各1学級は実験組。他の各2学級は統制組。

(2) 方法 各実験組には、特別な集団指導を実施。A小学校では、グループ学習及び RolePlaying T小学校では、児童会の運営及び Leaderの交代の指導。Sociometric Test (Choice及び rejectの人員並びに集団の範囲は無制限)は、第1回1955年11月、第2回1956年3月。

(3) 結果 (a) Lundberg G, A, の選択反応指数 Interaction index =  $\frac{C \times 100}{N(N-1)}$  では、A及びTの実験組ともに、第1回と第2回との比較において、みせかけの進歩の差が示されたが、t検定の結果では無意味。

(b) Tanaka, kの排斥反応指数 Rejection index =  $\frac{R \times 100}{N(N-1)}$  では、A及びTともに、進歩の差有意味。(c)

Lundberg の Mutual pairs の比による Group cohesion =  $\frac{mp \times 100}{nC2}$  では、ATともに、進歩の差無意味。

(d) Tanaka の Mutual Pairs の比による Group Cleavage =  $\frac{mR \times 100}{nC2}$  では、ATともに、進歩

の差有意味。(e) Crisswell, J, H, の相互選択と一方選択との比による Group coherence =  $\frac{mc \times 100}{umc}$

では、進歩の差がAで有意味、Tで無意味。(f) Tanaka の相互排斥と一方排斥との比による Gorup

dissolution =  $\frac{mR \times 100}{umR}$  では、進歩の差A有意味、T無意味。(g) 内集団と外集団との比による Ingroup

preference =  $\frac{Igc}{Ogc}$  (Crisswell 参照) では進歩の差ATとも無意味。(h) 同上 Ingroup Cleavage

=  $\frac{Igr}{Ogr}$  (Tanaka) では進歩の差無意味。

(4) 考察 (a) (b) (c) (d) の結果から、集団凝集性の index としては、choice の数だけを問題としたのでは不十分であつて、rejection の数をも問題として加える必要があると考えられる。従来、集団分裂性の究明が、あまり、かえりみられていない。なお(e)と(f)では、今回の Sociometric test にあつて、choice 及び rejection の人員が無制限とされたことから Crisswell の公式に、そのまま、あてはまらなかつたし、(g)と(h)では、同じく、内集団と外集団との規定が、あらかじめ、被験児童に約束されなかつたことなど、Sociometric test 実施上の問題として、将来に残されている。

## 6. 学業不振児の学級に於ける社会的地位について

岐阜大学学藝学部附属加納小学校 宮 脇 修

学業不振児が、学級内に於いて如何なる社会的地位を保持しているか、を知らうとするのが本題の主眼であつた。

学級に於ける peer status は、学業以外の主要因によつて決定される場合が多いが、学業も又 status を条件づける要因になつている事は見逃せない。

学年が進むにつれ(特に女兒の場合)学業の良し悪しは、交友関係に影響を与える傾向を前研究で認める事が出来た。

本題では Peer statu を知るために交友調査を行つた。

テストについて (a) Pure-sociometry

右文献を参照にして  
テストを実施

: " Sociographic

analysis of sociometric  
valuation "

" Age-mate acceptance

and indices of peer status

by Rodney A. Clark

Carson Meguire

Child Development Vol. 23

No. 2 (June, 1952)

P 129-154

(b) Quasi-sociometry :

Social acceptance scale

田中交友テストを参考にした。

調査研究の問題児群は、三、四、五、六各学年のうちから、次のような考えによつて A, B, C の各群を選んだ。

A群……成績優秀児、知能学業共にすぐれ教師も優秀児と認めているもの -25名-

B群……劣等児、知能学業ともに悪く教室では、お客様あつかいにされていそうな児童 -20名-

C群……典型的な学業不振児で知能の割合に学習効果があがつていない児童 -19名-

※B群とC群とを学業不振児と呼ぶことにした。



—tration 事態を如何に解消しているか等について、教育心理学的立場から総合的に説明を与え、教師のよりよい精神的環境を確保する為の資料を得んとするものである。

今回の発表は教師の精神的環境として考えうる全部面に亘つての条件を一応網羅して妥当な質問項目と其の選択肢を作成する為の準備として行つた予備的調査の報告である。今回は主として男女差の面から其等に考察を加えてみた。

#### 〔方法〕

調査対象 京都府下小中学校教員、男187名、女250名  
調査期日 1955年7月～8月  
質問項目 結果に記した如き基準のもとに作成した計49問に筆答でもつて解答を求めた。

#### 〔結果〕

質問項目の基準、問題数、及び其等に悩みありとした%などについて記してみる。

##### I 教職の本質

1, 政治及び組合活動と教職の本質との間に生じる悩み不満を見るために3問、うち政治に就いては、男48.9% 女25.6%が悩み不満を持つ。

##### 2, 体面上の問題

教師の体面を保つ上に(イ)経済面、(ロ)生活態度等で如何なる悩みを持つかをみるために6問、経済面で男54.5, 女40.2, 生活態度で、男25.3, 女32.1であつた。

##### 3, 理想と現実との問題

教師としての教育理想と現実との間の悩みをみるために4問。男47.9, 女45.0であつた。

##### II 教育環境

1, 児童との関係から来る悩み不満をみるために6問。指導技術の面で、男67.6, 女62.0, 身体性格等の条件で男32.8, 女37.6であつた。

2, 職員間の悩み不満をみるために10問。上下関係で、男41.0, 女32.8, 同僚関係で、男21.6, 女21.4, 信任の点で、男28.6, 女26.6であつた。

3, 地域社会との関係から生じる悩み不満をみるために5問。対保護者で、男43.0, 女37.4, 対校下関係で、男25.7, 女18.6であつた。

4, 学校機構についての不満悩みをみるために5問。定員及び事務関係で、男54.7, 女46.8, 設備及び施設等で男80.7, 女79.2, 指導機関に対して、男42.8, 女20.8であつた。

III 個人生活に就いての悩みをみるために6問。研修及び娯楽時間で、男65.8, 女69.2, 経済生活で、男42.6, 女35.6, 家人の理解で、男6.4, 女8.4であつた。

IV 綜括的質問として教職体験をとりあげ、教職への失望経験と教職に対する“生甲斐”感を聞いた。前者では意見別に分類を行つたが、後者では男81.8, 女82.8であつた。

#### 〔要約〕

結果中著明な傾向及び男女間に統計的に有意な差の見られた主なる事実は次の如くである。

- 1, 教職の本質と政治及び組合活動との間の不満や悩みは男教師の方が多い。
- 2, 教師の体面を保つ上から経済的な面との間に悩みのある者も男が多いが、それを口外することへの抵抗感はいふしろ女に多い。
- 3, 社会からの道徳批判(服装、異性との交際、犠牲的態度を含む)との間の悩みは女に多い。
- 4, クラスの子供に対する平等愛と特定の子供に対して感ずる愛情との間に立つて悩んでいる者は男の方が多い。
- 5, 指導技術についての悩みを全体的にみると男の方が多い。一方子供に接する場合、自分の身体的条件についての悩みは女教師の方に多い。
- 6, 職員間に於ける種々の悩み不満については上下関係及び事務分担の不平等についての不満が多い。
- 7, 校下との関係で、不満悩みをもつものは男が多い。
- 8, 学校機構に対する悩み不満は男女共に圧倒的に多いが、定員及び事務関係では男の方が多く、指導機関(教委、指導主事等)に対しても男の方が多い。
- 9, 教師の個人生活に於ける悩み不満は、男女共に事務が多く、個人的研修、娯楽に費す精力と時間的余裕のない事への不満が多い。その内特に研修、娯楽への時間的余裕に対する不満は女に多く、家庭の経済生活について

は男が多い。

10, 教職体験に於いては、今迄に失望した経験を持つ者は、男では年令的にみて23~24才頃、女では21~22才頃が最も多く在職年数で見ると、男女共に2~3年目が最も多い。

11, 男女共に教職は生やさしい仕事ではないことを自覚しているが、そこにまた生き甲斐を感じている者が大部分である。

## 9. 教師の性格(3)

### — 琉球人教師について —

埼玉大学 山根 薫

1, 教師として望ましい特性がいくつも数えられている。それらは教師という生活環境のうちに自づと培われてくるものと矛盾するものではないであろうか。まず現実形成される教師の特性をとらえることが先決問題である。特性を向性とか、類型とかでとらえることもできようが、それよりももつといきいきした現実の生活態度に示される特性から見ていこうと企てる。

2, 19才より63才におよぶ琉球人教師男子34人、女子38人、校長男子48人合計120人に、50種の特性をならべた質問紙に、男女それぞれの特有性質か、共通性質かの区別を自己のまわりの教師を観察評価した結果によつてチェックさせた。50種の特性は、これまでの調査結果に基づいて選んだ。材料は1955年8月琉球本島北部地方に於いて採取した。

3, 一般教師が男女に共通する特性としてあげている特性を頻数の多い順に10箇をとり、それと校長組のそれとを比較する。頻数の多少を別にして共通する項目だけをみると、まじめ、正直、忠実、温順など六つ、違つていのは前者の組で研究的、熱心などで、後者では、視野がせまい、融通性がない、世事にうとい、社会性がないの四つである。さきに報告した日本本土の45人の校長のみるところを前二者に比べると高い一致度を示している。わずかな違いは本土では独善的、理屈っぽい、理想主義者をあげていることである。この三者を比べたとき校長の立場からは、望ましい教師像からの批判として、そこに否定的特性がとりあげられていることが注目される。肯定的特性として、全部に共通している正直、まじめ、親切、忠実などは、おそらく教師のパーソナリティを特色づける性質と考えてさしつかえない。ただそれらに与える重みが両校長組で違うのは地域差からであろう。

4, 教師の特性は性差からも違つてくる。男女揃つて男教師の特性としているのは、理屈っぽい、努力家、批判的で、女教師のそれは、丁寧、温順、几帳面、世事にうとい、卒直でないという。校長のみたところもほぼ等しい。さらに両性がおたがいに自らはすぐれ、異性は劣ると思つているのが正直と忍耐づよいの二つである。しかし校長の目からは、正直なのは両方であり、忍耐づよさは両方ともそれ程大きくはないとみている。教師の特性に性差が影響することは否定できないが、より大きくは教師としての特性のうちに包括されると考えられる。

5, 地域的に琉球人教師の特性では、まじめ、正直などが重くみられ、本土では融通性がない、視野がせまい、社会性がないが強調され、性差から男子は批判的、研究的、理屈っぽい、女子は丁寧、社会性がない、神経がこまかいなどのちがつた顕著性をもつが、これら一連の特性は教師の姿を示すものといえる。

## 10. 採点方法についての一考察

新潟大学 池上喜八郎

### 〔I〕 問題

power test においては、item の数 (N)、正答数 (R)、誤答数 (W)、無答数 (O) の関係は  $N=R+W+O$  となつている。従つて得点は各 Component に適当な Weight をあたえて決定される。即ち  $S=V_rR+V_wW+V_oO$  当て推量による反応を考慮した採点方法は A Priori Scoring Formulas として一般化され特に Lysterly, S. B. は得点分布からこれを推奨している。経験的立場からは  $V_r=+1$  とした場合の  $V_w$  は Thurstone, L. L. の公式によつて求められる。(但し Sample の数が500以上) しかし Sample が少く、しかも日常頻繁に行われる学級テストの場合は、次にのべる理由に基づき  $V_r=+1$ ,  $V_w=-1$ ,  $V_o=0$  即ち  $S=R-W$  として採点したらどうであろうか。これを検討するのが本実験の狙いである。

(i) 一般に採用せられている  $V_r=+1$ ,  $V_w=V_o=0$  即ち  $S=R$  は、誤答が無答と同格に処理されるところに問題がある。指導上問題となる誤答は、不適切乃至誤つた学習方法の採用或いは国教に由来する故、習得の



正常な方向に対しこれを価値的に negative の方向にとりあげるのが妥当と思われる。(ii) 立場は異なるが、Lyerly の示す如く現実の得点は、 $S=R-W$  の方法が  $S=R$  よりも二項分布型に接近することが期待される。(iii) Sample の数が少ないので厳密には適用できないが便宜的に Thurstone の公式から推定される誤差の weight が  $\frac{1}{2}$  である。(rcw = -rcr  $\sigma_r = \sigma_w$ )

### 〔II〕 手 続

テスト材料は児童が現在学習中の算数教材から「三位数」×「一位数」(等価的なもの二組、「三位数」÷「一位数」(等価的なもの二組)、「二位数」×「二位数」、「四位数」÷「一位数」なる六種のテストを作成。被験者は新大教育学部附属高田小学校第四学年の二学級及び高田市南本町小学校第四学年の一学級の児童。得点の信頼性を検するため、三つの学級にそれぞれ alternate-forms method, test-retest method, internal consistency method の様式のテストを実施。テストは前記教材の原指導の行われた翌日に実施。

(期日 昭和30年12月19日～昭和31年2月25日)

### 〔III〕 結果及び考察

(i) 各テストの結果  $S=R$ ,  $S=R-W$  の分布は何れも一極に偏しすぎ Lyerly の如き結果にはならなかつた。これは学級テストが予診的、診断的方向に仕組まれる傾向のあることを暗示する。(ii)  $S=R$ ,  $S=R-W$  なる二種の得点の信頼性の比較において、Equivalence, stability, consistency の係数をかりて検討したが兩者の間に有意な差が見られない。(iii) 教師の評定を criterion として  $rc(R)$  と  $rc(R-W)$  を比較したがその間に有意な差が見られない。以上 (ii) (iii) より  $S=R-W$  の方法からは期待された  $S=R$  以上のものが得られなかつた。但し、これは本実験条件に関する限りの事柄で、他教科のテスト、Criterion としての教師の価値体系及び学級におけるテスト使用の目的等に関する検討と相俟つて更に追究されるべき問題である。

## 11. 一年生のかな学習について

東京教育大学 中野 佐 三

昭和30年4月1年に入学した東京都下の一小学校の本校(準農村)4学級、分校(農村)4学級計348名の児童のかな学習の状況を、入学当初(4月)、一学期の終り(7月)、二学期の始め(9月)、二学期の終り(11月)の四回さまざまな角度から調査した。本報告は、そのうち清音46字の読みおよび書字を中心にした部分の報告である。読みの調査はかなを五十音表に印刷し、子供を一人一人呼んで、五十音表の字を一字一字指して読ませ、読み得た字に○をつけるというようにして調査した。四月に清音46字を全部読み得たもの74名(21.2%)、10字以下しか読み得ぬもの175名(50.0%)であつたのが7月には、それぞれ51.5%、13.5%、9月には75.0%、5.2%、11月には91.1%、1.6%というようになっていくことが知られた。しかし、分校は本校より成績が劣つていた。この調査と並行して、一字一字は読めてもこれが文章の中にあるとき読み得るかどうかを見るために、4月に全部読み得たものの中から61名、4月に一部しか読めなかつたもので7月に全部読み得るようになってきたものの中から63名、7月に一部しか読めなかつたもので9月に全部読み得るようになってきたものの中から43名、全様に11月に全部読み得るようになってきたものの中から30名を選んで、これに一種の文章読解力テストを四回にわたつて試みた。これでは、10点満点となるべきなのに、4月の分では平均5.2、7月の分では4.9、以下3.7、2.2で、一字一字はよめても文章の中では必ずしも読めないこと、しかもおそく読み得るようになってきたものほどそうであることと察せられた。さらに、以上に並行して、各字が348名中何人によつて読み得られているかを調査した。これでは、全体的には五十音表の前半にある字がよく読め、後半にある字がそれほど読めていないことが知られた。あ、か、し、こ、の、み、などは4月すでによく読み得られているのに、へ、れ、ぬ、ね、ら、ろ、ほ、などは11月になつてもよく読み得られてない。なお11月に調査したのであるが、清音46字を聴写させた。これでは、すべての字を得たものは348名のうち224名(69.5%)であつた。この時期にすべての字を読み得るものは317名(91.1%)で書きあるのであるから、これに比し、成績がわるいと考えられる。以上からして、かな学習は2学期末ごろまでではまだ成就しないと考えられる。

## 12. 幼児の態度の発達と知能指数の恒常性との関係

東京学芸大学 ○ 堀 内 敏 夫  
日本音楽学校 近 藤 かな 枝

〔調査目的〕 幼児の知能検査受験態度の変化が知能指数の恒常性に与える影響を明らかにすることを目的とし

て、次の調査を行った。

〔調査方法〕 鎌倉鶴岡幼稚園児88名に新乙式巨体知能検査を第1回、昭和30年9～10月、第2回を11～12月にかけて実施、受験中の態度を観察により五段階に評定、追試のため聖心の園幼稚園児36名に幼児用田中B式知能検査を第1回昭和31年2月、第2回3月に実施。観察による態度の差異を五段階に評定、さらに、態度評定結果の客観性をうるため、田中B式の作業量による五段階の区分により、態度の変化が知能指数 I, Q または知能差値 S, S に与える影響を比較した。

〔調査結果〕 新乙式 I, Q については、第1回の平均M110.7, 標準偏差 S, D 23.97, 第2回のM130.2, S, D 26.40, 第1回と第2回の相関係数 r0.78, 田中B式の S, S は、第1回M61.6, S, D 11.37, 第2回のM68.5, S, D 10.68, r = 0.80, なお素点については、新乙式第1回のM42.9, S, D 9.68, 第2回のM51.3, S, D 10.71, 田中B式第1回のM38.0, S, D 12.34, 第2回のM48.3, S, D 10.94となつた。

第1回と第2回の知能段階の変化の著しいものは、新乙式では+2が+3になつたもの18.2%、+1→+3と0→+2のものが各10.2%、+1→+2が9.1%の順によく、田中B式では、+1→+2と0→+1が各19.4%とよくなつてゐる。

以上の I, Q と S, S を受験中の態度によつて分類すると、新乙式では態度観察により、第1回より第2回の態度がわるくなつたものの第1回と第2回の I, Q の差は14.3増加、第1回第2回ともに態度の変らないものの両回の I, Q の差は22.3第2回が増加、第1回より態度のよくなつたものの両回の I, Q の差は21.9増加となり、田中B式では、作業量により第1回の段階が第2回目にはさがつたものの両回の S, S の差は5.0第2回が減少、作業量による段階の変らないものの両回の S, S の差は第2回が4.8増加、作業量の段階が第1回よりよくなつたものの両回の S, S の差は第2回が9.0増加となつてゐる。

なお、両回の田中B式の素点の変化を分析してみると、第2回の正答率（正答数を作業量で除し100倍）は下位テストI80.0%、テストII65.7%、テストIII70.4%、テストIV88.8%、テストV92.8%でテストVがもつともわかりやすく、テストIIが理解困難である。また、第2回目の失敗率（第1回正答で第2回目にできなかつた数を第2回の作業量で除し100倍）は、テストI10.0%、テストII6.8%、テストIII6.2%、テストIV3.6%、テストV6.3%でテストIがもつとも動揺がはげしく、第1回にまぐれあたりが多い。第2回目の進歩率（第1回にできなくて第2回にできた数を第2回の作業量で除し100倍）はテストI22.7%、テストII25.0%、テストIII14.8%、テストIV23.0%、テストV35.1%となり、テストVが急激に理解されるようになる。

〔結果の考察〕 知能のうちに問題解決の態度が含まれていることは当然であるが、幼児においては受験態度、とくに作業速度の変化が I, Q または S, S に大きな影響をおよぼす事実が明らかとなつた。したがつて、幼児用知能検査の予診性、恒常性については、第1回と第2回の相関係数は約0.8であるが、個人的にみると変化量が大であるため、発達診断の意味のほかに予診的価値の立場から資料とする場合には慎重な判断を要する。そこで幼児教育にあたり、知的保育以前に目的意識を明確にもち、問題解決を積極的に実施する態度を形成することがなによりも必要とされる。さらに、このような態度は課題の内容に規定せられる事実もこの調査結果から証明せられる。

### 13. 農村中学校 I, Q 分布の実際

近畿大学 山田久喜

目的 義務教育として無選択入学の中学校生徒の年度別の I, Q 平均及び分布、部落別に分つた時の I, Q 平均及び分布がその年度相互の間に、亦部落相互の間にどのような差異を示すかを求め、その原因を考察した。

手続き 三重縣一志郡太郎生中学校生徒（昭和21年度より昭和27年を除く昭和30年度入学迄の9年度、各年度夫々32名、51名、59名、57名、68名、50名、71名、55名、52名、男子265名、女子230名、計495名）について昭和23年昭和26年、昭和30年と3回にわたつて京学大住田式尺度A形式1巨体知能検査（昭和23年には旧版昭和26年、昭和30年には改訂版）を使用して I, Q を求めた。

結果 被験者全員の I, Q 平均は94.14, 標準偏差15.29となり、男子 I, Q 平均94.14, 標準偏差15.74, 女子 I, Q 平均94.14, 標準偏差14.75となり男女差は全くない。年変別 I, Q 平均は昭和21年昭和22年度は80代であり昭和23年度より昭和28年度の間は90代であり昭和29年度、昭和30年度は100代になつたが、その各年度 I, Q 平均相互間の有意差を F 分布で検定した所昭和21年度は昭和22年度を除く他の年度すべてとの間に1%レベルの、昭和22年度は23年25年度との間に5%レベル、他の年変との間には1%レベルの有意差があつた。又昭和29年

度は30年との間には有意差なく25年度との間には5%レベル他の年度との間には1%レベルの、昭和30年度は29年度を除く他のすべての年度との間に1%レベルの有意差があつた。要約すると、昭和21年22年度はそのI, Qの低い故に、昭和29年30年度はそのI, Qの高い故に有意差がある。更にI, Q分布を年度別に $X^2$ 検定によつて検討した結果からも略同様な有意差があつた。昭和21年22年度入学の者についてその低い原因は戦時中、戦後の混乱期に小学校より中学へと進んだことが第一の原因と考えられるが、昭和29年30年度入学のI, Qの高いのは新学制度の徹底と生徒の質の両者に由来すると考えられる。

部落別にI, Q平均についてF分布により有意差を求めた所、下太郎生に属する部落は上、中太郎生の各部落に対して有意差があり、明らかにその平均値の低いことが証明され、亦その程度も学校よりの距離の遠くなるにつれて甚しくなることも証明された。併し、その部落を構成する質にも矢張り他部落より低いと考えられる点もあつて、唯単に通学距離との間にのみ由来するとは断定出来ない。

要約 各年度間の亦各部落間のI, Q平均の有意差は相当顕著なものがあることは認められるが、その理由としては一、二指摘しうるものもある反面尙断定するには今少し資料の整理を行つてからにしたい。

## 14. 負数概念の発達

京都学芸大学 四方 実一

1. 研究目的 数学史上負数が取り上げられたのは17世紀以後であり、学校教育への導入は19世紀である。二次方程式の完全な解法は負数概念を必要とし、減法の自由はまた負数概念を必要とした。数概念は負数を取り入れることから著しく拡張せられ、またこれの直線上の図示によつて幾何学の発展の基礎になつている。

旧制中学校では1年から負数教材を入れたが、新制中学では2年の中頃の導入となつている。中学1年に負数を導入することが果して無理か否かは問題であり、これには数概念の発達を児童について実験又は調査しなければならない。

児童は日常生活において、ある点を基点として反対方向に物を考えることもある。負数概念はある点を基点として相反する方向を認め一方を正の方向とするとき、反対の方向を知ることから始まる。児童が彼等の生活の中にあつて、相反する方向の問題を如何に解決つけるかを、数種のテストによつて調査しようとするのが本研究の目的である。

2. 被験者 京都市内2小学校4年(77人)5年(86人)6年(86人)  
京都市内2中学校1年(51人)2年(47人)  
調査時期 昭和30年10月

### 3. 問題

問題(1) 寒暖計の読み 寒暖計を図示し、これを読ます。

- (1)  $+2^\circ$  (2)  $-2^\circ$  (3)  $+5^\circ$  (4)  $0^\circ$  (5)  $-3^\circ$

問題(2) 文章題(反意語による)

(1) 利益と損失の差。(2) ある点を基点として左右の距離。(3) ある人を基点として前後の距離。(4) ある時刻を基点として前後の時間。(5) 零度を基点として正負度の差。

問題(3) 直線上の数値の位置づけ。

- (1) 同方向所持金の位置づけ。(2) 異方向(東西)の位置づけ。

### 4. 結果と解釈

(1) 寒暖計の読みは正度は4年で61.7%であるが、5年では84.9%、零度の読みは小中学とも殆んど正度の場合と変わらない。負度は中学校1年で約2/3の正解であり、2年では殆んど理解される。

(2) 反意語による文章題は小学校4年でも僅かに理解され、その後理解度は5年28.8%、6年33.6%と上昇し中学校1年では55.7%に達する。

(3) 直線上に方向の位置づけは小学校4年で約半数が理解し、6年では82.6%に達する。

5. 結語 負数概念の発達の基礎は小学校4.5年頃から始まり、中学1年ではかなりの発達がみられる。中学1年の中頃から数学教材として負数を導入するレディネスは充分あるものといえよう。

## 15. 教科不適應の診断について

一体育科における問題行動とその原因について一

東京学芸大学 佐藤 正

〔目的〕 教科不適應の指摘は、教師の一方的な評価に立つことが多い。心理学は生徒の教科に対するメカニズムを人格性の観点から見ようとする。本研究は、教科不適應の問題を生徒側から見ようとする一つの試みである。

〔手続き〕 ここに教科不適應とよぶのは「指導上困つた問題をもつ生徒」の行動である。その限界を、一学校でもつとも目立つ生徒ということにし、教師に指摘してもらふ。

〔手続き〕 日本体育大学学生が昭和30年12月に帰省した際にそれぞれ郷里の高校において体育科において不適應と指摘せられた生徒に対して、(1) 身体的條件、(2) 運動能力、(3) 成就経験、(4) 対人關係、(5) 性格、(6) 興味、(7) 態度、(8) 家庭の角度から23項目にわたる面接、調査を行つて、男女生徒それぞれ19名ずつの資料を得た。

〔結果〕 問題行動には、(1) 消極的、(男8：女11)、(2) さぼる(5：2)、(3) 他の邪魔をする(1：3)、(4) 特定の教科以外に消極的(2：1)、(5) 特定の教材に消極的(2：0)、(6) 教師に反抗的(1：0)、(7) 体育が嫌い(0：1)、(8) 他の者より著しく進歩が遅い(0：1)などがあげられている。

その心理的原因としては、1、意識的逃避(7)、2、認められないことへの不満、わがま(6)、3、教師への反感(5)、4、失敗を恐れる(5)、5、補償されているための消極性(4)、6、課題過重(3)、7、友人との仲違い(3)、8、性格の無気力(3)、9、負担意識過重(2)、10、進歩の停滞(1)などである。

#### 〔結果の要約〕

1、体育科における生徒の問題行動は、体育活動に必要な身体的ならびに運動能力のハンディキャップに基因するというより、ハンディキャップを考慮しない教師の指導に対する反感として生れることが多い。課題過重に対する反撥や逃避が問題行動として指摘される。

2、他教科に良い成績をとるものが、身体ならびに運動能力の劣位に基づく不良評価を、進学のため又は知的興味によつて胡賞又は合理化によつて授業を無視して逃避する。

3、両親の教育に対する無関心、生徒の身体虚弱に基づく体育の否定観、進学、勉学のための否定論が、生徒の消極的な学習態度をまねく。

4、体育科の指導にあつては、生徒の身体的成長の最盛期を健康的に指導するという意味から、身体的ハンディキャップをもつものに対しては、体育を如何に好ましくさせるかの技術を、他の者に対しては問題行動の心理的原因を事例的に研究し、指導的配慮を再編成しなければならない。

## 16. 自叙伝にあらわれた国立大学学生の宗教と社会思想

国際基督教大学 岡部 彌太郎

自叙伝はその筆者の人格の理解のために用い得るが、また特定の集団の性質を知るためにも利用し得るであろう。私は前回の大会においてA、B、C、Dの四つのキリスト教主義大学々生の宗教について報告した(詳細は国際基督教大学刊、教育研究2、昭和30年11月)がその時国立大学々生の場合に若干言及した。例へばA大学にはカトリック教徒である者18%があり、それと略同数の信仰を望んでいる者、掘りどころをカトリックに求めている者、カトリックを研究中の者があり、これはA大学のカトリック的特性を示しているが、国立大学には1%のカトリック教徒もないよりであると言つたり、又四大学を通じては35%のキリスト教徒がいて、これは国立大学などに比して非常に多いキリスト教徒の割合であると言つたり、又国立大学においては社会思想が目立つた問題であると言つたりした。そこで今回は国立大学の学生の宗教と社会思想とを見るために100名の自叙伝を調べて見たのである。この場合実数はそのまゝ%を示すことになつている。100名にはあらゆる学部の学生が含まれるが、文学部が最も数が多い。その1割10名は女子学生である。自叙伝の中に宗教のことを多少でも書いたものは26名、社会思想に関する記述のあるものは25名、これらの中宗教と社会思想と両方を書いたものが5名いるから、これらを書いたものの実数は46名であり(中女子4名)、従つて宗教のことも社会思想のことも書かないものは54名(中女子6名)である。宗教について言えばカトリック1名、プロテスタント3名、即ち計4名で、明白なキリスト教徒は4%である。仏教については寺院の子として生れたり寺の弟子となつたものが4名いるが、これらは何等信仰あることを示さず、かえつて信仰のないことを記しているものがある。別に唯1名飢えた心が浄土真宗によつて満されようとしていると言つているものがある。現在宗教に関心のあるもの5名、その1名は新興宗教をあげている。宗教の記述はあるが、それが唯彼等の背景にあつたというだけのものが9名、その中キリスト教の背景が4名、仏教の背景が1名である。宗教のことを書いたがこれを否定しているものは3名である。

全体としてはわが国の宗教的伝統や背景が甚だ貧弱であることを示している。国立大学であるから大学それ自身が宗教的信仰を与え得ないとしても、これらの学生を対象としてのよき宗教々育活動が行われなければならないと思う。社会思想についても私が漠然と感じていた程にこれが国立大学の学生の緊急問題となつてはいないようである。マルキシズムは一応は問題とされ肯定されても不満も非常に多い、デモンストレーションへの参加は熱を以つて行われてもその空しさを感じられている。こゝにもよき教育を必要とする。

## 17. 高校教官による性格評定と大学成績との関係

金沢大学 多田治夫

〔問題〕 1. 高校教官から報告された個人的社会的公民的発達に関する17項目の評定尺度が大学成績に対して予測性を有するか否か。

2. 予測性ありとすれば、それは従来の入試や進適とは異つた要因からの予測であるか。

〔資料〕 1. 性格評定は各項目につき5段階尺度で記載する形式になつてはいるが、実際は評価4を中心とする5～3の3段階で評定され、2～1の評価は全体の1%にも満たないのでこれを棄却した。従つて3段階の評定尺度として取扱つた。

2. 大学成績は教養課程における単位成績の平均、即ち(優の単位数-可の単位数) / (取得単位数)、で表わす。

〔手続き及び結果〕 1. 金沢大学法文学部学生(昭28入学、N=200)を大学成績の上(Q<sub>3</sub>)、中、下(Q<sub>1</sub>)によつて3群に分ち、各評定項目との相関を3×3X<sup>2</sup>で検討した結果、17項目中8項目はP<.01, 3項目はP<.05で有意の相関が認められた。P<.01の項目に±2の重み、P<.05のものに±1の重みを与えて予測得点としたところ、その予測性(C=.40)は入試学力試験(.34)や進適(.32)に匹敵していた。更に新たな群(昭29入学、N=200)について同様の手続で吟味した結果は性格評定(.35)、入試(.32)、進適(.32)で矢張りその予測性は高かつた。

2. 17項目の評定尺度の各々について進適との相関を求め(3×3X<sup>2</sup>によるC)たところ、すべてが有意とは認められなかつた。また、前述の重みづけによる得点と進適との相関も有意とは認められなかつた。入試学力試験との相関は高くはないが(昭28群でC=.24, 昭29群で.25)有意であつた。以上の結果から、性格評定からの予測は進適や入試とは異つた独自の要因から行われた、とみなすことができる。

〔考察〕 従来の各国における大学成績予測の研究の中で性格や適応性をとりあげたものは、その殆んどがテスト(Bernreuter, Pressy, Rorschach 等)を利用しており、それからは充分予測性ある結果が得られていない。本報告でも社会性、明朗性、情緒安定度等は予測性を有しないが、それらよりも一層勉学生活に密接な関連をもつ学習態度や習慣からは高い予測性が得られている。大学における学習指導を有効適切に行うためには、この面に対する診断と指導が必要であらう。

## 7. 検 査

### 1. 興味型検査法第二の標準化に関する研究(第1報)

#### — 興味偏差値の動揺 —

山梨大学 石川七五三二

昭和6年興味型検査法第一の標準化を発表して以来、その興味偏差値の変動を考察して、ある興味型において著しい時代的変動の現れることを注目し、その検査問題の改訂と標準の修正の必要を痛感していたので、このたびその根本的修正を試みて、これを興味型検査法第二として発表することとなり、その第一着手として、各興味型の偏差値の変動を明らかにし、修正を要する方向の検討を行うことになつた。

第一検査法は主として児童期における興味の方向を明らかにするための問題を内容としていたので、第二検査法は青年期における興味の方向を明らかにすることを主要目的とした問題の構成を行うため、青年期における興味偏差値の変動を検討する意図の下に、第一検査の標準化において採択した青年期学生(当時の師範学校生徒)の資料と現在の学芸学部学生に対する第一検査法実施の結果とを比較することにした。前者は男子550名、女子

130名、後者は男子516名、女子117名で、いずれも18才から21才までの教員を志望する学生群である。

第一群の検査結果に示された各興味型の偏差値の平均は男女共に50点であるのに対して第二群の偏差値平均は、男女共に審美型においては5%以下の危険率で第一群との差を示すにすぎないが、他の興味型においてはいずれも1%以下の危険率で著しい差を示し、25年を隔てた学生群の間に著しい時代的変動のあることを示している。その中でも最も著しい変動を示したものは宗教型であつて、その偏差値の平均は男子31女子32となり、これに次ぐものは社会型の男子41女子43であつて、ともに戦前の学生に比して、最近の学生のこの方向における興味の著しく低下していることを物語っている。これに次ぐ著しい変動は経済型の男子60女子59と活動型の男子55女子54とであつて、ともに戦後の学生の方が著しい向上を示している。理論型においては女子では戦後学生の方が優り、男子では戦後学生の方が劣っているが、権力型においては、反対に、女子では戦後学生が劣り、男子では戦後学生の方が優る結果を示している。

以上の実験結果から、第一検査法を改訂すべき理由が明らかにされたもので、特に、宗教的興味、社会的興味、経済的興味、活動的興味等の各方向については、その問題の根本的修正を必要とすることが示された。

よつて、今後の研究はこれらの各興味方向における青少年の具体的興味問題を集めて現代の青少年に適合する検査問題を構成するとともに、それらの新しい問題による標準の確立に向つて進められなければならない。

## 2. 社会性発達検査の作成とその問題点

応用教育研究所 ○吉田 専吉 平沼 良  
小見山 榮一 堀 辰己

### I 研究の概略と問題

社会的成熟尺度ないし社会性発達の標準については、ドル(1)をはじめとし我国でも牛島(2)、山下(3)、倉石(4)、山本(5)などの諸氏によつて研究がすすめられて来た。しかしながら我国では「標準検査」としての研究はまだ充分とはいえない。この種の検査は知能検査や標準学力検査などとともに教育上重要な役割をもち、今後の必要性が感じられる。複雑した諸要因をもつ社会性発達検査の標準化には多くの困難点が予想せられるが、われわれはこれを克服して、ある程度の客観性をもつたものを作成したいと念願して、昭和27年以来この研究に着手してきた。今回の本実験で第三次の調査を重ねたのであるが、ようやく一応の標準的な検査として利用しうると認められる規格を得ることができた。けれども、まだ、いくつかの問題即ち、(a) 社会性発達の意味とカテゴリー、(b) アイテムのカテゴリー別、年齢別配当、(c) アイテム通過率(その客観性)、(d) 地域差、性差、(e) 検査の利用等についての問題が残つており、今後の継続的研究が必要である。

### II 研究結果概要

(a) 被験者—総数2532名(男1302, 女1230)(市763, 町村1769)、各年齢ごとの人数を他の研究と比較すると次の通りである。

教研(5~12才) 各年齢約300, 牛島(1~10才) —110  
山本(4~15才) — 95, 倉石(3~14才) —100

(b) 年齢別の得点(M)と偏差(SD) —5才(M=52, SD=13.0)、6才(M=61.2, SD=17.4)、7才(M=82.2, SD=22.8)、8才(M=107.6, SD=16.1)、9才(M=130.7, SD=17.4)、10才(M=146.0, SD=18.9)、11才(M=157.8, SD=16.0)、12才(M=162.6, SD=13.2) この結果は比較的スムーズな直線的発達を示しているが、これより、各アイテムの通過率を75%として、最小二乗法によりその相当年齢(S, A)を求め、大体その順に配列した。

(c) 得点の地域差、性差—年齢別にその得点の平均点を検討してみたが、大体において有意差はみとめられなかつた。しかし、アイテム個々については明確な差の見受けられるのがいくつかある。

(d) 信頼性について—(イ) GP分析の結果は各年齢とも95%以上の信頼水準をもつて弁別力があるとみとめられる。(ロ) 折半法による相関は $r=0.78\sim 0.93$ , (ハ) 再テストの相関は $r=0.81$ ,

(e) SQのSDは約14、また、家庭の職業別平均値は100(98.9~106.8)に近い。

(f) 知能との相関— $r=0.35\sim 0.65$ で低学年は低いが高学年は高くなつている。牛島氏のは0.59、山本氏のは0.55、倉石氏のは0.19である。

(注、1) DoLL, E. A.: Measurement of social Competence, 1953

(注、2) 牛島義友、社会的生活能力検査、児童の心理と能力検査、昭24

- (注、3) 山下俊郎、社会的成熟、児童心理、昭27、日本教育大学協会  
 (注、4) 倉石精一、社会性発達テストについて、児童心理と精神衛生、1952  
 (注、5) 山本多喜司、社会的成熟の測定、昭和26年(パンフレット)

### 3. 幼児用知能テストの標準化について

東京学芸大学 阪本 一郎  
 キリスト教幼児教育研究所 ○佐藤 初重

#### 1. 目的

幼児の知能発達を的確に診断できるテストを作ることと考え、作製にあたっては、次の点に留意した。(a) 従来のテストはあまりに抽象的な知能因子を対象としていたように思う。我々もつと幼児の生活に即した、いわゆる生活知能と呼ばれるべきものを測定する必要がある。(b) 興味をもつて作業させるように工夫する必要がある。そこで絵本を見る楽しさから色刷にした。(c) 精密に測定するには、問題の量がふえる、このため子供が疲れる、これを補うために、一問ごとに切りとつて適当な時期に実施できるものがほしい。(d) 知能指数や知能年齢がわかるだけでなく、知能発達の個人内の差異を診断できるものがほしい。我々は、その劣っている面の発達を助長して、子供の知能の全体的な調和ある発達を図らなければならない。

#### 2. 作製過程

(a) 問題の構成—知能因子は、サーストンの学説に従つて知能特質の検討をし、第一次および第二次予備テストを実施して、通過率の検討や、コーネル・テクニクによる分析を行つた。(1) 数量(分量、数観念)(2) 空間(知覚速度、図形完成)(3) 記憶、(4) 論理(異質抽出、系列)(5) 言語(体言の理解、用言の理解)(6) 生活常識。

(b) 標準化—標準化は、昭和30年の三学期末に全国ほぼ一齊に実施した。標準化における見本(被験者)は、全国の大都市、中都市、郡部にわたつて全国の代表となるものを選んだ。その年齢は、3~9歳までにまたがり未就学児(3~6歳11月)2,612名、就学児(1~2年生)1,372名合計3,984名であつた。

#### 3. 得点の考察

(a) 年齢別得点の上昇—総得点は、ほぼ一直線に上昇している。(b) 分布—知能偏差値は、理論的にいえば、正常曲線を描いて分布しているはずである。3~7才までの分布状態は、ほぼ理論的な値に近い。(c) 性による差異—知能因子別に見ると男女の差はごく僅かである。総得点に於ける差も僅かであるから、標準点は男女別にする必要がない。(d) 地域差—環境の影響が年長になるほど著しくなると思われる。しかし7歳までに適用するこのテストでは、標準点に差を設ける必要はない。(e) 信頼度—信頼度の低いものも1, 2あるが、総得点の信頼度は、93で十分に高い。

4. 診断法 知能特質の分析的な診断をするために、プロフィールを描くように工夫した。

5. 反省 信頼度のわりあいに低い問題を改作したい。

### 4. 知能検査の重みづけについて

田中教育研究所 ○清水 利信  
 安 富 利 光

#### 〔目的〕

知能検査の各下位検査に等しい重みを与えるために、標準偏差の逆数を用いることが屢々行われていた。本研究では、この方法がはたして妥当な方法であるかどうかを検討する。

#### 〔研究資料〕

1951年に標準化されたときの新制田中B式知能検査(全版)の9歳級の児童の資料(男女830名)を用いた。

#### 〔結果〕

各下位検査が総得点に対して等しい重みをもっているか否かの判定の基準には、下位検査と総得点との相関(rgc)を用いた。すなわち、どの下位検査のrgcもすべて等しいばあいに、各検査は等しい重みをもっていると考えられる。10個の下位検査について、SDの逆数によつて重みづけたばあいに、rgcの大きさを考察すると、0.54~0.73の間にあつて、これらのrgcの間には1%の危険率で有意差のあることがわかつた。すなわちSDの逆数に

よつて重みづけをしたばあいには、各下位検査は等しい重みをもつていないといふことができない。

いま、任意の下位検査 (g) の標準偏差を  $S_g$ 、それに与える重みを  $W_g$ 、任意の下位検査間の相関を  $r_{gh}$ 、他の任意の下位検査の標準偏差と重みを  $S_h$  と  $W_h$ 、総得点の標準偏差を  $S_c$  で表わせば、下位検査 (g) と総得点 (c) との相関は次式で与えられる。

$$r_{gc} = \frac{W_g S_g + \sum W_h r_{gh} S_h}{S_c}$$

10個の下位検査の  $r_{gc}$  がすべて等しくなるように、 $w_g$  (又は  $w_h$ ) を決めるためには、上式を解いて、次式の行列式を計算することによつて求められる。たとえば検査1の重み  $w_1$  は

$$w_1 = \frac{\begin{vmatrix} w_{10} S_{10} (r_{2.10} - r_{1.10}) & S_2 (r_{1.2} - 1) \cdots \cdots S_9 (r_{1.9} - r_{2.9}) \\ w_{10} S_{10} (r_{3.10} - r_{1.10}) & S_2 (r_{1.2} - r_{3.2}) \cdots \cdots S_9 (r_{1.9} - r_{3.9}) \\ \vdots & \vdots \\ w_{10} S_{10} (1 - r_{1.10}) & S_2 (r_{1.2} - r_{10.2}) \cdots \cdots S_9 (r_{1.9} - r_{10.9}) \end{vmatrix}}{\begin{vmatrix} S_1 (1 - r_{2.1}) & S_2 (r_{1.2} - 1) \cdots \cdots S_9 (r_{1.9} - r_{2.9}) \\ S_1 (1 - r_{3.1}) & S_2 (r_{1.2} - r_{3.2}) \cdots \cdots S_9 (r_{1.9} - r_{3.9}) \\ \vdots & \vdots \\ S_1 (1 - r_{10.1}) & S_2 (r_{1.2} - r_{10.2}) \cdots \cdots S_9 (r_{1.9} - r_{10.9}) \end{vmatrix}}$$

$w_2, w_3, \dots$  についても同様である。このようにして求めた重みは、SDの逆数による重みとかなり異なつたものである。しかしながら、総得点と下位検査との相関 ( $r_{gc}$ ) はすべて0.61~0.63の間であつて、もちろん、10個の下位検査の  $r_{gc}$  の間には有意差が見られなかつた。

SDの逆数によつて重みづけをした総得点と、新たに計算した重みづけによる総得点との相関を求めると、 $r = 0.93$ となつた。すなわち、各下位検査に与える重みには、2つの方法によつてかなりの差異のあることが見出されたが、総得点に関してはそれほどくいちがいは見出されない。

#### 〔結 語〕

SDの逆数による重みづけは、各検査に等しい重みを与えているといふことができない。等しい重みを与えるには上述したような別の方法を用いる必要がある。しかし、この新制田中B式知能検査全版に関しては、SDの逆数による方法でも実用的には大差がないと考えられる。

### 5. 改訂 M. M. P. I. 短縮版

日本女子大学 兒玉 省 宮崎 洋子 中村 洋子  
 中沢 祥江 莊 浩子 田中 京子  
 ○ 山根 律子

日本女子大学の研究室では慶大塩入教授と共同研究として MMPI の日本に於ける標準化を試み日本版を作成し、更に改訂短縮版 MMPI を昨年発表した。今回はこの短縮版を使用した結果を報告する。

新版を新たに約500名の正常者 (18才以上の各年齢に互る) と精神分裂症患者、その他各種精神病患者約300名に施行した。正常者 (一応周囲の人からおかしな人としてみられていない人をもつて正常と見做した) 500名の平均反応を獲得してそれを異常者の反応と比較する新版 MMPI 改訂の基準的な資料として使用した。そして異常者別に数種の診断スケールの試案を作成した。

かくして Psychopathie, Epilepsie, Hebephrenie, Paranoideform, Katatonie, Schizophrenie unclassified, Paralyse, Depression, Philoponismus, Psychogenie 等のスケールを作成したが被験患者数の少ないものはスケールと呼ぶわけにはいかないので今次発表ではもつぱら分裂症系統のものを主とすることにす。Hebephrenie については問題スコアの平均は34.4, SDは10.8, Unclassified Schizophrenia の平均は35.2, SD は9.2, その他 Paranoideform の平均は33.8, SD が8.7, Katatonie は平均が34.2, SD は9.2である。

そのスケールを使つた診断成績は Hebephrenie については、このスケールで  $\sigma_1$  (シグマ1) の間にはいつたものが76.5%、Unclassified Schizophrenia は66.7%、その他被験者の実数は少なかつたが Katatonie は64.3%、Psychopathie は57.1%等を示している。その患者数の少なかつたものも一応一緒にして平均を求めると、 $\sigma_1$  (シグマ1) の中にはまつたものが71.6%、更に  $\sigma_1$  と  $\sigma_2$  (シグマ2) のほとんど境界線にはまつたもの



を加えると78.2%で約80%の診断成績を示している。故に Hebephrenie その他分裂症の場合に於いてはこの短縮版は十分に使用にたえるものではないかと思われる。

尙本研究に於いては359項目を性格分析の目的をもつて一応13の各種の角度に分析を試みた。即ち健康に関するもの54項、興味46, 自己評価41, 自己意識31, 志気24, 性18, 態度39, 社会性32, 信念44, 感情30, 神経質149, 環境32, 発達57に分けてその各々の面から各人の性格的な分析、並びに異常性の分析を試みた。これ等の項目は各々独立しているのではなくて可成重複しているのは当然のことと考えられるが臨床的使用、または性格分析のためには、一応これらの角度を仮定して分析することが便利のようである。尙これ等の角度によつて個別例を分析して見ると各々ケースが同一病種でありながらもかなり異つた面をもつているのが見出された。

## 6. 日本人のロールシャツハ反応の研究 (12)

### — ロケーションの問題 —

日本女子大学 児 玉 省  
出 田 則 子  
渡 辺 和 子

日本女子大学の研究室では過去六年間にわたつてロールシャツハ・テストの日本人の反応基準設定の為の研究を行い既に四千名をこえる被験者を検査したが、その研究を更に精緻にする為ロケーション・コンテンツ・ディターミナントの各面について研究を行つた。四千名中約千名の被験者を対象として考察したロケーションの問題について報告する。第一にW%対D%の発達的变化を考察したがW%は3才から50才迄漸次増加し特に20才及び50才頃著しく増加し60才以後減少する傾向がある。性別的差を見ると13才から15才を除いては男子の方が女子よりもW%が高く男子の総合的能力の強さが推測せられる。これをカード別に見ると第Ⅷ、第Ⅸ、第ⅩカードはD%が最も高く第Ⅲカード、第Ⅶカードがこれにつぎ、第ⅤカードはD%が最も低く従来考えられていた事と同じ結果が見られた。いずれのカードに於いても年齢と共にD%は減少しているがD%のカード別年齢別変化はカードによつて差が多い事がうかがわれる。第二にW%対W(ダブリウ・カット)%の発達的变化を考えるとW%は3才から8才頃迄減少しその後60才頃迄多少起伏はあるが増加し後、更にW%は著しく増加する。この現象は老人期反応が幼児期の反応に多少類似する傾向を示すものと考えられる。第三にはロケーションの出現頻度について考察した。ロケーションの問題はその反応頻度の関係からすぐさまF+並びにF-の問題並びにP反応の問題に関連する。従つてロケーションを単に感に頼る事又は外国の判定に頼る事は危険であると考えられる。そこでロケーション 毎に反応の頻度を求め 発達年齢的に検討し出現頻度の高いものから 順位を決定し阪大及びベツクの研究による順位と比較した。私達の順位とこれらの順位とは必ずしも一致しなかつたが第Ⅷカードの順位はベツク・阪大・女子大の三つが殆んど同じである。第Ⅴ、Ⅵ、Ⅶカードの順位はベツクとは多少違つているが阪大のそれと似通つている。一般に色彩カードにおける頻度は非色彩カードのそれよりも高く特に第Ⅸ、Ⅹカードの頻度は高い。この頻度は年齢的にかなり差があるようであり特に全カードを通じて15才から17才の年齢層ではその頻度は成人期のそれに比べてかなり違つた傾向を示すようである。又、ロケーションの出現頻度からDは概ね頻度が高くdは低いという結果が数字的にも裏書され Dd, d, dd 等が概念上だけではなく実証的に存在しているのを見る事が出来た。第四に色彩とロケーションの問題を考察したが、これは色彩カードにおいて如何なるロケーションがCとしてとりあげられているか、どの色がとりあげられやすいかという問題である。ロケーション 毎の反応数に対してCの反応頻度を求め色彩別に考察すると領域面積の広い為もあるが、赤、桃、橙色等を取りあげる人は多く、緑、青等をよむ人は比較的少ないように思われる。一般に小さい子供はCでよむ傾向が強くCの反応頻度も成人より高いが、とりまげる色は赤系統が多く、青、緑等は余りとりあげていないという傾向がみられた。

## 7. 日本人のロールシャツハ反応の研究 (13)

### — コンテントについて —

日本女子大学 児 玉 省  
磯 部 佳 子  
畝 本 靖 子

ロールシャツハ反応の中で、コンテンツの角度は、被験者の経験の種類と巾、学校教育の程度、知能の程度、被験者の動機、興味、関心、心理的正常性、異常性等が推定出来ると考えられる。そこで我々の日本人反応の標



る、「お辞儀している」、青年期に於ては「握手している」、更に老人期に於ては「仲裁している」、「手招きしている」等それぞれその年代の特色が反映されている。消極的Mでは一番初めに表われるのが6才で「びつくりしている」、7才で「坐っている」であるが、その後も反応数は極めて少い。尙静的Mは消極的Mの約3倍の種類が見られるがその大部分は身体に関連するものである。又身体を接触させる意味の、「くつつけている」、「寄りかかっている」というのが8歳~9歳から表われている。又多少歳の細かい「足をついている」、「合わさつた」、「ふんばつている」等のような項目の出現は青年期以後である。進取性Mは「ねらっている」、「恐つている」、「にらめっこしている」、「いい争つている」、「強迫している」、「くらんでいる」を除いては全部身体的な表現である。「喧嘩している」、「取り合つこしている」が一番最初に出現し、そのいずれも青年期に於て著しく増加している。mは積極的mが最も多く、静的mがこれに次いで消極的mが最も少い。積極的mでは、「火花が散る」、「破裂する」、「爆発する」、静的mでは「落ちている」、「たれている」、「乱れている」、「ぶら下つている」等がその主な類型のようである。

要するに発達のMの出現を見ると明らかに幼児期的なもの、少年期的或いは青年期的なもの老人期的なものがある事がうかがわれるのである。

## 9. 日本人のロールシャッハ反応研究 (15)

### — P. G. R. 反応との相関 —

日本女子大学 兒 玉 省  
 塚 田 美 喜 子  
 ○ 畝 本 靖 子

我々が従来行つて来た日本人のロールシャッハ反応の基礎研究の一環として、テストの際 P, G, R, と連結させて、ロールシャッハ反応と P, G, R, 反応との関連分析を検討しようとした。特に P, A, At, C, 及びリジエクション、更にカラーカードに対する反応の検討を行つた。対象は13才から77才迄の男女50名で方法はカードを渡してから現われてくる P, G, R, 反応の変化を自動記録器を使用して記録し被験者が言語による反応をした時には、これを記録紙上に表し記録紙上に表れた結果を言語其の他の反応と対照して検討した。

第一には、P, G, R, に於て現われた緊張波型域についていくつかの類型を見出した。即ち第 I カードを提示直後現われる変化については提示と共に直ぐ緊張しその緊張が継続する型と漸次緊張し除々に緊張が解除する型、更に全然緊張しないで終る型に分類される。又言語反応を中心として見た場合には言語反応より前に山となる前山型、言語反応を中に挟んで山となる中山型、言語反応の後に山となる後山型及び言語反応をしても山とならない無山型が見られた。言語反応と言語反応間の状態の類型は、言語反応の度に緊張が現われる型、その間づつと緊張が連続する型、言語反応をするごとに緊張がほぐれる型、言語反応と反応間に何度も緊張する型及び全然緊張しない型に類型された。第二は緊張波型出現率と緊張波型ファクターの占める割合から相関の検討を行つた。ロケーションについては dd と S は W, D より読みにくく緊張するのではないかと仮説と一致し W と D は緊張波型率が低くなつている。デターミノンナントについては、C が感情と関連して精神的興奮緊張があり、緊張波型を伴いやすいという仮説と一致し感情価は高く FC, F はそれに反し感情価は低い。M についてはある種の M の少い人は感情をはき出しているの感情価が低いとの仮説と一致するのではないかと思われた。コンテンツについて感情価の高いものは At, Abst, であり At 反応は不安動揺を醸して緊張波型を伴いやすいとの仮説と一致し又 Abst も仮説と一致の結果を見た。A は容易に読み得る反応で、大部分は P 反応に近いであろうとの仮説に基き検討して見た結果、A と P はほぼ同値を示し仮説を裏づけた。T, R, 数と緊張波型率の相関を考察すると T, R, 数の少い人は緊張に関係し緊張波型が多い傾向にある可能性が考えられるが、TR 数の最上位最下位 10% を取りあげ分析して見ると TR 数の少い人と多い人に緊張波型率が高いのではないかと新しい仮説が考えられるに至つた。

第三には緊張波型率をカード別に考察した。緊張波型を伴いやすいカードは V II IX で V カードは反応数も少く読みにくいカードとなつているが X カードでは反応数も多く緊張波型率は低い。リジエクションの緊張波型率をカード別に考察すると、VI カードはリジエクトの緊張率が高くリジエクトしながら気にしていると考えられ、IX カードの場合はリジエクションが多いにも拘らず緊張率が VI カードの半分位であることから見て、リジエクションは感情価が高くないと考えられリジエクトしながらも緊張せず気にしてないのではないかと想像される。

## 10. 日本人のロールシャッハ反応研究 (16)

### —P. G. R. によるカラーショックの検討—

日本女子大学 ○ 児 玉 省  
戸 塚 田 彩 子  
塚 田 美 喜 子

ロールシャッハに於けるカラーショックの問題は、近年アメリカで実験的にとりあげられて、Lazarus (1945)、Rockwell, Welch, Kubis, Fisichelli (1947~8) その他の研究が発表されておる。ラザールスの研究では、テスト原版と色彩を抜いた図版を使用し、最初は原版、その後白黒カードをスクリーン上に映してグループ・テストを試みた結果 (1) 原版と白黒版の反応には差がない、(2) 白黒版ではF+%が高くなり、(3) 原版では反応数が少くなり、(4) 白黒カードではP反応が増加し、(5) またカラーカードではF-%が増加した。ロックウエルなどの研究は同じく、原版と、白黒版を用いスクリーン上に映して、その提示後五秒内に於いて現われる P, G, R, 反応上の変化を検討した。カラーショックはベックはこれを驚愕反応としロールシャッハは、反応遅滞によつて示される感情的並びに観念連合的窒息であるとしロックウエル等はこの二つの定義に基く假説を設定して検討を行つたところ、どのカードに対しても急激な著しい抵抗の低下は見られず、驚愕反応とは考えられないと結論した。かつ白黒カードによるテストの場合言語性反応が増加する事実から、カラーショックをもつて感情的観念連合的窒息であろうと推論した。筆者等は前の発表者が述べた研究のうち、特にカラーショックの問題を検討したのであるが、これは50人に対する原版を用いた正常な個別的テストの形式によつたものである。結果を述べると (1) Achrom カードと Chrom カードの緊張波型出現率 (各反応総数と緊張波型出現総数の比) は 51.6%対50.0%で有意の差がない。(2) 10枚のカードの緊張波型出現率平均は 50.8%である。(3) 第五 (白黒) カードは反応総数は 10カード中最も少いが、緊張波率は 64.3%で最も高いのに反し、第 X カラーカードは反応数は最も多いが緊張波率は第九位で45.1%、第 IX カラーカードが 57.1%、第 III カラーカードが 50.5%、第 VIII カードの緊張波率は最低で41.5%である。(4) 50人のC反応の緊張波出現率は72.7%、同じくCFが58.7%、C+CFが60.8%であるのに対して、FCは46.4%である。

これらの結果、(a) 第 V (白黒) カードが最も緊張波率が高く、緊張波が必ずしもカラーカードに多くない (3) 参照)。(b) しかるにC及びCF (4) 参照) の緊張波率はFCよりかなり高い。(c) これらの事実から色彩カードは必ずしも平均以上の緊張波率を起さないが、CとCF反応は平均以上の緊張波率を生じている。(d) それ故に、色彩反応は緊張を伴う可能性が多いが、それが色彩だけのために起つた現象であるとは云えない。(e) 形に色彩が加わつたために、反応が難しくなつたものではないであろうかという假説を提唱する。

## 11. Pfister Test について (第1報)

国鉄労働科学研究室 清 宮 榮 一

はしがき : Pfister に依つて創始され、国立大阪病院の沢潤一氏によつて紹介された描画を手懸りとする Pfister Test を国鉄における運転考査の精密検査時に他の諸検査や直接によつて得られた所見を裏付ける為に試行し、更に検査法自体についても若干吟味してみた。

検査法 : 赤黄緑青黒の5色の鉛筆を用い、"松の木、蝶、家、人の顔、三角、四角、丸、さいころ、人"の9課題を8等分の折目を付けたざら紙に自由に描かせ、その所要秒時を測定する。

被験者 : 精密検査受験者1189名、その他の問題者及び一般者数100名。

判定法 : 最初 Pfister に倣い、色彩、形態、書き方、態度其の他の規準について分析的に判定を行つてみたが問題者と一般者との間には有意な差を検出することが殆んど出来なかつた。にも拘わらず兩群の作品から受ける印象には明な差異が認められるのである。そこで上記の諸規準を考慮しながら全体的総合的直感的な評価を行つてみたのである。知能は評点3を平均知、性格は評点5を正常者として夫々 5, 4, 3, 2, 1, の5段階に評価された。知能はさいころ、人の顔、人の3作品について別個に評価され、投影と評価との妥当性及び信頼性をも吟味してみた。性格は作品全体から受ける印象を手懸りとして評価された。

結果 : (イ) 知能評価 さいころ、人の顔、人の各作品の評点及びその計の分布はやゝ左に歪んではいるが概して正規的であつて、各平均評点は 2.83, 2.87, 2.58, 2.76 である、内部相関係数 R は 0.64~0.80 であり、同時に実施した Wechsler 知能検査とのそれは0.61であつた。年齢層別の評点推移曲線も一般に知られている知能の

それと相似的であつた。従つて本検査による直観的知能評価は或る程度可能といえよう。

(ロ) 性格評価 評点の分布はやゝ右方に歪んではいないが正規的であり、その平均値は3.17、知能評点との相関係数 $R=0.250$ 、であつた。一応夫々独立した因子について評価したものといえよう。同時に実施した内田クレベリン検査との相関係数は直観的評定と $R=0.02$ 、数量的処理法による評定と $R=0.06$ で何れも低い。これは本検査による性格評価が正鵠を得ていない為か、内田クレベリン検査とが本検査と評価している性格の次元が異つている為か性格を単に異常性という軸で五段階に評価する点に問題がある為か、現在の研究段階では明にし得ない。然し評価の低い者は日常生活においても異常性を有していることは事実なのである。要するに作品を性格の投影として評価する場合には根本的な事例研究を主とした基礎的研究を行わねばならないであろう。

## 12. 適応性の診断について

日本大学 ○ 長谷川 貢  
精工舎 浅野 行雄

われわれはさきに欲求的適応性検査を創作して、その妥当性、信頼性について考究した。(日本心理学会第19回大会、日本応用心理学会第19回大会、同第20回大会発表)。今回適応性の診断に関する他の諸方法と比較してその診断的有効性を吟味してみた。

- (1) 日常観察に基づいて上長者が行う適応性の評定においては、評定者間の不一致度が概して大きい。
- (2) 面接による方法においては、被験者が意識的に虚偽の供述をする場合が少くない。但し利害関係の少ない場合(例えば退職後など)にはこの傾向は少い。
- (3) 投影法を用いるものにおいては事実に妥当しない解釈が導き出される場合がある。
- (4) 家庭訪問等による素行調査、環境調査は問題行動の事実を明らかにするには有効であるが、その原因をつき止めるのには不十分な場合がある。

これらに比して、われわれの適応性検査には次の如き特色が認められるので、診断用として有効であると考え。

- a. 実施に要する時間、労力が少なくてすむ。
  - b. 採点が簡単で、結果の解釈が客観的にできる。
  - c. 妥当性、信頼性が従来の同種検査に比して高い。虚偽反応、矛盾反応が極めて少い。
  - d. 従来のものには身体的または精神的に病的な人格に対して有効であつても、普通人に適用して効力の乏しいものがあつたが、本検査は普通人の適応性をよく弁別する。
  - e. 不適応の分野分析ができるばかりでなく、機制分析が容易にできる。
  - f. 各個人のユニークな人格像を想定することができると同時に、その類型的な把握が可能である。
- 要するに、この検査結果を基として上記諸方法の如きを併用することによつて一層診断を的確にすることができると信ぜられる。

## 13. 音楽鑑識力テストの実施(Ⅲ)

共立女子大学 玉岡 忍

前回発表に引続き、その後実施した広島、名古屋、山梨等の各小、中、高の結果と、今までの総平均とを發表する。

1. 各校共、リズムが最もよく、次いでメロディー、ハーモニーとなること以前のものと同じ(多少の例外あり)
2. 学校差も多少見られる。中にも、最も著しくよいのは広島大学附属小で、大体、中学程度であり、名古屋〇〇中、及び山梨の〇〇高などはよくない。環境及び教育の差と思われる。
3. 男女差、これも以前と同じく、大勢としては女子がよい。但し、高校は男子の数が著しく少いために完全な比較にはならない。男子の比較的よい学校は、山梨の〇〇中、及び名古屋市の〇〇中などである。
4. 今までの実施した学校すべてを総計して平均を見ると次の通り。(小2468名、中1538名、高4677名、計8683名)。

イ、小学校から高校に至るまで、漸進的によくなつていて殆んど例外を見ない。これによつて音楽鑑識力は年齢に即して発達するものであることが判る。

ロ、小学校低学年の差は少いが高学年になるにつれて差がやゝ大きくなる。殊に三年と四年の差及び、小六と

中一との間に進歩が見られる。

ハ、大学生は比較資料として出して見たが、高校までのような発達段階は見られない。

以上の結果から総平均は、全国平均に近いものと思われるが、尙他地方について行い、人数も増して吟味したいと思う。

## 8. 社 会

### 1. 生活時間配置より見た都市と農村の比較

#### — 家事、労働、文化的な生活時間 —

群馬縣勢多郡荒砥南小学校 石 綿 三 喜 雄

目的 生活時間全体の中で文化的な生活時間、家事的な生活時間、生理的な生活時間はどのような位置を占めているかを明らかにし、農村に於ける労働がどのように学習、生活態度に影響を与えているかを考察する。

方法 調査対象の抽出法、集落抽出法により農村を荒砥村中学校学年より一学級抽出、小学校より六年一学級抽出した。前橋第一中学校より同様にして選んだ（中都市）東京、曳舟中学校より比較のため、資料の提出を仰いだ。期日、1955年8月、9月の授業日、休日。

分類方法 (一)学校生活時間 主として学習のための時間、これに付随する時間。(二)家庭生活時間 (イ)生理的な生活時間 睡眠、食事、身のまわり、入浴、医療、休息等。(ロ)家事的な生活時間 炊事の手伝い、裁縫、洗濯、掃除、雑用、他の文化的、社会的な生活が営まれる。

お使い等年間を通じ行われ、生産的な労働とみられないもの、子守りも入れる。(三)労働時間、生産的な労働でアルバイト、内職、農業労働をさし、農村では農繁期にこれらの問題を無視して教育の効果をあげることは出来ない。(四)文化的な生活時間 社会的、文化的な能力再活用を重視して、運動、遊び、読書、書き物、勉強、ラジオ、娯楽とした。同時に二つの行動をとる事が多く、ラジオを聞きながら裁縫したり、子守り、炊事などをし又都市の子供が雑誌をたのしみとして読むのに対し、農村の子供は勉強と考える者が多い(28年)など、厳密な分類は困難である。

結果 学校生活時間 東京、荒砥はほぼ同じであるが通学時間は東京10分台に対し荒砥80分である。生理的な生活時間、睡眠時間は何れも同程度で460分～590分で大差はないが荒中女子が最低で小200分、中女360分、男380分、東京女20分、男16分、前橋女36分、男14分で、差が極端に開いている。都市では休日を休息にあてているが荒砥では労働力として、使われる。家事的な生活時間平日荒砥男55分女117分、休日男80分女240分、東京平日男29分女81分、休日男69分女171、前橋休日男87分女175、男女差も最も甚しいもので、女子が男子の数倍を示す。女子の文化的な時間を少なくしている原因であろう。子守りは荒砥小6年77%しているが、都市には殆んどない。炊事洗濯も少数ではあるが男子もしている。

文化的な生活時間、荒砥平日男149分女119分休日男285分女164、前橋休日男497分女341、東京平日男340分女275分休日男652分女400と、農村の生徒が恵まれていない事が判る。運動、遊びは、小六が最も多く上学年程少い。読書時間も文化的な時間に比例している。荒砥の生徒は運動、遊びの占める割合が高い。性別に見ると女子が男子より恵まれない。農業労働自体の進歩はなされていない。渡労より来る学習への悪影響を考える時、農業労働の進歩の必要を認めると同時に、現在では農村で家庭学習に期待する事は無理である。

### 2. 戦後10年間の社会現象に対する適応の一調査(第2報)

南 山 大 学 寺 澤 ひ さ

目的 終戦後10年間に生じた社会現象の中「産児制限」「離婚」「女性職場進出」「性的娯楽流行」「国際結婚」の5項目に対する準戦後派と準戦前派と戦前派の反応を比較し、各々の社会適応の状態を見んために本調査を行った。

方法 第20回大会発表研究抄録集参照。

被験者 準戦後派(18才～20才)を82名(男55名、女27名)。準戦前派(25～30)を59名(男39女20)。戦前派(35以上)を37名(男20、女17)。名古屋市内より選択。

結果 1, 産児制限 三派共賛成が多く、又男子は女子より賛成が多い。賛成の理由としては「楽な生活」が一番多く、次いで「子女の十分な教育」でこの理由は準戦前派及び戦前派が準戦後派より目立つて多い。又「国力増進」の為に賛意を示す者が準戦前派の男子に多い事は興味がある。不賛成の理由としては「非道徳的行為」が圧倒的に多く、特に女子が男子より多い。その他「日本民族滅亡」「母体の健康」が不賛成の理由として挙げられる。

2, 離婚 三派共圧倒的に不賛成が多く、中でも戦前派が最も多い。不賛成の理由は「結婚の軽率視」「利己的行為」「非道徳的行為」「子供の不幸」「女子の不利」の順である。特に女子が男子より多く「利己的行為」「子供の不幸」「女子の不利」を理由に不賛成をしている。離婚への賛成の理由には「個人尊重」「女性解放」があり、準戦前派の女子にその傾向の強いのは興味がある。

3, 女性職場進出 全般に賛成が不賛成より多く、特に女子が男子より多く、準戦後派と準戦前派の女子は95%が賛意を示している。賛成の理由としては「女性の社会的視野拡大」「女性の経済的自立」「男女同権実現」「女性むきの仕事」がその頻度数の多いのから挙げられる。不賛成の理由には「女性の義務怠慢」「女らしさを失う」「男子の仕事をとる」があり、男子が女子より多く不賛成の意を示している。

4, 性的娯楽流行 圧倒的に不賛成が多く、準戦前派の男女及び戦前派の女子は100%不賛成である。不賛成の理由としては「青少年への悪影響」「顔発的社会現象」「社会風紀を乱す」がその主なものである。一方賛成の率は極めて少く、理由としては「抑圧解放」「学問的研究」等で特に前者は男子に多く後者は女子に多い。

5, 国際結婚 全般に不賛成が多く、その理由としては「風習の相違」「不真面目な動機」「不幸な結果が多い」「子孫の不幸」がある。賛成の理由には「真面目な結婚」が一番多く、次いで「人種平等」「国際親善」があるが、準戦前派の女子が最も消極的に賛意を示している。

全項目を見ると準戦後派は準戦前派及び戦前派に比して賛成と不賛成の比率の重複が少ない。又「国際結婚」以外の各項目に於て、女子は男子より賛成と不賛成の重複が多い。

### 3. 三角関係について(第1報)

東京家庭裁判所 日 上 泰 輔

I 目的 三角関係について従来科学的にはなにも知られていなかったもので、それに対するアプローチをこころみることとした。

#### II 被験者

(1) 被験者は1954年4月より1955年8月に至る17ヶ月間に私自身が担当したマリッジ・カウンセリングの来談者501例

(2) 501例を調べた結果三角関係は202例あつたに反し、二者関係は299例であつた。

(3) マリッジ・カウンセリングについて恣意的な選択を全然こころみていないので、無作為抽出標本と考えてよい。

#### III 結果

(1) 三角関係は地域によつて発生率がらうか。

イ、1955年10月の国勢調査によると各区別の人口と各区別の実際の事件発生数とを比較した結果、都心部は周辺部より三角関係の発生率が高いといえる(都心104例、周辺74例、 $X^2 = 5.753$ ,  $.02 > P > .01$ )。

ロ、二者関係についても同じ様な事が云える(都心151例、周辺116例、 $X^2 = 5.406$ ,  $.05 > P > .02$ )。

ハ、それらを合せた男女葛藤全般についても、都心部は周辺部よりも発生率が高い(都心255例、周辺190例、 $X^2 = 11.012$ ,  $P < .01$ )。

ニ、三角関係と二者関係とでは、東京都の都心周辺別には差が見られない。

(2) 結婚後の経過年数によつて三角関係のあらわれは違つてくるか。

三角関係は結婚当初には発生率が低く結婚年数の増加と共に漸次発生率を増し、第8年目に最高に達しそれから下降しはじめる。これに反し二者関係の葛藤は結婚当初に最も発生率高く、結婚年数の増加と共に漸次発生率を減じる。両者の数字の違いを  $X^2$  検定してみると偶然でないことがわかる( $X^2 = 36.750$   $df = 8$   $P < .01$ )。

(3) 三角関係はどういう時に起るか。

便宜上 新婚時代 男34才女29才以下、中年時代 男35~49才女30~44才、晩年時代 男50才女45才以上という大まかな扱いで事件発生時の年令を調べて見ると、三角関係は新婚時代47、中年時代104、晩年時代45例とな

り、二者関係は新婚時代159、中年時代99、晩年時代35例となり、三角関係は中年時代に多発し二者関係の葛藤は新婚時代に多発するといえる ( $X^2 = 43.635$   $df=2$   $P<.01$ )。

(4) 結婚の形式によつて三角関係の発生率に差が見られるか。

妻が男をつくつた場合(介入者男)は、夫が女をつくつた場合(介入者女)と較べて、見合結婚をした者の率が高く、恋愛結婚をしたものの率が低い ( $X^2 = 26.110$   $P<.01$ )。

#### 4. 電話交換作業の Action Research (そのII)

廣島大学 兼 子 宙  
                    正 戸 茂  
                    ○西 山 啓

目的：本研究は、電話交換作業における交換要員のチームの編成を、ソシオメトリックテストの結果に基づいて行い、その成果を作業監査成績及び、各チーム内の人間関係の点より考察検討するものである。

方法：鳥取縣倉吉電話局(共電式6級局)の女子交換要員62名の中から、深夜作業(泊り作業)の可能な36名を、ソシオメトリックテストにより、一組6名の作業チームを編成させた。深夜作業の作業成績の測定は現在の監査機能では不可能であるため、主として質問紙法による作業場面におけるチーム内の人間関係の測定を行い、当該チームを、屋間作業の市外線記録台及び案内線記録台に配置し、これを特別配置とした。一方ソシオメトリックの結果を加味しないで編成したチームを一般配置として、両配置の作業成績を、同電話局監査室の手による監査資料より、①応答時分、②保留時分、③切斷時分、④通話時間誤差、の点から比較検討を行った。

結果：市外線記録台においては、①応答時分が、特別配置の場合、平均3.6秒( $\sigma=.11$ 秒)、一般配置の場合、平均3.8秒( $\sigma=.4$ 秒)となり、5%以下の危険率で有意差を認め、②保留時分は、平均20.6秒( $\sigma=2.6$ 秒)対24.0秒( $\sigma=5.6$ 秒)で1%以下の危険率で有意、と共に特別配置がすぐれている結果をえた。③切斷時分については、僅かに特別配置が優れていたが、有意差は認められなかつた。④通話時分誤差においては、特別配置よりも一般配置が優れていたが、これも有意差はない。

案内線記録台においては、①応答時分が特別配置の場合、平均3.8秒( $\sigma=.54$ 秒)対4.7秒( $\sigma=.69$ 秒)となり、5%以下の危険率で有意差を認め、②保留時分は、平均24.3秒( $\sigma=6.6$ 秒)対27.6秒( $\sigma=8.8$ 秒)となり、1%以下の危険率で有意差を認めた。③切斷時分については、特別配置が、市外線記録台同様、有意差を認める程の優れた結果をもたらさなかつた。この事は、交換要員相互の協力を必要とする作業においては、特別配置が有意な効果を表わしていることが示され、現在の観察期間の3ヶ月(30年12月中旬~31年3月中旬)を、もつと延長すれば更に効果が期待出来ると考えられるので、引き続き観察中である。

特別配置施行以前及び配置後3ヶ月経過しての質問紙法による作業場面の人間関係に関しては、同局が比較的小規模で、人員が僅少であること、各交換要員の勤続年数が一般に長い事、等から急激な変化は見られないが、作業チームの特別編成が作業及び日常生活において、以前よりも好転したという結果を得たのである。

## 9. 産業・職業指導

### 1. 職業指導主事の職務内容に関する研究

甲府工業高校 水 上 資 幸

#### (一) 目的および意義

職業指導主事の職務内容を明らかにする。学校職業指導管理運営の中心として職業指導主事が制度化され、学校職業指導は漸く振興の基礎を築かれたが、その職務内容は未だ具体的に明示されていない。これが明らかにされれば職業指導は学校運営上の重要な一環として明確に位置づけられるし、ひいては職業指導主事設置ないし職業指導主事専任化の問題解決を推進する上にも寄与しうるであろう。

#### (二) 研究方法

##### 第一 時程録による自己分析

(1) 職務内容の領域設定—文部省編「職業指導主事の手引」、および自己の所見に従つて、職業指導主事の活動領域を七つに大別し、各領域は更に細分した。— I 管理(企画、庶務、会計、連絡)、II 渉外関係(官庁、Peso 会社)、III 生徒理解(検査、調査)、IV 個人指導(相談、斡旋、追指導)、V 集団指導(講話、生徒委員) VI





### 3. 交通心理学研究(第3報告)

#### 一選択反応時間テストにより假定された 合格域の事故頻発者辨別への応用の試み一

東 北 大 学 大 志 協 義 一  
津 野 知 文  
○石 郷 岡 慶 泰  
福 島 典

第二報告者の研究にひきついで、各分布に関して、同様の事が他の標本に就いても云えるか、又、此の測定値がテスト得点としての可能性を持つか、更に此等の数値を用いて事故者の弁別が可能かどうかという事についての極く最初の試みの為の研究を行った。私は第一に仙台市南署の免許証書変えの運転手と第二に栗原鉄道従業員及び運転手、各37名と53名の二つの標本で、第二報告者と全く同様の実験を行つて、比較研究した。

全体の平均 $\bar{x}$ の曲線はやはり左にひずみ、右に少し流れる傾向が一般的であること、稀現刺戟、赤、に就ても同様に平均の曲線は右に流れるのであるが、前の研究と同様、ここでも $\bar{x}$ と比較してやゝ異つた曲線を示す。即ち曲線のデコボコが多いし、中心傾向が弱いのであり、これは心的機能の分配曲線が得られるには粗害要因があまりにも働き合っているのではないかと想定させるのであります。又 Error を index としてとる場合にはサンプリングの取り方が問題になる。例えば栗原鉄道の群ではポアソン型をなさない。此のサンプリングの問題については今後十分検討する必要がある。変位係数(V)の一致度は他のインデックスよりも高くインデックスとしては安定度が高いと考えられる。所が、此等のインデックスに5名の事故者を当てはめて見ると $\bar{x}$ は棄却域に全く入らぬばかりか5名とも平均の近くに位置している。稀現刺戟もそうであるが2名だけは棄却域の近くに位置している。エラーは所属グループの平均以上の値を示しておりVも平均以上の値を示している。が Error は棄却限度は到しない。

かくて一応、全体の平均 $\bar{x}$ は index としては不適當と云つて差支えないし、他の index も積極的に此の場合事故者の弁別を云為するに不十分である。即ち何れか一つの index に依つて弁別することは出来ない。けれども、稀現刺戟の条件分析的研究及び Error に関する標本の属性分析及び4つの index 相互の関係をより深く研究して行く事に依つて、そして又、これら index の或る組合せ又は加算値から割り出した得点分布の研究による rating に依つて事故頻発者と他のものを比較研究する事に依つて弁別が出来るのではなからうかという予想が立ち得るものと考えられるので、今後この点の研究と、実証的條件分析と現場に適した測定装置の研究を平行させてやつて行く必要があると考えるのであります。

#### 4. 自動車の長距離運転における疲労度検査

名古屋工業大学 村 井 忠 一  
愛知学芸大学 ○市 川 典 義

目的 自動車の長距離運転作業によつて運転者及び同乗者がどの様な型の精神的疲労を生ずるかという実態の調査及び疲労検査法として用いたフリッカー値、選択反応時間の妥当性をも併せて考察する。

方法 A, 用具: フリッカー精神疲労検査器、選択反応時間計、自覚症状調査紙(労研式)。  
B, 測定計画: 使用自動車は大型バス一台、大型乗用車二台、測定日は昭和30年10月20日より3日間でこれを3コースに分け、第1日コースは名古屋(工大)一静岡、第2日コースは静岡一箱根(往復)、第3日コースは静岡一名古屋(工大)間を行く。測定は各コースとも1時間毎に行い、被測定者はバスにおいては運転者、車掌、乗客。乗用車においては運転者と助手とした。其の外路面状況、走行時間、走行距離、天候等も測定を行つた。

##### 結果の概要

1, 第1日の行程において、フリッカー値は60km迄漸次的に減少、以後は被験者によつては増加するもの、そのまゝの値を持続するもの、更に減少するものがあるが、全般に平常時もしくは出発直前の値よりも減少している。反応時間においては年長のバス運転者のみが50kmの所で大きな値を示し、他の被験者では一定の傾向を認める事が出来なかつた。

2, 第2日のコースにおいては、フリッカー値は平常時及び前日コースの値よりも午前午後を通じて低く殊に出発直前は著しい値の低下を示した。これに反し反応時間は午前よりも午後と時間の推移に平行して増加している

3, 第3日のコースにおいては、フリッカー値は、時間の経過と共に低下し、反応時間は増加する。

以上の諸結果の考察から問題とされる点はフリッカー値と反応時間のくいちがいであり、この事は同時にこれ

らの検査法の疲労測定上の妥当性の問題とも関連してくるので我々にはSDを主として比較考察して見る事とした。次にその結果を簡単に記すと、先づ第一に第1日コースの120km以後のフリッカー値のSDは極めて大きな値を各被験者とも示した事があげられる。第2日コースではSDは全体に小さいが、午後の方が午前よりもやゝ大きい事が認められ、第3日コースでは出発より次第に増大し、岡崎一名古屋間において最大となつている。この様な結果から我々はSDが疲労の有効な指標として考えられないであろうかという事を感じるのであるが、この事は今後の課題としてもこゝでフリッカー値が平常時よりも小さく反応時間が長い事をもつて一応疲労の顕現と見做しうるならば、以上の諸結果は自動車の長距離運転作業における疲労の状況として出発から次第に増加し、一時的回復といった波型の経過をたどりつつ逐時的に蓄積され、大よそ170kmにおいて精神的不安定といった形で最大の疲労があらわれ、以後は逐日を追うて疲労の蓄積は後半午後においてあらわれてくるといへるのではなかろうかと考える。

最後に疲労感についていえば、第一日の走行後が最も自覚症状を訴へるものが多く第二日、第三日になると少くなる。又訴える内容としては頭が重い、体がだるいといった身体に関するものが多く、ついでねむい、いらいらするといった精神的症状がこれにつき、目がちらつく、足許がふらつくという神経感覚的症状の順であつた。

## 5. 災害テストの基礎的研究

立 教 大 学 山 本 至 朗

研究目的 災害テストの\*新しい理論的構想の実証的研究を行う。

\* (一) 災害の場の力学的条件をテスト場面に再現する様に構成する。(二) 災害発生原因に関係するいくつかの精神機能のバランスによつて診断する。

研究内容及び方法 被験者の作業内容及び災害の実態を分析して、その時の心理的メカニズムを再現する為に一種の Critical Situation としての複雑動作反応を測定すると共に、又災害原因に関係すると考えられる精神機能として、視知覚反応及び“単純動作反応”を測定し、三者のバランスを分析した。実験装置は、行動記録器に自作の抹消用紙を入れ観察窓より反応する形式のものである。一方テストの Criterion としては、被験者廿名に対して現場の監督者二人の災害頻発傾向についての三段階評定によるものを用いた。被験者は、紙製品(封筒の口のりを流れ作業で付けている女子従業員である。)

研究結果及びその考察 実験結果は、先に評定された災害頻発傾向者、中間者及び無災害傾向者の三集団について、次の値を求めた。(一) 視知覚反応得点分布(二) 単純動作反応得点分布(三) 複雑動作反応得点分布(四) 視知覚反応得点と単純動作反応得点の百分比(五) 視知覚反応得点と複雑動作反応得点の百分比(六) 単純動作反応得点と複雑動作反応の百分比。

その結果(一) 災害頻発傾向者は、複雑動作反応に於て最も良く診断出来た。しかし、精神機能のバランスと云う面も加味すると、視知覚反応得点と複雑動作反応得点の百分比で診断した方が一層正確に予診出来る。

(二) これに対して一方無災害者ないし中間者を考察してみると、兩者の間に明らかな得点傾向はなく、災害頻発傾向者との関係で、これらが直線的又一次元的関係にない事を示している。

(三) 参考までに、同一人に対して適性の程度で三段階に評定し、同様に得点ないしバランスの分布で考察してみた。それによると不適性者は全員災害頻発傾向者に含まれたのに対し、適性者は全員無災害傾向者の集団でなく中間者の集団の者であつた。

(四) 不適性者は、三反応得点共に悪く、診断も簡単だけれども、適性者については診断も困難で、わずか単純動作反応に対する複雑動作反応の百分比に於て割合明確に出ている。

(五) この場合も同様、適性者~不適性者の間に一次元的な関係はない。

結論 被験者が少いので十二分な証明は出来ないにしても、初めの二つの新しいテスト理論は実証されたと思う。しかし、この種の研究は、各種の災害について実証的研究が積み重ねられる事によつて証明されるのであつて、今後、別の産業分布で研究を進めて行きたいと思う。尚、災害頻発傾向者は災害頻発者と同一でない事了解されなければならない。

## 6. 交通事故防止について

国 鉄 労 研 鶴 田 正 一

国鉄内運転事故一般は、各種の事故防止対策がその効を奏し、漸減している。殊に、その責任が国鉄職員に帰

せられる責任事故は、採用時の心理適性検査と運転関係従事員に対する定期的精神機能検査を実施することになつてからは激減し、昭和29年度においては、これら検査の実施前に比して75%減少、戦前最良の昭和11年度に比しても50%の減少という成果を示した。しかし、この中であつて、踏切障害事故のみは増加の一途をたどつてゐる。この踏切障害事故は、踏切警手、列車乗務員等の国鉄側職員、自動車、歩行者等の通行者、踏切構造そのものとの三条件の関係において発生するものである。従つて、この事故防止対策は、この関係を適切にすることにある。そこで、この対策の基礎資料をうるために、信号保安協会の踏切整備基準委員会の資料により、踏切道に対する危険発生因子28種目について、事故発生踏切と、一般踏切との関係を統計的に調査してみた。これによると、踏切警手に対する接近ベル、電鈴、列車乗務員に対する汽笛吹鳴警標、通行者に対する踏切警報機、照明状態等の有無、良否は、数値の上では有意の差を示していない。関係の深い結果を示したものは、交通量、列車回数、踏切から列車までの見透距離、踏切種別、天候、特に通行者の踏切道徳である。この踏切障害事故の内容をみると、その80.6%は自動車その他の諸車に、18.2%は歩行者に責任が帰せられる。すなわち、98.8%が通行するものの側の責任になつてゐる。踏切警手に帰せられるものは1%足らずである。全踏切道の立体交差化、全踏切道への踏切警手の配置等について、殆んどその限界に達している現状においては、踏切事故防止対策は、通行するものに対する交通道徳、殊にオート三輪車、トラック運転士等に対する有効な啓もう方法を具体的に研究することに力を注ぐべきである。

## 7. 都内における自動車事故の原因研究特に自動車損害賠償法実施の影響

日本大学 ○渡 辺 徹  
                  淺 井 正 昭

都内における自動車事故の原因を研究して見ると遠い基本的な原因と近い直接な原因とに区別して考えるのがよいように思う。前者は都内人口および登録自動車数の増加で、後者は原因が自動車側にあるものと歩行者側にあるものがある。昭和30年警視庁交通第二課の「交通事故白書」を見ると、26年度から30年度に至る人口は6,748,950—7,174,028—7,523,994—7,807,666—8,091,000であるのに対して、登録自動車数も84,956—130,800—186,466—226,463—239,900と累年増加し、これらと大体並行して事故件数も8,580—12,097—15,512—16,751—16,050と年々増加し、30年度の事故件数だけが前年度より減少している。

死者数や負傷者数も累年増加の傾向は他とほぼ同様である。もし自動車事故増大の基本的原因が人口や登録自動車数の増加にあるとするならば、国家乃至社会は「自動車損害賠償保障」の制度を設けて、国家乃至社会全体の福祉、安寧を図る責任があるように思う。しかしかような事故数の増大を30年度に見るように直接の原因に多大の注意を払ふことによつて多少でも緩和することができるとすれば、それは大部分心理学者の仕事になつて来るかと思ふ。直接原因の自動車側にあるもの前方注視欠如21.7%、優先交通権無視10.9%、追越不注意10.1%、ハンドル操作不確実9.9%、速度違反7.1%、その他21種40.3%と歩行者側にあるもの横断上不注意44.1%、車道飛出21.4%、その他7種34.5%とにつき30年と29年度とに事故件数の増減があつて、前記のような30年度件数の減少に少からず寄与していると思ふ。そこでわれわれはかような直接な心理的原因の除外に努力すると同時に、基本的原因を緩和する一対策として案出、実施されるに至つた「自動車損害賠償保障法」、「同法施行令」、「同法施行規則」の内容およびこれらが本年2月1日施行された以後、社会の福祉におよぼした影響ならびに直接原因に対する作用等を明らかにしたい。まずこの法律の目的は第一条に「この法律は自動車の運行によつて人の生命または身体が害された場合に於ける損害賠償を保障する制度を確立することにより、被害者の保護を図り、(以下省略)」と規定してあつて、自動車は「この法律で定める自動車損害賠償責任保険の契約が締結されているものでなければ運行の用に供してはならない」(第五条)ことになつてゐる。施行令第二条で責任保険の支払金額を規定している。すなわち(1)死亡した者、30万円、(2)次(イート)の傷害を受けた者10万円、(3)前号イート以外の傷害を受けた者3万円。本年2月1日から3月31日迄に警視庁に報告された障害者推定件数3,234名で、都内では目下これを元受保険会社や共同査定事務所等で受理し、処理して、請求に下廻る保険金の支払をいそいでいる。この間警察に達しない示談や機逃等が社会問題として取り上げてよからう。なお公私の病院にいま收容されている重傷者は症状固定後の更生についてはわれわれ心理学徒の取り上げなければならない大きな問題になると思ふ。

## 8. SRA 態度測定法の吟味(3)

— NKR 法との比較研究 —

SRA 態度測定法を吾国の企業の実情に合致する様に改良した NRK 式従業員態度調査法の try-out の結果については一部を日本心理学会第19回大会で第2報として発表した。同法は既に実用に供せられ多方面に於て施行中だが、その追試のひとつとして某窯業での調査の一部を第3報として報告する。NRK (日本労務研究会) 式態度調査を約1,000名に行つたが、その中200名に対し同時にNKR (日本国有鉄道労研) 式態度調査を行い、応答不備者を除いた161名について結果を比較検討した。

結果 (1) 8課に分けた両式の総合点についての列位相関は  $p=0.83$  でかなり高く、一応同一次元即ち、集団概念としての産業モラル一般を求めている事がわかる。(2) NRK 式の総合点と NKR 式の総合点及び各質問とで相関ありと認められるものは殆どない。(3) NRK 式のカテゴリ-得点と NKR 式の総合点及び各質問との関係の中 NRK 式のカテゴリ-VII「経営に対する信頼」と NKR 式とに相関が認められる。NKR 式は所謂、会社との一体感を主に診断すると云われているが NRK 式のカテゴリ-XIII「会社との一体感」との相関は認められぬ。(4) NRK 式の各質問と NKR 式の総合点及び各質問との相関では NKR 式の総合点及び第1, 3, 4問に於てやゝ相関性が認められるが第2, 5問は NRK 式との間に積極的な相関性は認められない。

考察 両式は総合点の単位集団についての相関度はかなり高いが、各質問についてもつと相関性が認められてもよいと思われるがそれ程ではなかつた。しかし、両式が果して全面的に同じ次元のものを扱っているか否かはこの限りでは知り得ぬが、かなり近接した面を持つている事はわかる。

NRK 式の「経営に対する信頼」と NKR 式の「現在の仕事の続行意志」との間に相関があるがむしろ NRK 式の「職務の安定」「会社との一体感」及び「昇進、進歩の機会」等との間に高い相関が認められてもよいと思われる。仕事継続に打算的な面を感ぜしめる。又、NRK 式の「管理の有効性」NKR 式の「現在の仕事選択の満足感」との間に相関が認められるが、会社の幹部が仕事遂行上万全を計つていると感ずる者は現在の仕事について満足感を持つている事がわかる。NRK 式各問と NKR 式各問の間では「認められている事の満足感」と「仕事選択の満足感」との間に相関が認められ、結局、「経営に対する信頼」と云う事が根底にみうけられる。しかし、NKR 第3, 5問と当然 NRK 式の「経営に対する信頼」とに相関が認められてよいと思われるが相関を示していない。これは、この某窯業の特殊性とも考えられるが、この調査の限りでは判らない。

NKR 式は「会社との一体感」をみていると云われているが、わずかに「会社の一員たる事の誇り」に於て相関が認められるのみで両式が相対的に流動して固定したものとして捉え難く、もつと多くの集団を観察せねばならぬ。

## 9. 職場における労働者の態度とその測定の問題

労働科学研究所 大須賀哲夫

職場に於ける態度調査の一環として従来モラル・サーヴェイが行われているが、態度研究は、労働条件という文脈とパーソナリティの力動性のなかでその構造連関を明らかにしていかなければならない。そのための第一段階として、意見調査・ソシオメトリー・数種のパーソナリティ・テストを併行して実施してきた。本報告ではとりあえず意見調査についてだけふれる。

質問紙の構成：労働者の適応を要請する場面として、経営・上司・同僚・仕事・組合の五領域を想定し、各項目に10問あて合計50問を設定した。各問には3種の応答があり、その何れかにチェックするしくみである。これらの反応の総体が応答者の職場適応の状態に対応するものと考え、結果の数量化に際しては、以上の適応の状態を経営の formal な価値観から評価するという形で、各問の反応に+、-、○を与える。したがつて、50問の評定の合計からモラル・インデックスが導きだされる一方、5項目のプロファイルは各領域での適応の方向（経営にたいしてプラスかマイナスか）とその強さのベクターを示すものとして考えられる。

尺度の信頼性：以上の操作によつて導きだされたモラル・インデックスは、男子  $11.7 \pm 11.5$  点、女子の平均  $4.6 \pm 12.6$  点の何れも正規分布型となる。1月及び1年後の再テストでは、 $r=0.66 \sim 0.68$  となり、折半法では0.915の高い相関係数をえた。

尺度の妥当性：尺度のなかに如何ほど経営の formal な価値観が実現されているか。個人のモラル点は人事考課点 (0.41)、技能評点 (0.50)、疲勞自覚症の訴え (-0.48) と何れも有意の相関々係を示し、適性々能の

低（高）い割に技能評点の高（低）いもの、モラル点が著しく高い（低い）事実も認められた。また経営にたいしてネガティブな informal group では、モラル点の低いものほど高い地位を占め、集団の凝集度とモラルが逆相関する一方、高モラル群では凝集度とモラルが正相関することが見られている。その他、知能や情意不安や権威主義的傾向等の主体的条件と、職業の水準や職制上の地位や資本の性格・規模などの客観的条件との間にもほぼ妥当な結果をえた。

意見の構造的分節：モラル点は単一尺度としての量的な表示に止まるので、モラルないし意見の構造的な内容についてはプロフィール等によらなければならない。その際、5項目の各評点間の内部相関係数の平均値（R）が集団の意見構造の分節度をしめすインデックスになりうると考えられた。Rと情意不安（0.80）、Rとモラル水準（-0.83）との相関々係は、要求阻止にもとづくパーソナリティの退行的現象が意見調査に際して常同的、固定的な反応傾向（Rが大）として表われ、モラル水準の高低が意見構造の分節度の変化に支えられていることを推定させるものと考えられた。

## 10. ソシオメトリによる産業社会の凝集性の数量化について

静岡大学 北脇雅男

集団凝集性の概念は、社会心理学や産業心理学に於て重要な概念である。この凝集性と集団生産性 Group Productivity との関係が論ぜられるにつれて凝集性の客観的測定が益々要望されるようになって来た。

本研究では、産業社会にソシオメトリを課した結果を解析して集団凝集性の指数化を吟味するものである。

詳細は、心理学研究（1956、第26巻、第6号）に登載予定であるがその大要を示せば次の如くである。

(1) 同一資料に6カの数値算定の公式を適用したところ、各指数のあいだにかなりの経路が見られたから、指数間の内部相関を求めた。その結果を見ると、最大.851、最小.339の $r$ が得られた。

(2) 指数間の $r$ の変動は、主として数値算定の公式に由来するものと考え、 $r$ から偏相関を求めた。この偏相関には公式の類似性、すなわち各指数におよぼす共通因子の寄与の度が充分反映している。

(3) 指数の妥当性検定のため、集団特性の標識として賃金、知能、向性、勤続月数、欠勤日数をえらびこれらと指数との相関を求めた。これによると、最大は $r = .437$ 、最小 $r = -.364$ 、 $\bar{r} = .155$ となつている。いま、 $\rho = 0$ とすれば知能と向性は特定の指数1ccと1のあいだに有意の相関が認められたが、Productivityの標識との間には全く相関がない。

(4)  $r$ は2系列の変量分布に直線的関係が予想されるときに用うべきであるが曲線的のときには相関比法が妥当である。ところが、1ccと1にのみに心理的特性と有意の相関の現われたのは偶然ではなく、兩者の系列に直線的な関係があるからである。

(5) Productivityの標識との間に有意の相関が見られなかつたのは従来の研究と一致する。

元来、凝集性の高いグループ必ずしも「好ましい人間関係」にあるわけではないから、指数とProductivityとの有意相関の有無が指数の妥当性を決定するメルクマールにはならない。

## 11. 事務能率と文字に関する研究

### — 読みやすさについて —

労働科学研究所 太田垣瑞一郎

事務作業の機械化に伴い、漢字を数字におきかえる必要にせまられているが、数字に比して漢字はその有意味特性からする伝承的な優位性をもつものとして尙必要以上に事務作業にもちこまれている。実際事務作業に於ける能率研究の緒として漢字と数字の読み易さにつき三つの実験を試みた。

実験I 実際に事務作業の上で書字された3桁数字及び3字局名各々20組を羅列した刺戟10枚を読ませると同時に、確信なく読んだ文字に印を付けさせ20組毎のラップタイムを記録して、数字と漢字について練習の効果を比較した。

実験II 連続瞬間露出器により数字及び漢字各100組を用い、20組づつ2秒毎に呈示し、呈示時間内に出きるだけ多く読みとらせ、露出時間100 $\sigma$ 、200 $\sigma$ 、500 $\sigma$ 、1000 $\sigma$ について、読みとりに要した露出回数を比較した。

実験III 特徴ある3種の筆跡を選び、同一筆跡の数字と漢字の各6組を50 $\sigma$ 、100 $\sigma$ 、200 $\sigma$ 、500 $\sigma$ 、1000 $\sigma$ の露出時間で2秒毎に連続呈示し認知し得る露出回数及び認知字組数を求め、筆跡別に比較した。

結果 1, 読み上げ速度は概ね6回で数字漢字共一応の習熟程度に達するが、習熟未完成の時期には漢字は甚だ長時間を要し、数字は練習初期と後期の差が殆んど見られない上によりはやい。

2, 判読に対する確信の度合も数字にはるかに有利である。

3, 数字の方が短時間に正確に認知し得るが、時に漢字の有利な場もある。

4, 同一筆跡の数字と漢字の認知しやすさの関係では、500σ以下の露出時間に於て数字にはるかに有利である。

## 12. 成人用知能検査の一考察

人事院任用局試験第二課 金 平 文 二

「目的」 最近工場に於ける諸作業は高度に機械化され、さらに種々の管理方式も科学化されてくるにつれて、その運営について第一線監督者に対して技術的監督的業務を遂行しうるだけの能力が要求されるようになった。

また監督者以外の従業員についても技能修得者が現場に配置されるようになり、これらの人達の知識水準もかなり高度になつてきている。

また一般の事務作業に於ても大部分の職場では複雑化する社会機構に即応して、かなり高度の知的能力が要求されるようになってきている。

このほか、いろいろな職場に於て、かなり高度の知的推理力、判断力を要求する職場が多くなつてきている。従来行われていた成人用の知能検査は成人一般を対象として標準化されているため、このようないくらか高度の知的作業に従事する人達の選抜や配置には、問題の困難度が低すぎるように思われる。また従来の知能検査は外国の知能検査の改訂であり、社会機構が高度に分化した社会ではその適用がさほど不適當ではないとしても我国のように社会機構が近代化にともなつて分化したとはいえ、その分化は不充分であり、それぞれの職務に於て判断や推理洞察といったものを要求されることが多い。このような我国の社会機構の特殊性から要求される知能的な面の測定もかなり高度のものである事が予想され、従来の知能検査ではその応用という面で不充分ではないかと考えられる。

かねて成人用知能検査の作成を目標にしていたが、このような職種に対す検査が行われることになつたので、構想を具体化して実際に使用してみた。

「検査の構成」

1, 一般知識検査 五肢択一式 50題、時間 1時間30分

内容(イ)社会常識。(ロ)自然科学に関する常識。(ハ)人文科学に関する常識。

2, 一般知能検査 五肢択一式 80題、時間 1時間

内容(イ)数的処理。(ロ)数的推理。(ハ)資料解釈(表)。(ニ)資料解釈(図)。(ホ)図形組合。(ヘ)展開図(回転)。(ト)言語判断。(チ)論理的思考。(リ)文章理解。

いずれも高校程度であり、従来検査が単純な機械的な知的はたらきをみようとすものに対し、知的推理力、判断の機敏性をスピードとパワーの両側面からみようとす問題から構成されている。

## 13. 紡績工の適性に関する研究

愛知学芸大学 堀 内 安 男

昭和29年3月、中学校を卒業して某工場に入社した紡績工、131名につき、就職試験に施行した内田クレベリン検査並びに入社2ヶ月後、施行した日本職業指導協会の標準職業適性検査の成績と、評定尺度を使用し、それぞれの現場の責任者により評定した、入社0.5年後(I)1年後(II)1.5年後(III)の勤務成績との相関を調査した。

I 内田クレベリン検査

それぞれ、片番を無作為に抽出した、精紡18名、粗紡10名、ヘンドル10名、合糸11名につき、総合勤務成績の順位と作業曲線の定型(C'以上)と非定型(C'f以下)の二類型との相関係数を順位双連相関法により算出した。その結果、各回とも定型はよい成績の方向に現われ、特に、精紡はI-0.962, II-0.565, III-0.968を示し、いずれも5%水準で有意である。4職務ともIの相関が最も高い。

勤務成績中、努力度についても、同様の傾向が見られるが、その相関の強度は前者よりやや低く、5%水準で

有意であるのは精紡のⅢの評定のみである。

総合勤務成績の中央値より上位の成績群と下位の成績群につき、それぞれの示す作業曲線につき比較すると、

- 1, 後期増減率……3回とも両者の間に有意の差は認められない。
- 2, 初頭増減率(後期の第1分目作業量と6~10分の平均作業量との比)……3回とも上位群の方が高い傾向を示し、いずれも5%水準で有意の差が認められる。
- 3, 作業量……前、後期ともⅠは上位群の作業量が多い傾向にあるが、Ⅱ、Ⅲに至るほど、その差が少くなりとくに前期の差は少なくなっている。
- 4, 誤謬率……Ⅰは下位群に多いが、Ⅱ~Ⅲはその差が少い。
- 5, 曲線傾向……それぞれの群の平均作業曲線により、曲線傾向を見ると、前期曲線の差は少いが、後期曲線はいずれの回も下位群は中高傾向を示し、はつきり両者間の差異を示している。

勤務成績中の努力度及び寮生活の協調度についても、上位群は定型的傾向を多く示している。

#### Ⅱ 一般職業適性検査

各職務につき、適性点と勤務成績中、技能度の成績順位を列位差法により、相関係数を算出すると各適性ともほとんど低い相関が見られ、そのうち、目と手、手先、指先、運動、一般知能、書記、言語的適性の相関が高い。いずれもⅠは他の回にくらべて高い。また精紡の書記的適性が高い(Ⅰ-0.537, Ⅱ-0.407, Ⅲ-0.402)。異状の発見のために必要と考えられる。

以上、両検査とも、紡績工の適性検出に有効であり、とくに熟達に至るまでの適性検出に有効に利用し得るものと考えられる。

## 14. 個人における職業希望の発達に関する研究(1)

### — 学 年 的 推 移 —

神戸大学 増田 幸一

青少年に於ける職業希望の発達を究明するため、中学校第1学年から第3学年へと進む間に、個人に於ける進路の希望がどのように推移するかを調査した。その職業希望の変動には、推移の態様に従い、AAA, AAB, ABA, ……というような型15種が考えられる。これを職業希望類型(vocational aspiration pattern)と名づける。

調査を作製した兵庫県下の中学校のうち、12校の報告が考究の基礎資料となつた。その回答者総数は699名である。結果を考察したところ次のような諸点が注目された。

(1) 第1型(AAA)すなわち3年間職業希望の変らない者は、全員中45.1%を占めるが、この結果は日米の他の同様な研究報告の中に見られるものに比し、かなり高率である。しかし、それは決して職業希望の恒常性(consistency)を示すものではなく、この結果からは、かえつて職業希望の変動性(variability)は大きいと見る方がいと考える。

(2) それ以外の型の中では、第2型(AAB)と第4型(ABB)の存在が注目される。それらは第1型に比すれば、比率はずつと小さいが、職業希望の発達過程の一面を語るものである。

(3) その他では、第6型(???)の比率はきわめて低いが、3年間を通じてついに何らの職業希望も持たない者のあることは問題とすべきである。

(4) 上記の諸類型に関しては、そのような型の生ずる諸種の要因が推測される。たとえば、

- i, 個人の興味や欲求の強弱。
- ii, 職業や学校に関する知識の広狭。
- iii, 就職や進学に対する態度の確否。
- iv, 将来の進路についての関心の度合。
- v, 家庭環境に於ける変化の有無。
- vi, 社会や雇用の状況に関する見通し。
- vii, 教師や父兄の指導助言のあり方。

などである。



## 15. ろう児の職業指導に関する研究

### — 職業興味調査 —

新潟大学 畔上 久 雄

1, 被調査者と方法 本調査は新潟県ろう教育総合研究会、職業指導班として行つたものである。新潟県下にある二つのろう学校に在学している、ろう児のうち、中学部男46, 女46, 高等部男18, 女19, 計129名に施した職業興味調査の結果である。中学部2年までが義務制であり、大部分のものが寮生活をしている。使用したテストは日本職業指導協会案の「職業興味調査表」で、昭和31年3月に実施したものである。聴者に施す場合とちがつてその実施には苦心がある。(1) 字句を修正し、條句を簡素化する。(2) 読話法で繰返していねいに説明を加え、文字や絵を板書にして補う。(3) 中には実物を見せたり、手まねをしたりもする。時間は制限なしのテストであるが、大体、中学部は4~5時間、高等部は3~4時間かゝつた。

2, 概観 全調査者数129名の頻数平均は14.1で、これを、私が26年に施した中学3年男女100名の平均14.3に比べるとほぼ同じ。また職業指導協会発表(26年9月「職業指導」)の数値に比べると、協会高男、中男ともに12に対し、ろう児はそれぞれ15, 16であり、高女、中女それぞれ14, 13に対し、ろう児は何れも12である。かいつてろう児の男は大きく、高女だけが小さい。また、協会発表の成人平均は13となつている。聴力を欠き経験が狭められているにもかかわらず、このような結果を示したのは、(1) 寮生活をしているうちに、ろう者仲間が独特の意志疎通をし、適当に知識の交換をする。(2) 必ずしも興味の量は経験の量に比例しない。(3) 必ずしも未経験のものに興味が少ないともいわれない。などが考えられる。

3, 学年差 現われた結果は中三最高、高一急下、高二上昇、高三低下となつていて、直線的の上昇や低下を示さない。学年による差異はあるが発達のでない。

4, 中学、高等部差 I事務、II機械、IV体力、V農業、VII奉仕、IX家事の六項目間には数字的に中学高等部差があるが、検定の結果、事務と農業だけに有意差がある。

5, 男女差 数字的には、III芸術、IX家事だけが女子大で他は男子大となつている。9項目計では男15.7に対して、女12.4であるが、検定して見ると、中学部では事務、自由、奉仕。高等部では事務、芸術、科学、奉仕のほか有意の差が明らかにされた。

6, 個人差 S.D. によると男子中学部に於ては、4.30~7.34 (6.16)。高等部では1.78~7.64 (5.59)。同様に女子の平均、中学部は5.80, 高等部5.79で、協会発表の中学、高校の7.80に比べれば可なり小さい。個人差はあまりない。ろう児の特性として自己内にとじこもると思われるが事実はむしろ一般化されて個人差が少ないようである。寮舎に於ける共同生活にもよろう。

7, 項目差 ろう児の各項目に対する反応度は男はむしろ聴者に比して一般に頻数は大きい項目差そのものは少ない。女も同様項目差そのものは聴者に比して大きくない。職群による差異は少ないのは未分化ともいえる。

## 10. 司 法

### 1. 非行少年にみられるパーソナリティの一側面

#### — その実態調査より —

長野少年鑑別所 ○ 根 本 元 茂  
河 野 昭

目的 非行少年と一般少年兩群の欲求、愛情、偉大性、社会観、独立心、自己内省、趣味、読書傾向について検討し、非行少年パーソナリティの特異性を抽出することを目的とす。

方法と手続 被験者(高校生811名、非行少年317名)に就て質問紙法により、各項目について解答を求める。以上について非行少年一般少年群別に解答を集計し、この2x2n 分割表について  $X^2$  検定を行い有意差を検討する。

( $X^2 = \frac{N^2}{AtBt} \left[ \sum \frac{Bi^2}{Ai + Bi} - \frac{Bt^2}{At + Bt} \right]$  を用う。)

結果と結語 欲求については、非行少年群は自己顕示、享乐的というような現実感覚が特に強く自己を知的に向上させようとする面が極めて乏しいのに対して、一般少年は反対の傾向を示す。愛情に就ては、前者程の差はなく

非行少年一般少年とも保護者を中心にして高まつている事が分る。つまり家庭に於ける所属感情、安定感が保護者との関係に於て支えられており、このことは青年期心理の特徴ともみられ、性格形成のプロセスでもあり。偉大性についてみると、非行少年では保護者に集中されているが、これは彼等の身辺の人々に対する現実認識の未分化を物語っている。これに反して一般少年はその生活空間が時間的、社会的に分化し拡大しており、その根底に自我の強い発達が見られ彼等の自我理想主義の片鱗がうかがえ、この点兩群の自我の形成過程を比較した場合、大きな差を認める。独立心についてみると、非行少年は実業従事者が過半数を占め生活目標が低いのに比し、一般少年は多種多様な分野に分れ、特に科学者のごとき目標を高度なものにおいているのが特徴である。社会観に就ては、一般少年が児童期の主観的立場から大きく反動し、矛盾対立の非合理性を働いて懐疑的立場になる為、退行的、反抗的反應が多いのに比し、非行少年群は全く逆の関係に立っていることがみられる。つまり一般少年が高次の観念に立つて原理的にみようとすることに反し、非行少年は多面的な思考感情を有せず、一元的な態度がその決定要素と思われ、兩群の自我と社会環境に対する意識差を物語っている。自己内省についてみると、非行少年群は自己の犯した罪のみを問題としているのに比し、一般少年は自我像についてより哲学的な考察をこゝろみており、内面的世界が拡大されて屢々自己嫌悪にまで近い内省となつて表れている。これは自己に就ての観念的価値体系が形成され、統一化されつゝある結果と考える。以上各項目とも  $X^2$  - 検定の結果、危険率 1%以下で一般少年群と非行少年群との間に有異な差が明らかに認められた訳であるが、これによつて非行少年群の人格構造の特異性の一面がうかがわれる。つまり、非行少年には彼等なりの心理的世界がある訳である。このような特異性を内包するパーソナリティは、現実社会への適応障害となり、種々の問題行為を生む結果ともなる。非行少年が一般少年と比較しての差異を考察すると、単なる生活環境の違いばかりでなく、①内的構造が未分化であること。②現実場面に於て多面的、合理的機制がなされないこと。③主観的、非合理的、被影響的の傾向が強いこと。④知的発達と社会的成熟度のアンバランスが大であること。⑤非行少年の環境は一般少年のそれよりも誘引性が複雑であり、且つ大であること。⑥可塑性、向上性を考えた場合、非行少年の環境の場はマイナスの因子が多く、彼等自身これに適応しプラスにしようとする可塑性がないことである。

## 2. 非行少年の更生について

東京家庭裁判所 山本晴雄

昭和25年に東京家庭裁判所で取扱つた非行少年についてその後3年間の累犯を調べると、累犯しないものが66.2%に達している。

非行少年の更生の原因を研究するには、結局は一一の少年について親しく調査するの外はないが、私はこれに至るまでの予備調査の意味で、男女少年院收容中の院生(男女各々500余名)に対し「友人で非行から更生したものがあるか、更生の原因は何であるか」を回答させた。

その結果によると、男子の46%、女子の43%は更生した友人をもつている。それら友人が非行化したのは平均15才であり、更生したのは男子院生の男友達、女子院生の女友達は平均18才、女子院生の男友達のそれは20才である。彼等の80%は警察で調べられ、40%は少年鑑別所に收容され、32%は少年院等の施設に收容されている。

ところで彼等の更生の原因は、男子の場合に最も多いのは就職であり、次いで、少年院、親の愛情、結婚、警察、本人の自覚、保護司、親の死、友達の忠告、鑑別所、恋愛、雇主の愛情、悪友と別れたなどの順になつている。次に女子の更生原因は、最も多いのは結婚であり、次いで親の愛情、警察、少年院、恋愛、友人の説得、保護司、悪友が去つた、自覚などの順になつている。

以上は院生の記述をそのまま整理したものであり、彼等の多くは自己流の解釈や願望的解釈に陥りやすいから批判の余地が少くない。例えば男子の更生原因の第一に就職が挙げられているが、非行少年の特徴は職がないことではなく、少し気に入らないことがあるとすぐに仕事を投出すことであり、従つて就職による更生とは実は仕事におちつくようになった心構えの更生であろう。しかしながらそれにして非行少年の更生には職業指導が重要であり、鑑別所や少年院、保護観察所での鑑別や指導にはこのことが重視されるべきことが示される。また少女の更生には、結婚が首位をしめていることも注目すべきであり、非行少女の多くはまともな結婚ができないという絶望感や自棄をもつているが、このコンプレックスの解釈への指導が重要な指導目標をなすことを示される。親の愛情では父よりも母の愛情が多く述べられていること、警察、鑑別所、少年院への親の訪問や許されて帰る時の家庭の迎え方が更生に役立つことも重視せらるべきである。友人の忠告が相当に更生に貢献していることも親より友達への十代の心理から軽視できない指導目標の一つであろう。その外、親の死、近所の温い迎

え方、男の場合にも結婚が更生に役立つている考えさせられる所である。最後に警察や少年院が更生の有力な原因をなしているが、これは一つにはそれぞれの当局の指導が効果を奏したとも見られるが、また少年に「非行をすればやはり馬鹿らしい目にあう」ことを考えさせるようになって自覚の基をなしたことも認めらるべきであろう。

### 3. GSR によるうそ発見検査の研究 (その1)

警察庁科学捜査研究所 ○今 村 義 正  
山 下 素 邦  
荒 木 巖 巖

目的 うそ発見検査に関して、実験室においては、種々実験されて来ているが、実際の犯罪事件に対しては、未だ十分の検討がなされておらなかつた。そこで、こゝでは、実際に被疑者に対して行つたうそ発見検査の結果を基に、黒と判定されたものゝ結果と白と判定されたものゝ結果を比較検討すると共に、検査に際して一定の質問を反覆する場合、結果が、どのように変化して行くかを見、実際の検査に当つて、真偽の判定をより正確にするための基準を確定しようとした。

手続 使用した資料は、昭和28年より同30年までに検査したものゝうち、物的証拠の裏付け、裁判の判決などで、明確に白又は黒が確定したもの29名(このうち黒と決定したもの20名、白と決定したもの9名)の結果である。測定器(うそ発見器)は横河電機製作所製の精神検流計(Psycho-galvanometer)を使用し、電流計の針のふれを肉眼で観察する方法である。質問要領は、早大戸川教授の工案になる対照法、即ち事件に関係ある質問(X質問)と対照質問(K質問)とを交互に組合せて質問し、X質問に対する反射量とK質問に対する反射量の比 $r$ (真偽指数  $r = \frac{X}{K}$ )を求め、この $r$ の変化を見る方法をとつた。

結果 黒及び白と決定されたものについて、 $r$ の平均を求めると、黒の場合、検査の第一回目、第二回目、第三回目及び三回の平均はそれぞれ2.4, 2.6, 3.1及び2.7となつた。白の場合、それぞれ0.97, 0.95, 0.69及び0.87となつた。又被疑者の個々の結果をみると黒の場合、 $r$ の平均の最も大きいもの6.5, 最も小さいもの1.5, 白の場合、最大は1.03, 最小は0.67であつた。また、検査を反覆する毎に、各回数別に $r$ の平均値の差の検定及び相関を求めたが、黒の場合の第二回目と三回目に差が見られたのみで、他には特に注目すべき点はなかつた。しかし、被疑者の個々の $r$ の変化を見ると、黒の場合、検査を反覆するに従つて $r$ が大きくなる傾向のもの7名、やゝこの傾向をもつているもの6名で、半数以上が大きくなる傾向をもつている。また、白の場合、 $r$ が減少の傾向にあるもの4名、やゝ減少傾向がみられるもの3例で、大半が減少の傾向をもつている。

考察 以上の結果から、実験室における真偽判定の基準として $r$ が1.5ないし1.6以上は黒、1.1以下は真という報告があるが、実際事件においては2.0以上ならば黒、1.0以下ならば白と判定してよいと思われる。また検査を反覆するために $r$ が大きくなる傾向の場合は黒に、逆の場合は白に近いと、推定し、さらに尋問を進める手がかりが得られるのではないかと思われる。

### 4. Polygraph による実験的うそ発見の研究 (その1)

警察庁科学捜査研究所 今 村 義 正  
○山 下 素 邦  
荒 木 巖 巖

目的 Polygraph によるうそ発見研究として、今回はまず Critical Question (以下 Crit. Q とする)に於ける血圧脈搏、呼吸の反応の型の分類とその表出頻変をみた。

実験方法 測定器は Keeler-Polygraph, 被験者は女子高校生21名であつた。

手続 テストの方法は Peak of Tension Test 方式で、この種の実験テストとして出来得るだけ強い情緒の表出を考慮し、Simulate-Theft Test を採用した。まず高価な劇毒薬品の窃盗事件を仮定し、被験者は隣室の五ツの机の抽出の、いずれか一つを開けて薬品の有無をたしかめ、有つたならそれをポケットに入れて盗んでくるように、その場合隣室に常時いる検査協力者の指示通りにするよう、検査に当つては盗まれた薬品に関する質問には、答はすべて「いいえ」とするようとの instruction をあたえた。実験検査に使用した劇薬品は一品で隣室の検査協力者：被験者毎に常に薬品を入れる抽出を移動するが、必ず被験者に薬品の入つた抽出を選ばせるようにした。

質問は全部で8問で4, 5, 6, 7, 8, 問に劇毒薬品名を列挙し、Crit. Q は常にその中央6問目におき検査は三回繰返して行つた。

結果 Crit. Q における呼吸の型の分類と表出頻度は次のようになつた。

分類は(抑圧呼吸) i, Crit. Q 直後抑圧小呼吸直前大きな数呼吸、ii, Crit. Q 直前抑圧小呼吸、iii, Crit. Q 前不規則小呼吸、直後より規則呼吸、iv, Crit. Q 直後抑圧小呼吸(呼吸停止)、i, Crit. Q 直前呼吸停止後正常呼吸、ii, Crit. Q 前は正常呼吸直後呼吸停止、(呼吸基線変化) i, Crit. Q 直前呼吸基線の変化、ii, Crit. Q 直後呼吸基線の変化、となつた。検査回 I, II, III に表出された各型の総計の頻度を%で見ると、(抑圧呼吸) i, ……35.4%、(呼吸基線変化) ii, ……22.6%、(抑圧呼吸) ii, ……16.4%、以下略となつた。

Crit. Q における血圧脈搏の型の分類と表出頻度は次のようになつた。

分類は(血圧の変化) i, Crit. Q が血圧曲線の最高点、ii, Crit. Q 直前血圧曲線の上昇、iii, Crit. Q 後の血圧曲線の下降、(脈搏の変化) i, Crit. Q 後脈搏数の減少、ii, Crit. Q 直後脈搏振幅小変続いて大變、iii, Crit. Q 直前脈搏振幅小変 Crit. Q 上大變、iv, Crit. Q が脈搏の最小振幅個所、v, Crit. Q 後脈搏数の増加、となつた。検査回 I, II, III に表出された各型の総計の頻度を%で見ると、(血圧の変化) iii, … 40.8%、i, … 16.3%、ii, … 10.2%、(脈搏の変化) ii, … 10.2%、以下略となつた。

Crit. Q における I, II, III 各検査回の呼吸、血圧脈搏各反応頻度をみると、各反応型ともII回が頻度が高いことがうかがわれた。

なお今回の呼吸、血圧、脈搏の型の分類にあつては、Inbou, Trovillo, Keeler Polygraph-Handbook の各分類を参考にしたが、これらの分類の内今回のテストに表われなかつた型は、呼吸では(Crit. Q 前が規則呼吸で直後よりテスト終了まで不規則呼吸)、血圧では(Crit. Q 後テスト終了まで血圧の漸上昇)であつた。

## 11. 臨床・異常

### 1. ゾンダイ・テストによる事例分析

三河病院 ○山田悠紀男  
高倉兼藏

分析方法：プロトコール(10回施行したテストの集計)から。

①症状反応百分率  $\frac{[\sum 0 + \sum \pm] \times 100}{80}$ 、傾向緊張商  $\frac{\sum 0}{\sum \pm}$ 、緊張量  $\sum !$  を求める。症状反応百分率より病状の軽重の程度(疾病の場合)を、傾向緊張商より症状の外面状態と内面状態との関係比を、緊張量より衝動性と情動性の強さをそれぞれ略知できる。

②次にファクター分析を行う。八つの欲求(h, s, e, hy, k, p, d, m)の各々について10回のプロフィールを四つの反応様式(+、±、0)に従つて整理(例えばh+×7回、h0×3回)し、表からその意味を読みとる。

③ベクター分析に移り、四つの衝動(S, P, Sch, C)ごとにそれらを構成する二つの欲求の反応様式の組合せをファクター分析の場合と同様に処理(例えばCd-m+×5, Cdom±×5)し、同じく表により解説する。

④更に症候群分析に進む。症候群とは特定の選択反応様式の布置を言う。これらの布置を全プロフィールに拾う(例えば《自殺》症候群はk-P±d-m-の布置である)。

⑤最後に傾向緊張度  $\sum 0 + \sum \pm$ 、潜在値(各衝動を構成する二つの欲求間の傾向緊張度の差、例えば  $h(\sum 0 + \sum \pm 2) - S(\sum 0 + \sum \pm 5) = S3$ )を計算し、それらから衝動構造式と潜在比(各衝動間の潜在値の比)を求め、衝動分類によつて個体の定位と診断とを分類表から略知する。

以上の結果を総合し総括説明を行い分析を終る。

本会では上述の方法による事例分析の実際例をそれらの臨床所見と対比して報告し、主題について二三の考察を試みた。

### 2. ロールシャツハ・テストに於ける反応時間について

金澤大学 田中富士夫

ロールシャツハ・テストに於ける初発反応時間をカードの難易度という観点から検討したい。

男子非行少年100名に施行したロールシャッへの反応時間をカード毎にまとめると、最短時間のカードはV、次いでI、VIII、III、IV、VI及びX、IX、II及びVIIの順位（但し中央値）をとることが知られた。

概して云えば色彩カードが無彩色カードより長い時間を要し Broken Blots の方が Unbroken Blots よりも長いことが見出された。

次に、反応時間の長短とそのカードに現われた第一反応との関係を調べると、Mediocre 反応の多くみられるカード、形態水準の良い反応が多いカード、動物反応の多いカード及び通俗反応の多いカード即ち特定の概念に集中し易いカードでは反応時間が短くなる傾向が認められる。又カードの回転の多く現われるカードは反応時間が長い傾向にあつた。しかし反応時間は、そのカードで産出される反応の数とは殆んど無相関係であり、V、Iでは反応数は少いが時間は短いという結果を得た。

同一人に3ヶ月から6ヶ月の間隔をおいてから再びロールシャッへを繰返すと、明らかに再テストで反応時間が短縮されるが、10枚のカード内の順位は略そのまま維持されていることが知られる。

以上の結果から反応時間に関するカードの難易度とは、単純な良好形態が現われ易いかどうかという点であり、刺戟区形が多義性即ち反応にパライアティがあるかどうかという点に関係したものであらうと推定される。

### 3. Rorschach Test に関する研究（第27報）

#### — Harrower Inkblot Test の研究（2） —

金澤少年鑑別所 ○ 酒 川 靖 一 郎  
佐 竹 隆 三

ロールシャッへ・テストの平行系列であるハローワー・インクプロット・テストの平行関係を検証するため、両テストの比較検討を試みた。二つの類似したインクプロット・テストのパラレリズムを検証するためには主として三つの条件を考察しなければならない。即ち①各カード毎の知覚構造が対応関係を持ち同一反応カテゴリーが得られること、②又全カード即ちシリーズ全体としてのみ同一反応カテゴリーの出現頻度が一致すること、③単に解釈及びその診断に於いて一致すること、である。ハローワー・インクプロット・テストは主として、シリーズ全体に於ける反応出現率の類似を企図して構成されたものであると考えられるが、第19回応用心理学会に於いてはこの点を検証しほゞ両テスト間の有意な類似関係を認めることが出来た。

そこで今回は更に③の点に於いてもまた両テストは一致した結果を得られるかを検証しようとした。その一つの方法として、H, H, Davidson による適応、不適応者を選別するためのチェック・リスト、17項目を以つて、即ち反応カテゴリーの幾つかの組み合わせによる適応、不適応の評定単位を以つて両テスト・プロトコルをチェックし、兩者の一致度を検出したのである。

被検対象は非行少年50名の男子（平均年齢18才、平均知能 IQ=96.25）について、両テストを同一人に約2日間の介在時間（Mdn）をおいて施行した。その半数25名は、ロールシャッへ・テストを先行し他の半数はハローワーを先行して、経験効果の相殺を考慮し、両テストのスコアリング・システムは Klopfer 及び Harrower, Steiner の方式に従った。

結果は、特定のチェック項目に於いて夫々チェック数は相違したけれども、個々人のチェック合計数に於いては変化は殆んど認められず、ほゞ一致した結果を得た。

即ちロールシャッへ・プロトコルについては不適応チェック数合計の平均が9.92、標準偏差2.13を得、ハローワーインクプロット・テスト・プロトコルについては平均8.55、標準偏差1.96を得た。従つて兩者間の差異には少くとも5%水準以上の有意差は認められず、少くとも Davidson のチェック・リストによる評定は両テストのいづれにもほゞ同じ基準を以つてスクリーニングすることができることが明かとなつた。又このことから、個々の反応カテゴリーの組合せからなる17項目の夫々の持つ解釈仮設についても高度の一致度を示すものであることが予想できる。勿論これだけの一致度を以つて、全体的、総合的な診断の一致をこゝに結論することは早計であるが、今後の鑑別診断上平行系列の有用性に幾分か示唆を得ることが出来た。

### 4. ロールシャッへ TAT の臨床的研究

#### — M と TAT Variables との関係 —

早稲田大学 ○ 滝 澤 清 人  
慈雲堂病院 滝 澤 清 子

本研究は、Rorschach Technique の結果のなかから、M反応が出現した群、しない群を設定し、M反応のある群とない群との間に TAT 反応が、いかなる相違を持つかを検討しようとした。

あらかじめ、Rorschach が施行してあつたものゝなかから、M反応のあるもの10名、ないもの10名を、Rorschach における反応総数、 $\frac{F}{R}\%$ 等によつて兩群を対応させてえらび、それらの被験者群に TAT を施行し、Rorschach Technique は更にリテストした最近の結果によつて、もう一度、M反応のある群、ない群にわけ、兩群における TAT 反応のあらわれ方を観察した。尙本研究は、精神分裂病患者を対象としたため、患者群におけるM反応であるという限界をもつている。

#### 結果

① 一般にM反応のある群は、ない群にくらべて、TAT においては、反応量も Word count も多いが、M反応のない群では、拒否、刺戟即応的な描写が多くなつている。

刺戟呈示から反応開始までの時間、R、T の平均も、19秒と23秒で、M反応のある群は比較的早く反応を開始している。

② カイ自乗検定により、兩群の差異を求めた結果、Need, Affiliation が5% level で有意で、M反応のある群の方が多きことがあきらかにされた。欲求、圧力が結びついた反応、(N-P) も同様に、5% level で有意で、M反応のある群に多きことが判明した。

③ Need Aggression Press, Frustration, 空想物語は、M反応のある群には強くあらわれたが、ない群では弱く出現している。しかしM反応のない群は、疾患、不幸の圧力が、目立つている。

Inner State は、M反応のある群、ない群とも、同じ程度にみられたが、M反応のある群の不快感は、行動に随伴的な感情群であるのに反し、ない群の不快感は、全く理由なしに深い層から出現したと思われるような不安感情群が認められた。

④ 形式特徴面では、M反応のある群は、ない群にくらべて、細部注意反応、歪曲反応、投影量の多い反応が多いが、M反応のない群では、拒否、推量、Moralization, 刺戟即応的反應が支配的であつた。

今后、本研究と同様の手續によつて、ロールシャツへにおける各 Index の群別をつくり、その際の TAT 反応の相違を観察し、兩テクニックの関連性を明確化しようとする。

### 5. フィンガーペインティング 指筆法の実施についての研究 (第1報)

#### — 診断規準作製への試み —

横浜市立大学 外 林 大 作  
日本社会事業短期大学 ○ 石 井 哲 夫

〔目的〕 指筆法において、診断規準を設ける試みは、すでにナポリによつてなされている。しかし、象徴的な意味が多いために実施上困難な点が多い。とくに幼児期における診断には、有効であると言われているが、実施上の手ごかりは皆無である。石井は1955年に、外林著改訂性格の診断において、幼児に対する実施上の基礎的研究を発表したが、本研究において、更に「行動観察上の規準」について検討した。

〔方法〕 幼稚園児60名、児童相談室への来室児30名(幼児のみ)に指筆法を実施して、行動を記録した。その記録の中から、行動の型を取り上げて分類した。分類法は、外林、石井の協議によつた。なお分類によつて出来上つた各規準を、行動領域毎にまとめ、その関連を見出した。

〔結果〕 幼児に対して指筆法を実施する場合、その行動領域毎の観察規準及び、その内容は次の通りである。

1, 緊縮性(課題に対して、自由に活潑な動きかけが行われぬ、場面緊張によつて動揺する動揺型と、一般画法に固執し、単純な反復行動が現われる固定型とがある。)

A 領域(紙、絵のぐなど材料に対する行動)

①絵のぐを嫌うなど……動揺型。②絵のぐ、水の追加をしないなど……固定型。

B 領域(描画行動)

①一般画法に固執するなど……固定型。動揺型はない。

C 領域(課題以外の行動)

①検査者を気にするなど……動揺型、固定型はない。

2, 衝動性(課題及び場面に対して、統制出来ず、自分勝手の行動としての自愛型と、激しい攻撃的な行動と

しての攻撃型とがある。)

A 領域 ①絵のぐを手でこねまわす、など……自愛型、②絵のぐ、さらを投げる……攻撃型

B 領域 ①つめで強くかくなど……攻撃型。

C 領域 ①検査者に絵のぐをつけるなど……攻撃型。共に、自愛型はない。

3, 自由性(緊縮性、衝動性に対して、行動が拡大し、安定して、自由に課題場面に入っていると思われる行動で、拡大型と安定型とがあり、質的な変化とみられる変化型もある。)

A 領域 ①絵のぐ、水の追加など……拡大型。②汚れを気になくなるなど……安定型。変化型はない。

B 領域 ①使用する手、指の拡大など……拡大型。②衝動的ストロークがなくなるなど……安定型。③塗のストロークの使用……変化型。

C 領域 ①検査者に気を使わなくなるなど……安定型。拡大、変化型はない。

4, 統制性(自由に課題行動を発展させてゆきながら、自発的に秩序を作つてゆく行動である。)

B 領域 ①絵のぐ、水の調和を計るなど。

## 6. 文章完成法テストの型式と特性

### —刺戟文の長短による特性の相違について—

精神医学研究所 ○佐野勝男  
横田 仁

〔問題〕 今迄我々がとりあげてきた SCT の研究は、臨床診断に於て最初に行うフィルターとしての役割を担うものであり、そのテスト型式は広く浅く知りうる短文型式(時々私は…等)のものである。(SCTsとよぶ) SCTs により問題の存在点を大まかに掘んだ後、パーソナリティ構造の情意的側面、ダイナミック等について更に知見を得たい。そこで我々は Kretschmer の気質に関する類型論(分裂質、S、循環質、Z、癲癇質、E、神経質、N、ヒステリー、H、)の概念を借りてきてこれを INV. 型式に直し、気質的側面を掘るべく試みて来たので、この基盤の上に立つて INV. 型式の他に、SCT の刺戟文を長くして場面の規定をもつと狭くすれば、INV. と同じく気質、特性を掘る一つのテスト型式をなすかもしれないと考え、刺戟文を長くしてこれを掘まえようと試みた。(これを SCT<sub>L</sub>とよぶ。)

〔刺戟文の構成〕 INV. を SCT<sub>L</sub>に直してゆくとき、i) INV. の場面の限定の仕方から SCT<sub>L</sub>に直すのが困難なものがある。強いてやろうとすれば SCTs へ行つてしまう。ii) SCT<sub>L</sub>は刺戟文で場面は限定しても、自由に反応する余地が残されている。それ故、Z の問題の中、丁度それを反対にすれば S の問題になるようなものがある。これらは両方併せて一つの SCT<sub>L</sub>で間に合うようになる。故に S、Z の問題数は少なくすむ。

INV. の項目が60であるのに対し、45ですむことになった。(S<sub>3</sub>, Z<sub>4</sub>, E<sub>3</sub>, N<sub>12</sub>, H<sub>11</sub>)例、1、季節の移り変りの時等……、2、人の心配事や悩み等については……、3、買物等をする時は……、等々。被験者は某大学経済学部一年120名である。

〔結果〕 1, SCT<sub>L</sub>はその構成上より、反応にある幅がある。それに対して INV. は一つの特性を狙いうる指向性が強い。故にその違いは INV. が point を狙うのに対し、SCT<sub>L</sub>は zone を狙う違いがある。評価者の判断よりみれば INV. は機械的にゆけるのに対し、SCT<sub>L</sub>の方が自由度をもち、主観が入ることになる。

2, SCT<sub>L</sub>は S、Z、E、N、H の諸類型を掘りうると思われる。しかし S、Z 等のもつ各特性群に迄ゆくのは、この刺戟文では少しく困難の如く思われる。

3, SCT<sub>L</sub>はもつとはつきりした対象を狙う方がより効果的の如く思われる。(例、態度、パーソナリティの決定要因等)

4, SCT<sub>L</sub>は INV. よりは問題が少なくてすみ、しかも自発的表現をそこに見る事が出来るので、実際の臨床診断に於て個々の患者に用いるのには利点があると思われる。SCT<sub>L</sub>は INV. の一つの variation として使われると思われる。

## 7. CAT からみた親子関係の一考察

東京都中央児童相談所 金平輝子

〔目的〕 児童の問題行動の診断及び治療には、親子関係が大きな役割を果している。親子関係の診断は極めて重要であるが、まだ妥当な方法が発見されていない。私は CAT が、この診断の手がかりとして有効であると

考え、有効であるとすれば、どの様な基準を求めたらよいか、又現実の親子関係と CAT の story にあらわれた親子関係の間に一致点があるかどうかを明らかにする目的で本研究を行った。

「手続及び結果」 対象、児童相談所に於ける教育相談ケース30名、(男14、女16) 6才から10才まで。

期間 昭和30年6月より12月までの半年間。

1, 対象ケース各々について case history 及び interview の際を得られた資料から親の子供に対する愛情を測定し、十群と一群とした。

2, CAT 反応を父母登場の有無についてしらべ、登場させたものの中、登場させ方の特徴によつて、父母追加群、父母省略群、特異群とした。

3, 1及び2の関係を夫々にみると、父母を登場させたものが29名、欠除させたものが1名である。従つて大多数の子供が CAT に於て父母を登場させているのである。父母登場群の型と愛情の型との関係は、父母を追加する場合は、愛情+、一兩群にみられるが、愛情(-)群の場合は、父母省略及び特異ケース(「おや」反応ケース、父欠除ケース、母欠除ケース)がみられた。

4, 次に CAT の story にあらわれた親子関係と現実の親子間の愛情の型との関係をしらべた。

CAT に現われた親子関係は親子間に相互交渉のあるもの、一方からのみ交渉のあるもの、及び全く分離しているものと4つの型に分けられる。愛情(-)群は、(+ )群より稍交渉をもつ事が少く、分離する傾向がみられたが、例数が少いので今後更に研究してゆきたい。

「結論」 得られた材料が少なかつたため、多少の特異性もあるかと思われるが、私の場合、前記の様な愛情(+)(-)群の選定基準によると、次のことがいえる。

愛情(+ )群にみられる特徴は、

1, 親子間に交渉がもたれている story を作ることが多い。2, 特異群がない。3, 父母を省略する事が少ない。

愛情(-)群にみられる特徴は、

1, story に現われる親子関係が稍分離的である。2, 特異群が現われる。3, 父母を全く欠除させる事がある。

以上の點から、CAT に現われる親子関係と現実の親子関係の間には、何等かの関連がある事を知り、今後 CAT を親子関係の診断の手がかりとして役立たせるために、猶一層分析してみたいと思つている。

## 8. 小学校に於ける学業不振児の研究(第2報)

### 一再診断による症状発生の條件分析一

千葉県教育研究所 大野 桂

一昨年小学校5年生の学業不振児一知能が普通で学業成績が之に伴わぬもの一の予診を行い、之に基づいて行つた治療の結果を昨年の日本心理学大会で発表したが、其后更に7ヶ月を経て同一患児を再診断し、それによつて症状発生の一般的條件一いわゆる教科内條件に対する一を稍々明らかにしたので、4例中1例につき報告する。

1, 症状としての学業不振は治療前学力偏差値平均42, 治療后48で、約1段階に近く改善せられ、略々知能相応の所まで漕ぎつけた。

2, 之に対し、身体的、生理学的負因として予診時指摘されたメニエル氏病は加療の結果殆んど治癒し、主徴たる頭痛、嘔気及び眼球震盪は殆んど影をひそめた。よつて本條件は症状の発主に何らかの關係ありと考えられる。尙予診時発見された脳圧昂進(水圧で250mm)は治療に關し保護者の協力が得られなかつた為再診もできず、その意義は不明である。

3, 予診時精神的負因の主たるものとされた学習態度の劣悪は加療の結果正に1段階改善せられ、従つてこれまた症状発生の重要條件と考えられる。しかし、その偏差値は27から40に上昇した丈で、これで充分というわけでは無論ない。

4, 予診時殆んど其意義を認め得なかつた学習興味は加療后も亦全様に考えられる。

5, 予診時学習態度劣悪の基礎的、一般的條件と考えられた適応性の低劣は治療后相当に改善せられ、従つてその意義は十分認められる。

6, 性格徴標も亦治療后著しく改善せられ、従つて前項同様の意義を認められる。

7, 出席状況も亦治療后頗る向上し、従つてこれも症状の発生に關係はあろう。しかし、それは欠席そのものの影響ではなく、それにより生ずる学習不理解、学習嫌悪、對教師、友人等の人間關係の不調を通じてのもので



あることは欠席の理由を質した処、之を裏付けるものがあつたことにより明らかである。

8, 社会的成熟度の低劣は上記諸負因の基礎に横たわつていてと考えられたが、治療后再診を行えなかつたので、其意義は不明である。しかし、本人及保護者らに対する問診によれば、その意義は十分であると推定される。

9, 最後に児童以外に存する条件として、環境、殊に家庭環境の状況を自己診断性のテスト(田研家庭環境診断テスト)でみると、再診時の成績は頗るよい。しかし、予診時もありよかつたのでその差は余り大ではない。よつてこれも亦条件として或程度の意義はあるように思われる。尙このテストでは両親の養育態度、賦方法等が余りよくみられないので、稍不十分に感じられる。この点を改良して、これらを訊す下位検査があれば、本条件の意義ももつと明らかになると思われる。

## 9. 催眠暗示による夜尿癖の矯正(臨床1)

東京教育大学 大野清志

夜尿癖と云うものは本人にとつても、両親にとつても惱みの種であり、更にその存在することが二次的に性格的問題を誘起しさえする場合もある。発生の機縁は遠く幼児期の頃、或いは近く現在の何処かに求めることが出来ようが、原因とされる事態を断定するのは困難で、又通常の心理療法では解決迄に時間を要する場合も少なくない。排尿は、幼時に於て学習して得る一つの習慣であり、夜尿癖は此の習慣がうまく出来上らなかつたか、或いは一度は完成していた習慣が再び崩れてしまつたかしたものとする事も出来るであろう。従つて、単に習慣を獲得せしめる手筈を講じること、即ち排尿の欲求のある時には起床して用をたすことを学習させても夜尿が消失すると考えられる。時間を見計らつて起す方法には種々困難が伴う。そこでこの習慣獲得の訓練の手筈に催眠状態での一定の暗示を用い、果してこれのみで夜尿癖の消失が如何程みられるものかを調べてみた。

しかしながらこれは、過去に於て誤りを犯した催眠療法に如き直接暗示に頼るものではない。先づ手続は、催眠された児童に、"夜間用便に行きたくなると自然に目が覚める"旨を2~3度繰返し暗示した。此の手続を行つた者は6才~11才の男女10名で、器質疾患のないことを母親との面接で確めてある。この中6名は幼時より連続して夜尿がみられる。そして他の者もとりませ、これ迄の対策は殆んど放置か、或いは無計画に、たゞ気付いた時におこしてやる程度で、失敗の回数も殆んど毎晩1回を記している。自分から気がついておきることは殆んどなく、失敗しても其のまま朝迄起きない者が多い。催眠の回数は2回から9回にわたり、その間隔は4日から7日の範囲で行われ、1回目の催眠をした日から夜間他人がおこす事を控えさせた。その結果は、大部分の者に第1回目の催眠後に変化がみられ、中4名は必らず起きるようになり失敗は皆無になつた。著しく減少した者が4名あり、これは二回目以後徐々に皆無へ移行して行つた。此等の者の間には、催眠された日の夜に失敗する傾向が観察された。大体年令の少い者は直ちに消失に至らず、変化の状態は緩慢である。結局 1) 完全に消失した者3名、2) 快方に転じた者4名、3) 効果のない者1名という結果を得た。以上、此のような再訓練により習慣を獲得させる方法でもかなりの効果があると云える。従つて原因の明確でない夜尿癖に対して適當である。又原因が明確な場合でも、普通の心理療法と平行して同様手続をとり、夜尿癖をそれだけ切り離して早期に消失せしめることが望ましいと思われる。

## 10. 神経症における社会文化的因子(第1報)

慶應大学神経科 阿部正

神経症に対してフロイドは性本能を重視して性本能学説を立て、ホルネイ、フロム、サリバン達は社会文化的環境因子を重視して、社会文化学説を主張した。しかしこれらの学説はそれぞれ欧米の社会文化に於ける産物として理解すべきものと考えられる。日本に於ては、日本独特の社会文化的環境に於けるものとして再検討を必要とするものである。そこで先づ、フロイドが神経症の中心とした、性の抑圧と云う事が日本の社会文化的背景に於ては如何に現われているかを、神経症患者の實際に照して考察してみよとした。この為慶應病院において精神分析的治療を施した患者のうち、特に性の抑圧が症状とその形成に重要な役割をしていると考えられる症例16につき、抑圧に作用した社会文化的因子を検討したのである。但し研究の便宜上、性を狭く解釈し、抑圧を広い意味にとつた。

症例1, 20才、未婚♀、16才の時より原因不明の激烈な腹痛発作、朦朧状態を来し、手術を受けるも効なく、ヒステリーの診断のもとに、自由連想法による精神分析を施した所、5才の時隣家の男の子から、性的暴行を受

け、その時の腹痛を訴へた所、かたはらの墓石様の物に詫びさせられた。14才の頃、キリスト教の教師より性への強い抑圧的態度を植えつけられ、以来、幼時の事件に対し罪悪感を強く抱き無意識下に抑圧して、性的刺戟をうけるたびに、同様の状態となる事が判明した。この例では、墓石様の物に詫びさせられた事にまず抑圧の第一歩をつくられたとしても、14才の頃のキリスト教教師の感化が相当の影響を及ぼしたものと解せられた。

症例 2, 40歳、未婚♀、28才の時より横隔膜痙攣発作、手足の痙攣発作を頻発し、横隔膜神経切除迄行っても治癒せず、精神分析的療法により、13才の時、異母兄から性的暴行を受けたが、この時母親は、犬畜生のする不潔な事と激しく兄を叱責し、強く性への不潔感を刻まれ、無意識下に抑圧し、性的刺戟の度びに最初の精神外傷時の状態を症状として現す事が判明した。この例は、不潔感が抑圧の動因をなしている例と考えられる。

症例 3, 24歳、未婚♀、心臓神経症にて来院し、麻酔分析を施した所、縁談に際して、過去の性的関係が結婚によつて相手に知られる事を恐れ不安を来している事が明らかとなつた。これは処女性を尊ぶ文化が、結婚前の性生活に対して、抑圧的作用と共に不安を生ぜしめた例である。

以上16例において、性の抑圧には多かれ少かれ、社会文化的因子が働いている事が観察されたが、16例中、キリスト教思想からの罪悪感によるもの8、不潔観によるもの2、道徳観によるもの3、世評恐怖によるもの3。但しキリスト教によるものうち6例は分析者がキリスト信者であると云う個人的関係によるものである為、一般に於てはこの種の抑圧はもつと低率と考えられる。尚男女別に見ると、キリスト教思想によるものでは男3、女5、不潔感其他によるものは男0女8で、これは性に対して男に寛大で女に厳しい日本社会文化の特性と、キリスト教思想が社会文化の根底をなす欧米に於ける神経症のあり方を示唆するものと考えられる。

## 11. 自己防禦傾向の発達の消長について

群馬大学 内山喜久雄

フラストレーション場面における自己防禦反応を測定し、これによつて自我発達の側面に関する知見を得るのが本研究の目的である。

対象としてT市C小学校I年、男25、女23、全III年、男20、女20、全V年、男25、女23。M市N中学校I年、男27、女26、全III年、男29、女30、の計248名を選び、外林大作氏の御好意により全氏改訂P-Fテストを実施した。

その結果によると絵画による同テストのフラストレーション場面に対する自己防禦反応の出現率は小学校I年では23.8%、III年32.5%、V年24.7%、中学校I年54.3%、III年61.7%と年令と共に増加する傾向を示している。(ちなみに障害優位反応はそれぞれ52.8%、38.9%、46.2%、28.3%、22.5%と漸減傾向にあり、また、要求固執反応は23.4%、30.6%、29.2%、17.4%、15.6%と全般に反応数がすくなくなつている。)また、自己防禦傾向が中学1年において飛躍的に増加しているのが注目されるが、これは青年前期の自我発生を裏付けるものであろう。

なお、自己防禦傾向に関し、学級内のリーダーと非リーダーとの間に差異があるか、否かについて比較研究の結果、 $X^2$ 検定では小学校I年(リーダー24名、非リーダー24名)で $0.05 < P < 0.10$ 、III年(リーダー20名、非リーダー20名)で $0.1 < P < 0.2$ 、V年(リーダー24名、非リーダー24名)で $0.1 < P < 0.2$ となり、いずれも明瞭な有意差がみられなかつた。

特定の環境下で、また特定のパーソナリティについて自己防禦傾向がどのようにあらわれるかを明らかにするのが本研究の次の課題である。

## 12. 非行少年の Follow-Up (5)

東京都品川児童相談所 水島 恵一

1年以上の Follow-up が完成した200例の非行少年中、発展機制が主要な役割を果していると診断された発展型のものの予後生活を吟味し、更生又は再非行への要因を具体的に検討した。初期機制が重要な役割を果している不満型(前回発表)感染型(東京矯正管区研究会発表)に比べて、一般に発展型のものの予後は著しく悪い。

発展機制の主要要素としては、1)不良習性、2)それが極端化して意識的になつた不良目的性、3)感染機制の発展したものであるとして不良環境親和性(本人の親和性と環境側からの拘束との双方を含む)、4)不満、葛藤機制の発展したものであるとして悪循環(特に非行ゆえの家族からの罰、圧迫とそれに対する一層の不適応という悪循環が重要であり、大部分のものはこの悪循環のために不良環境にはけ口を求めて不良感染をも起している)、があげられる。これらの組合せによつて、発展型が更に細分類できる。

その細類型の各々についてみると、まず習性のみによる単純習性型、不良感染を伴わない悪循環による単純悪循環型のものは、更生例なく、再非行五例、何れも十分に了解できない動機により病的に再非行に陥っており、発長してもなをかつ仲間を持たない彼等の特性（性格異常）を表わしている。不良環境親和性によつて特色づけられ、葛藤反応を呈していない環境習性型も、更生例はなく、再非行12例、多くがもとの不良環境に相変らず安住して、そこから再非行を起している。悪循環と不良環境親和を共に起している不良生活の典型というべき環境性悪循環では、更生例4、不良例34、不良例の多くは相変らず強い家庭葛藤をもち、家出をし、或は家出をせずとも不良環境に慰みを求め、この生活から再非行に陥っている。更生例においては、親の態度が変つたり、愛情ある保護者を見出すなどの不満状態の解決及びもとの不良仲間と地理的に離れるという感染状態の解決が有効だつたようであるが、しかしこうした変化は再非行者の環境にもある程度はみられたので、やはり Glueck などのいうように、よい環境変化を受入れる Readiness が問題になる。これについてはなお検討を要するが、一例については、人格の自然的成長が力あつたことはたしかである。環境習性型と環境性悪循環型の中間の型である不良交友発達型では更生例3、不良例12、この更生例についても Readiness が問題となる。最後に不良目的性によつて全生活が設計されている職業型においては、更生例なく、再非行例11であつた。

### 13. 衝動診断学から見た精神病質の人格構造

金澤少年鑑別所 ○佐 竹 隆 三  
酒 川 靖 一 郎

精神病質の概念規定は今日尙一向に明確にされていない。精神医学者や臨床心理学者の大多数は大胆且安易に精神病質の診断を下すか、或は反対にかゝる概念の使用に際して不確実感につきまといわれている。我々の研究の目的はこの診断に対する衝動診断学的基礎を作ることであり、かゝる特異な人格像の根底に横たわつている本質的ものを探求するところにある。過去に於ける精神病質の診断は、本人並に保護者の陳述による既往歴によつて、恰も従来真性癲癇が診断されたようになされてきた。しかし今日癲癇の診断は痙攣発作を目撃しなくとも、又家人の陳述がなくとも、脳波所見上の異常波型の確認により診断が可能であり、場合によつては種々の賦活法により潜在的癲癇の存在をすら推定することが可能となつた。脳波所見に基いて癲癇を診断するように、我々は精神病質をその衝動プロフィールに基いて、即ち現在症から診断しようと試みるのである。実験的に確證することが出来た「精神病質の3徴候」(Die psychopathische Trias)は次の如くである。

#### 1) 快楽原則症状群

この症状群は、その人が衝動の発育制止に基いて幼児期の段階に固定されたまゝであるという事実に対する一つの確実な証拠である。

#### 2) 核心指標群の完全喪失又は部分的喪失(幼児的快楽欲求に対する検査の減弱)

この症状は精神病質と精神病群及び神経症群とを区別する。即ち精神病者や神経症者は自我ベクター (Sch) 及び道徳倫理的衝動ベクター (P) に於いて強過ぎる位の検査を示すが、精神病質では容易にこの検査を失うのである。そしてこの検査の弱さによつてこそ彼は意志不定人、嗜癖者及び犯罪人の運命を荷うのである。

#### 3) 衝動癲の3等価性及び4等価性

精神病質は衝動生活の多くの領域に於いて内部的衝動緊張の解消に対する非常口を用意している。

以上要約して、幼児的快楽欲求や衝動が強力で、これを検査する力が減弱しているか或は喪失しているかであり、しかもあらゆる衝動領域に於いて破綻を来し易い人間、これが精神病質であると規定することが出来る。

### 14. ゲシュタルト・テストに示される痴呆症状について

金澤脳病院 市 村 公 正

1) 序 言 私は各種の精神障害に於ける、各種テストの実施結果、就中、ゲシュタルトテストに就いて研究中であるが、今回は痴呆症状の存在する精神分裂病の末期痴呆、進行性麻痺の末期痴呆、人為的な電気衝戟による痴呆の例について、テスト実施の結果について所見を述べ若干の考察を行う。

2) 被検者の構成は 陳旧性分裂病69名進行性麻痺16名、電戟痴呆20名、その他28名、計133名である。

3) その結果 各テストに於て、次の様な特徴が示された。

A) Bender-Gestalt Test, 精神分裂病の末期痴呆 (Schiz, D, ) に於ては Gestalt は崩壊し点・線は共に粗雑化され、著しい逸脱と歪曲が認められ、判定の結果では Tremor Angles miss が著明である。進行性麻痺の末期痴呆 (P, P, D) に於ては、Asymmetry, Workover が著明である。電撃痴呆 (E, S, D) に於てはやはり Gestalt の崩壊が認められるが、それは E, S, D の程度によつて夫々異なる。

T, R, S は何れの痴呆に於ても高い値を示す。

B) Hector 7-Quadrate Test, Schiz, D, に於ては安定的な収斂形又は分散形を示し、P, P, D では著しい収斂形を示し、何れも不調和な、不良貧困な反応である。E, S, D では収斂形又は著しく不安定な不良貧困な反応を示す。判定評価得点は何れの際にも50点以下で、重症な痴呆状態に於ては20~30点で著しく低い値を示す。之は Gestalt の崩壊が著明な事を表すものである。

C) Section Paper Gestalt Test Schiz, D, に於ては著しく粗雑化した点又は不正円を以つて描かれ、実線を以つて描く者もあり、非対象的で、原図の縮少、拡大が屢々認められ、Gestalt の歪曲、逸脱が多い。P, P, D に於てもえがき方は同様で、常に原図の拡大再生が示される。E, S, D に於ては、汚い黒点又は不正円で描かれる事が多く、粘着傾向が著明である。何れも評価得点は低く10~20点以下である。之は再生された Gestalt が著しく崩壊したものである事を示して居る。

D) ウエクスラージュエルヴュー法改訂知能テスト Schiz, D ; P, P, D ; E, S, D に於て各問題共粗点は著しく低く、従つて換算点は1~3点に止る。動作テストに比べ、言語テストの成績は悪く、単純な記憶や、模写の能力はあるが、判断、理解の能力は著しく劣つて居る。積木デザインの問題は殆んど例に於て第1問のみが可能である。痴呆の存在は知能の低下として著明に示され、知能程度は何れも I, Q 50以下である。

E) その他の Gestalt Test として Lowenfeld Mosaic Test 等種々のテストも併用して居るが例数が少いので所見を省略する。

4) 判定例、各痴呆状態の代表的な例について、次に図示する。(図省略)

## 15. 覚醒剤耽溺者の不安体験

慈恵醫大神経科 竹山恒壽

覚醒剤中毒者が被害的関係的な妄想をもつに至ることはよく知られているが、それらの妄想が分裂病などのように理解を絶したのではなく、全中毒者特有の不安気分からみちびかれたものであることがわかる。彼等の不安気分はどんなときにおこるのか100名について調査してみると、注射直後、薬のきいているとき28名、4時間から6時間して薬効の消失したとき47名であり、薬効と関係があるようである。また注射とは時間的に無関係で、たえず不安感につきまといわれているものも10名あり、注射直後の不安感は急性中毒を意味し、薬効のきれてきた時や常時不安をもつものは慢性中毒を示している。なお薬品服用後3月以上を経て依然として不安気分をもつものを後遺症・遺残型とするがそれは5名あつた。また彼等の不安の内容を検討すると、被害感85, 自責54, 心気感37, 音響28, 警察官27, 報復の恐れ17, 注察感8(何れも実数)などである。この内容をみても複雑な要素から成立していることが知られる。或は薬物効果そのものであつたり、或は心理的な葛藤であつたり、彼等のおかれた事態の反影であつたりする。

この複雑な内容をもつ不安の成立条件を検討するに、第一には慢性中毒者におこる急性中毒としての超覚醒状態であり、この際ツット (Zutt) のいうように無意味無目的な活動欲と不安的な興味喚起が示される。そして外界把握の確実さが失われる。いわゆる覚醒夢であり、注射直後に発呈し一過性の急性中毒とみられる。第二には慢性中毒者に於ける超覚醒状態の持続である。不眠の影響もあつて慢性疲労状態に陥つて居るのを例とする。第三には外因反応としてあらわれる神経衰弱反応であり、すべての薬物中毒に共通したことであるが、能動性減退と刺激性不安が発呈する。第四には心因的な不安であり、禁止薬品を使用する自責とか非行生活の自責とかが反影されている。また粗暴な行動の間に他から報復を受けるのを恐れるようになる。この心因的な不安は覚醒剤中毒の不安気分を実体を与えることにもなる。

中毒者にあつて、これらの条件によつておこつた不安がなぜ妄想化するか。それはシュナイダー (K. Schneider) の原始性関係妄想の機制を以て説明し得る。彼等の妄想は不安気分を素材にして構成され、それが外界に投影されたものであつて、理解不能なものではない。彼等自身その妄想がなぜおこつてきたか、薬品の作用だろうということを知つて居るものが大部分であり、妄想発展を呈した場合でも確信性が稀薄なのを例としてい

る。このことが覚醒剤中毒者の妄想を基因とした犯行に際しても考慮に入れられなければならない。

## 16. 催眠夢の発生に関する実験的研究

東京教育大学 志田 氣 吹  
○ 成 瀬 悟 策

フロイドが無意識に到達する手掛りとして夢の分析を提唱して以来、夢の心理学的意義は著しく増大した。しかし、普通の夢は睡眠中に自然に発生するのを俟たねばならない。もしこの夢を任意の時機に自由に発生させ得たならば、その研究上の、特に臨床上の利点は非常に大であると思われる。ところで1912年 K. Schroetter は催眠中に夢に似た視覚的体験の獲られることを発見したが、フロイドはその翌年彼の名著「夢の解釈」に之を引用して性象徴現象の実験的証拠とした。その後何人かの人達によつて追試され、この催眠夢の現象が確認されてきた。しかしながら、これらの諸研究は臨床的に特殊な被験者について、しかも、フロイド説の検討というような特定の目的のためにのみ行われたきらいがあつた。そこで、志田は昭和28年以來、従来とは別の立場から、すなわち、催眠夢の現われ方をもつと一般的な形で実験的に捉えようとして、先ず中学生で研究を始めた。その後、大野清志（東教大）は小学生を、成瀬はそれら及び成人を含む一般的な被験者について各種の研究を進めてきた。すでにその一部分は大野が何回か報告したが、今回は志田の研究を主として成瀬の結果を併せ、催眠夢の現われ方を概括的に報告する。

実験Ⅰ 実験手続は、なるべく深い催眠状態に誘導された被験者に「……の言葉（又は音等）を聞くと、あなたにはある夢が見えてきます」と教示し、夢の発生、消滅は手を少し挙げ、下げることでそれぞれ報告させる。夢を起す刺激には言葉（色名、単語、単文等）と物理的的刺激（音、刺激、嗅等）を用いた。被験者は中学2年生22名中健忘の現われた者16名につき夢の現われた11名を採んだ。実験の結果は、予想したよりも意外によく夢が現われることを示した。獲られた夢の総数161について、夢刺激から夢の現われるまでの潜時を見ると、6～10秒が最も多く、1分以上になるものは極く稀であつた。夢の持続時間は6～15秒間が最も多いが、こゝでは1分以上がかなり多く見られる。何れも夢経路を重ねるに従つて時間的に安定し、各人に応じた一定時間に近づく傾向がみられる。夢の中の主人公は約半数が自分自身で、知人が之に次ぐが、中には主人公はいるが、それでいてこれが誰だか判らないと報告する場合もある。多くの場合主人公が最初から現われるが、中程や最後になつてから出てくる場合もあり、被験者の過去経路に関連ある夢がみられ易い。

実験Ⅱ すでに夢が現われて進行している途中に、他の夢刺激を与えると、この夢刺激に関連ある内容が、現在進行中の夢の中に織込まれて、適宜な位置を占めながら、さらに夢を進行させていくことが認められた。このような夢の干渉の仕方は与える刺激の種類と、進行している夢の内容と、さらに被験者の諸特性の力学的統合の結果によるように思われる。今回の干渉刺激は物理的刺激を主としたが、さらに言葉を用いた今後の干渉実験がこの予想を確かめてくれることであろう。

## 17. 盲・ろう児童・生徒の研究(1)

### —要求水準の比較研究—

日本大学 森 一 司  
○ 松 田 房 敬  
平塚ろう学校 岩 本 雄

ろう児と普通児との要求水準を比較研究した中村秀氏は、心的構造の分化度と要求水準の D-score の大小とが逆比例することを結論している。本研究では、同氏の場合と同様にマッチボードを用いたが、1回の試行時間を2倍の60秒とし、ろう児と盲児とにこれを課して、その結果を比較検討して見た。

被験者としては、いずれもこの種の器具実験には未経験のろう学校および盲学校の中等部生徒を使用し、いずれも先天的、あるいはそれに近い障害児で、ろう児の場合は全ろうおよび強度の難聴児。盲児の場合には全盲と弱視児の中から11名宛選り、知能は普通以上のものである。平均年齢は、ろう児が13.7才、盲児が14.2才である。

実験は個人検査で、予め3回の練習を行わせて十分習熟した後に本検査を10回行い、出来るだけ多く棒をさすように要求し、その間に次の試行に対する作業量の予想をいわせて、これを記録する。

要求水準と前回の結果との差を D-score とし、もし次回の予想成績の方が高ければプラス、低ければマイナ

スとなる。これに基づいて盲児群の平均を見ると、要求水準は25.3本、前回の作業成績は23.4本、D-scoreは+1.9、 $\sigma$ は2.3である。ろう児群の平均は、要求水準が44.2本、前回の作業成績は44本、D-scoreは+0.2、 $\sigma$ は1.0である。

これらの結果は、先述の中村氏の研究とは条件が異なるので、直接比較することは出来ないが、ろう児群は同様にD-scoreの分布度が普通児群より大である。

次にろう児群と盲児群とを比較して見ると、盲児群の分布度は著しく大ではあるが、+2.5以上のD-scoreを示した4人の被験者はいずれも全盲児であるので、こゝに他の要因が現われているとも考えられるので、これを直ちに分化度に結びつけてろう児より心的構造が未分化と結論し得るかどうかは今後の研究に待ちたいと思う。

## 18. 聾児、生徒の言語能力（その5）

### — 語彙の調査結果とその問題について —

日 本 大 学 森 一 司

正常な児童の語彙は小学校入学時において約5000語をきいて理解し3000語を使うことができるといわれている。しかし聾児、生徒にとつては、その量に於ても質に於てももつと劣るものと考えられる。今回は聾児、生徒に語彙検査を実施し語彙量と理解の程度について発達の、分析的に研究してみた。

実験は昭和31年1月～3月に行われ、二種の検査を実施した。Test Iは国立国語研究所で作成された30問の語彙検査をそのまま使用し、Test IIは牛島、森脇両氏が作成した基本的日本語彙1500語の中から具体的な語彙50問、非具体的語彙10問、計60問をもつて私案の語彙検査を作成した。被験者は正常群小学1, 2, 3年150名、聾群小学2年～高等部3年、約500名である。

Test Iの平均値（正答に対し1点）は、正常群は3年で23.7に対し聾群は高等部、つまり10～12年の学習年数を経たもので16.7である。両群の間には充分有意の差がある。Test IIでは正常群小学3年で57.5に対し聾群では高等部の生徒で47.1である。両者の間には有意の差がみられる。得点の分配曲線をかいてみるとTest I、Test IIともに聾群では、曲線に多少の凹凸がみられるが全体的には学年が進むにつれ語彙が増加している。この増加の具合は第20回の学会で報告した使用語彙の発達状況と全く同じようである。Test Iで正答率の高かつた語彙（80%以上）は、聾群では30問中5問で「昨夜」、「牛肉」、「おく歯」、「おさいせん」、「なまぐさい」である。正答率の低かつた語彙（50%以下）は、「ゆうだち」、「あぜみち」、「ながしもと」、「お給仕」、「ばんそうこう」、「すもうとり」、「みようじ」、「あとずさり」、「行きがけ」、「あつらえる」、「すげる」、「しぼりあげる」、「くべる」、「ねすごす」、「ひとりでに」、「ざくざく」であつた。Test IIで正答率の高かつた語彙は「いぬ」、「きしや」、「ひこうき」、「あお」、「くろ」、「えんぴつ」、「ほん」、「くつ」、「とけい」、「ねこ」、「かえる」、「せみ」、「さる」、「ぞう」、「くり」、「かき」、「牛」、「かばん」、「かに」、「かめ」、「今朝」であつた。正答率の低かつた語彙は「すべり台」、「えんとつ」、「たんす」、「せんす」、「ろうそく」、「きゆうり」、「鯉のぼり」、「アイスクリーム」、「おなべ」、「ほろき」、「さかんに」、「かなた」、「鈍（のろ）い」、「しだいに」である。尙 Test IIは1～50は絵を示し絵の名前を記入させる方法51～60は、Test Iと同様三つの選択肢をもつ方式である。牛島、森脇氏の語彙表にある分類に従つてA, B, C, Eに分けて考察すると小学3年で正常群はA, B, C, Eの各段階に正答率80%以上を示した。聾群では10～12年在学した高等部の生徒で70%の正答率しか示さなかつた。これらの結果から両群にはかなりの差がみられることゝ聾児、生徒の語彙の獲得がいかに困難であり、多くの問題を教育的、生活的、社会的に含んでいるかが理解される。

## 19. 学校調査よりみたるろう児、ろう生徒の心身条件について

東京教育大学 荒 川 勇  
〇古 既 勝 彦

昭和28年末に行つた調査の結果のうち、(I)ろう学校在学中の児童・生徒について、その在学している学年と在学年数との関係。(II)失聴時期（先天・後天）別にみた場合の、各在学々年における年齢分布の二点についての発表である。

### (I) について

(イ) ろう学校教育の義務制実施後6年を経っていたのであるが、義務制として在学している小学部6年以下の児

童（幼稚部課程を経ぬもの）、小学4年以下の児童（幼稚部課程を経たもの、しかし幼稚部は義務制ではないが）の数と在学年数6年以上の者との数は、はつきり相違しており、此の面での義務制実施の効果を示しているものである。

（ロ）早期の言語教育のため近年幼稚部が増設されて来ているが、義務教育として在学している児童の一割にも達せぬもののみが幼稚部課程を受けているに過ぎない。

（ハ）小学部高学年以上の学級では、その在学年数に4～5年の差がついている。いわば正統的な学年進行をしているものに比し数は少しではあるが、特別学級に入れる程ではなく学年進行をずらしているものと云えよう。

（II）について

（イ）在籍者総数に占める男女の割合は54%、46%と男子ろう者が多い。

（ロ）失聴原因を知ることの困難な現在、先天・後天の区別はなかなかつけ難く、信頼性に乏しい点に注意を要するが、調査に現われた結果を示せば男55%、40%に対し、女59%、36%となっており、先天ろう者の方が比較的多く、女子においてはその傾向の著しいことを知る。

（ハ）学年別の年齢分布は、普通学校のそれに比し著しく広い範囲にわたっており、昭和29年1月1日現在として算出したものでみると、例えば、幼稚部1年（1年目）では3才～16才、小学部1年（1年目）は4才～21才となつている。しかし、かかる範囲の広がりが高学年に進んではむしろ狭まらつている傾向を示し、高一（12年目）16才～20才、高一（10年目）14才～26才となつている。

小学部6年（6年目）には32才、33才、37才の先天ろう者が各1名在学している。義務教育実施に刺戟されたものとみるべきであろうか。

結果については以上の如くであるが昭和28年5月現在のろう学校在学児童・生徒数は16,124人であり、総数の73%のものがこの調査に含まれたものであつた。

## 20. 賞罰に関する一考察(3)

### —特に非行少年の学習効果との関係—

日本大学 駒崎 勉

賞罰が学習の動機づけとして有効であることは、古来極めて多くの実験的研究によつて証明されて来た。しかし賞も罰もその効果は非常に複雑なものであり、賞罰の与えられる場面の構造とそれらの与えられる側のパーソナリティーの変容は賞罰の効果を変えさせるものでもあろう。

この実験はこんなように賞罰を力動的なメカニズムを持つものとして捉え、性格異常ないし環境異常の非行少年の場合学習作業上の動機づけにどんな傾向を示し、また一般少年に比しどんな差異を生ずるか見ようとしたものである。

【実験手続】 被験者 非行少年集団としては神奈川県神奈川少年院に收容されているもののうち入院後3ヶ月目の成績段階2級の下のものから、無作為に45名（平均IQ 95）を選んだ。一方一般少年集団としては年令的には大きな相違があるが前回の応心に発表した実験の結果に基づいて、小学校5,6年生を10名あてることとした。

【実験方法】 非行少年集団の場合、無作為に3室に分けて1桁4項からなる加算テストを行つた。作業は1試行8分、休憩10分とした。実験は2日にわたつて行われ、第1日目は刺激を与えず、試行を3回繰返した。第2日目は無作為に賞、罰、統制の3群に分けた被験者を、それぞれ刺激別に部屋に入れ、賞群には第1日目の試行が他の群より成績が優れ、また他の少年院よりも成績が良いと伝え、一方罰群には、反対に他の群よりも成績が悪く、又他の少年院に比較しても成績が劣ると伝え、統制群には特別な刺激を与えなかつた。以上の刺激後、直ちに作業をさせ、再び賞群には賞賛を、罰群には批難を与え、作業を繰返した。

【結果】 各群の第1試行の作業量を100%として、それに対する百分比で表わした。

1) 賞罰両群には有意の差は全く見られなかつた。

2) 統制群は2%の危険率で賞罰両群より優れ第5試行では145%以上の上昇率を見せた。これは単に放任が賞よりも優るということではないだろう。完全に別室でコントロールしての実験ではなかつたので適度に動機づけされたことはいうまでもない。むしろ賞にせよ罰にせよ刺激が大きく影響し作業を低下させるのではなからうか。その意味でかれらには賞の効果がないのではなく、適度の動きづけとしての賞なら作業を一層向上させるのではないだろうか。なお一般少年群と比較すると同群の賞の場合128%の増加率に対し、非行少年群は、賞罰の

有無に関係なく、一般少年群に優り、特に非行少年群の統制グループは145%の増加を示している。

3) 以上一応非行少年の単純学習作業にはあまり強くない刺激としての動機づけが望まれ、単に賞罰の効果には、差がないとはいえないと考えられる。終に神奈川少年院のご協力に深い感謝を捧げる。

## 21. 分裂病患者の概念的思考に関する一研究

前橋市立女子高校 大澤 博

精神分裂病患者の思考の研究方法には、大別して、言語に現われた思考過程を材料として論理形式の面を研究する方法と、概念構成などの比較的無意識的な面を明らかにしようという方法の二つあると考えられている。前者についてはカメロン、後者についてはヘンフマンやカザニンなどがやっているが、ロバート・ザスロウは彼等の研究を足がかりとして、分裂病患者の思考障害は主に、思考過程の流動性 (Fluidity of thought process) と概念境界の変動 (Fluctuation of conceptual boundaries) を特徴としており、これを客観的に明らかに出来ないかと簡単なテストによる研究を試みている。実験方法などについて検討の余地はあるが、それを追試したのが本研究である。

実験方法としては、三角形から漸次形が変容して円に至るまでの14の図形を夫々カードに描き、またザスロウの方法にはなかつたのだが、同じ形の上に赤、黄、緑と漸次変容する色紙をランダムに貼ったカード14枚も使い、次の如き実験を行った。尚被験者としては、正常成人14名、分裂病患者55名、器質的原因による精神病として進行麻痺の患者10名、発達の考察するため幼児40名を用いた。

実験A (1) カードをばらばらにしておいて「出来るだけよい順序に並べなさい」という教示を与える。(2) 正しく排列すれば両端になる三角と円を一定の間隔をおいておき、「三角から段々円になるように並べなさい」という。(3) 正しく排列されたカードを示して「三角といえるものはどこまでですか」「円といえるものはどこまでですか」という。(4) 三角とも円ともいえないものを除かせる。

実験B 色紙を貼ったカードを用いて実験Aと同じ方法で実施する。

実験C 色を基準にして排列させる。

結果を考察してみると、

- 1, 概念的体系構成では分裂病患者群は正常成人群に比し非常に劣つて居る。手がかりを与えられると相当に向上するが、尚正常成人群には及ばない。大体ザスロウの結果に近い。
- 2, 概念範囲についてはザスロウの結果ほどはつきりは出ていないが、広くとるものの率が分裂病患者群に多い。
- 3, 概念境界についてはそれを維持しないものの率が分裂病患者群に最も多い。
- 4, 幼児群との比較では概念的体系構成の場合に分裂病患者の方がすぐれているが、概念境界の維持については逆である。
- 5, 器質的精神病患者との比較については被験者の数が少ないので明白でないが、余り差がみられない。
- 6, 色彩を用いた図形の場合にも上と同様の結果を示している。



## 12. パネル・ディスカッション

### 「交通事故防止対策について」

|           |                   |           |
|-----------|-------------------|-----------|
| 司 会 者     | 東 京 大 学           | 中 村 弘 道   |
| 話 題 提 供 者 | 東 北 大 学           | 大 脇 義 一   |
|           | 東 京 教 育 大 学       | 小 保 内 虎 夫 |
|           | 東 京 教 育 大 学       | 中 野 佐 三   |
|           | 国 鉄 労 働 科 学 研 究 室 | 鶴 田 正 一   |
|           | 東 京 家 庭 裁 判 所     | 山 本 晴 雄   |
|           | 警 視 庁 防 犯 部       | 佐 伯 茂 雄   |

(4月7日午後1時30分から3時30分まで、他の研究発表と並行せずに単独に進められたので全参加者がこれに参加し盛況裏に行われたが、その討議の概要を録音を基にして、発言者ごとに編集者がまとめたものが次の抄録である。このうち鶴田氏と山本氏の分は発言者の好意によりその要旨を原稿としてまとめていたものをそのまま掲載したものである。)

中村弘道氏:一予定の2時間の2/3を話題提供者の発言時間とし残りを質疑応答の時間としたい。交通事故の原因に対する心理学的研究の必要を痛感する。国鉄労組でも事故防止のため、従業者のテスト実施に充分の理解をもってもらふよう応用心理学会から国鉄に申し入れを行うべきである。騒音と事故との関係も重大な問題である。大脇義一氏:一洞爺丸事件その他の交通事故に対する世論が、感情論的責任追究から物的原因の探究に進んで来たが、外国の例や仙台での実例に見られるように、事故原因の90%までが運転者の心理的問題に存するという方面について無関心の情態におかれているので、この方面の研究にとりかゝることになった。ドイツでは戦前アツハのスピード別によるトラックの実験的研究も行われたが、事故者には不適格者と家庭的原因をもつ者とのあることも注目すべきである。不適格者を除くために適性検査の研究を進め、運転者の技術検査を行う時にこれを実施できるようにしたい。3年に1回行われる免許証の書きかえのさいに、このような適性検査を実施すべきである。

小保内虎夫氏:一交通事故の統計的資料により外国も日本もこれによる死傷者の多いことを指摘し、月別では12月に多く、天候では降雨の日、特に1日の雨量11~12mmの日が多く、曜日では土曜日に多い結果となつている。道路別では大道路に最も多く、電车道・十字路がこれに次ぐことが示され、標識の研究の必要が痛感される。

鶴田正一氏:一(原稿による)一昭和21~23年頃の運転事故件数は、国鉄戦前の最良の年といわれる昭和11年度のそれに比べて約3.5倍にもなつていた。そして、その事故の内容は、その性質の重大なものほど国鉄職員の責任に帰せられるものが多く、重大事故に至つては、その61%をも占めていた。そして、その原因は、国鉄の作業自体が人間一般の心理的機構に不適切な面を宿命的に含んでいる上に、責任事故惹起者の大部分が、その作業の適性に関して欠けていることであつた。すなわち、その作業が本人の能力の限界を超えているものであつた。そこで、その対策として、新規採用者および、現運転関係従事員に対し、心理学的検査を行うことにした。

その結果は、責任運転事故の減少は著しく、昭和29年度には、このような心理的検査の実施前に比して、83.6%減、昭和11年度に比しても62%減という成果をもたらした。

しかし、こうした国鉄内責任運転事故の減少傾向にもかかわらず、踏切障害事故のみは、いまなお激増の一途をたどつている。この事故の内容をみると、国鉄職員の責任に帰せられるものは1.1%で、80.6%は自動車等の運転者に、18.2%は歩行者に責任が帰せられるものであつた。そして、その大部分は、踏切無停止、列車直前横断によるものであつた。これに対する、踏切設置形式と事故との関係を統計的に研究してみたが、結局、見透距離と交通量とが事故と深い関係を示し、各面から行われている踏切整備状態の良否も事故の発生を抑え切れるほどの作用を示していない。

対策としては、踏切道を廃して立体交差にすること、それができなければ踏切警手を配置することが願わしいことではあるが、全踏切をこのようにすることの不可能な現状においては、一般通行者、特に、自動車運転者が踏切一旦停止を自発的に励行することによつて、事故を未然に防止するより外にない。彼等は一旦停止の必要は知つているが、これを実行しえないのである。これを如何にしたら実行しうるようにもつていけるか。

この問題は通行者の心理学的調査に基づいて、これに対する有効適切な P, R の方法とその効果の測定の研究にまたねばならない。

山本晴雄氏:一(原稿による)一交通法令違反や交通事故の激増は少年の犯罪事件にも反映し、例えば東京家庭

裁判所で取扱った昨年の少年事件は一般の犯罪事件 10,000 余件、交通法令違反事件 60,000 余件という内訳であり、また一般の犯罪事件の中で 500 余件は交通事故（過失傷害、過失致死）である。

家裁で少年を処分するやりかたは懲罰ではなく、性格・環境・生活史・事件の動機等を調査して原因を探求し、それに基づいて教育的に処遇するのであり、罪質、情状（性格・環境・生活史・素行を含む）共に悪い場合には検察庁に逆送して成人と同じように刑法を適用することになっている。従つて、交通事故運転手を処分する場合にも、その知能性格・環境・事件の動機等の調査を主眼とする。身柄在宅書類送致の形式で運ばれるので少年鑑別所に收容することは非常に少なく、鑑別も家裁の科学調査室が担当している。東京家裁では事故運転手の鑑別には知能検査の外に、クレペリン・ロールシャッハ・CST・直立安定・神経質・情緒安定・向性等をテストしている。性格のテストが多いのは、事故運転手に事故の真の原因を反省させて無記名で書かせた結果、事故の真の原因がスピードの出し過ぎ、警笛を鳴らし徐行して急停車の準備をしないからであり、事故の大部分が防ぎうるに拘らず疾走して起すので性格にも原因があるかと思われたからである。もつとも事故の原因はその外に自動車が一般に法令を守らないで疾走しているなどの社会慣習による原因が注目されるし、運転未熟、適性の欠陥、被害者の過失も一因であるが、やはり問題は疾走という慣習と疾走せずにはいられない性格に研究的意欲を抱かせられたのである。

しかし、知能性格の検査の結果に基づく結論はこれからであり、特に無事故運転手、法令違反累犯で事故運転手、前に法令違反なく事故を起したものととの比較研究を今後行いたい。唯調査後の感想では、怒りやすい、負けず嫌い、性急な性格には問題があるし、また IQ 50 など精神薄弱者は車の多いめまぐるしい道路で注意深く適切な複雑反応ができるかどうかの問題である。

家裁では法令違反運転手は初犯のものは調査官の訓戒程度で審判不開始（大人の不起訴に相当）となるが、法令違反累犯者や事故運転手は試験観察となり 3 ヶ月位調査官の監督を受け、時々家裁に呼ばれて法令の講習や事故の生々しい場面をスライドで映写しての講習を受けている。講習後の感想を無記名で書かせた結果によると、大部分は「スピードを出してはいけないことを痛感した」と記している。

なお法令違反や事故の運転手で家裁の呼出しに応じなかつたり逃走の恐れがあるものは警察官に同行させて少年鑑別所に收容して調査するが、この時も少年もよく反省するようである。また悪質な法令違反累犯運転手や悪質な事故運転手は検察庁に逆送して成人と同じ裁判を受けさせているが、殆んどが罰金刑であり、雇主が払っているようである。

佐伯茂雄氏：一警視庁では最近クレペリン作業検査を始め、異常曲線者に事故頻発の傾向のあることを認めている。事故統計では年末と土曜日とに多いことが示されている。スピード違反者に対する教育は不十分だが、中には精薄者もある。

中野佐三氏：一事故の起り易い日について修学旅行後の中学生に反省を求めた結果では第 2 日と最終日とがあげられている。事故防止に関する安全教育内容は高校では保体科で取扱われるが、中小校では教科外活動で通学班の交通整理実施などの形で行われている。

質疑応答：一阿部孫四郎氏：歩行者のための信号を考えること、左側通行の習慣をかえることは困難であることなどの意見。児玉省氏：交差点の巡査の整理法に心理学的無関心さがあること、信号時間と横断距離との関係車の停止位置その他の問題点を指摘し、特に交通従業者に対する心理検査の実施を当局に建議すべきことを強く要望。小熊虎之助氏：運転手にてんかん病者のあることを指摘。橘覚勝氏：大阪市でも昨年 12 月から大阪大学が中心となり関係方面と協力して事故防止研究会を推進しつつある経過の概要報告。結城錦一氏：歐洲滞在中交通機関の静かなことに感心した、（滞欧中自動車の警笛を聞いたのが 6 回だけ）、米国も静かだが、日本は非常に騒がしい。外国では人が車に優先するから警音はいらない。日本では警音の 85% までが不必要な鳴らし方をしている。騒音防止教育と共に警視庁に騒音取締を要望すべきであるとの意見。

中村弘道氏：一欧米では交通事故漸減の傾向にあるが、これは心理学者の協力による。わが国でも今後心理学者の協力を求めるように以上の討議の要旨を応用心理学大会の要望として当局に建議することを本日の総会に提案したい。一全員拍手賛成。（石川七五三二記）

## 13. シンポジウム

### I 「親子関係の研究法」

| 司 会 者               | 九 州 大 学   | 牛 島 義 友 |
|---------------------|-----------|---------|
| 1, 親子関係研究法の概観       | 東京教育大学    | 長 島 貞 夫 |
| 2, 親のしつけ態度の測定的研究    | お茶の水女子大学  | 松 村 康 平 |
| 3, 親子関係のケース・スタディ    | 国立精神衛生研究所 | 加 藤 正 明 |
| 4, 量的研究・質的研究の長所及び短所 | 名古屋大学     | 依 田 新   |

牛島義友氏:一家庭的条件や親子関係などが子供の心理に及ぼす影響については古くから研究されていたが、その頃は主として知的発達に関する影響を問題としていた。親子間の知能の類似度とか、出生順位と知能などが問題とされたし、またこのような環境の影響と遺伝の関係が問題とされていた。これを第一期の教育環境学的時代とすることもできよう。

これに対し最近では性格やパーソナリティの形成が主要な問題となるに従い、家族関係は重要な要素として考えられるようになってきた。この傾向に対してはたしかに精神分析も大きな貢献をしている。性格をたゞ生物学的に遺伝的に考える場合には前の知能への影響の程度に問題とされるだけであろうが、精神分析によつて出生後の生活体験、乳幼児期のフラストレーションがパーソナリティ形成に徹底的な影響を与えると考えるようになってからは親子関係が新たな脚光を浴びて登場してきた。また問題児などを扱う臨床心理学においても家庭における育児態度や家庭の雰囲気、親の性質などが問題とされてきた。

他方この育児態度と子供の性格との間の実証的統計的な研究が最近数多くあらわれるようになってきたが、これらの研究によつて必ずしも精神分析の理論を裏付けるとは限らない。否、概して兩者の間の関係は著しくなく、また研究によつて矛盾することもある。これについては研究去そのものにも問題があると考えられる。育児態度ないしは幼児の性格を客観的に把握できない限り兩者の結びつけも困難となろう。これらの諸問題について諸家の御意見を承りたいと思う。

加藤正明氏:一従来日本の精神医学では、遺伝・素因の重視が支配的傾向となつていたが、戦後いわゆる力動精神医学の流入とともに、人格形成にあずかる対人関係の問題がクローズ・アップされ、生活史的背景に関心が払われるようになった。ことに、親子間の対人関係の問題は、エディプスの神話とともに古くから精神分析学の理論的根拠となつてきた。しかし、古典精神分析学の仮説は、ホルナイ、フロムをはじめとする新フロイド派によつて反対され、ひろく対人関係の障害に重点をおくサリヴァンらのワシントン学派が、神経症、精神分裂病、児童の問題行動などを中心に、その理論を展開し、心理療法に新しい一つの足がかりをつくつたといえる。

だが、実際に精神医学の領域で、親子関係の研究を操作的にすすめていく手段については、まだ確定的なものがない。例えば、学生の神経症群と対照群の比較、都市農村の比較、民族差の比較などが、神経症、精神病、心身相関の疾患、性的倒錯、自殺などの事例研究を通じて行われている。

しかし、個々の事例研究によつて得られた仮説を一般化するとき、ことに異常心理現象の場合には抽断が生じやすいことは、精神分析の理論が示す通りである。このさい、親子関係を測定する評価規準が、心理学者、社会学者との協同研究によつて推進されることを、我々は望んでやまない。

ことに、精神医学領域では昔から一卵性双生児の不一致性について、多くの研究が続けられているが、この領域に対しても、各分野の協同研究と、長期のフォロー・アップ・スタディがなされることが必要であると思われる。

松村康平氏:一「家族関係の調整法—『心理劇』による方法」〔I〕家族関係の研究を遅らせていたものは何か。

①「理論」人格理論の未発達。②「対象」家族の閉鎖性。③「方法」人間関係研究法の不備。

〔II〕こゝでは、家族の人格形成に及ぼす役割を重視し、プロジェクティブ・テクニクによりその閉鎖性をこえ、診断「即」治療の立場から研究実施しているものを、紹介する。

〔III〕CATによる家族関係の診断と改造に関する研究。(本大会個人発表及びお茶の水女子大学人文科学紀要、昭和31年3月、参照。)

〔IV〕「心理劇」による人間関係の診断と改造に関する研究 ①「生徒と教師との関係」についての心理劇(スライド使用。) ②「母子関係」についての心理劇。その他。

〔スライド解説〕主題: 先生の扱いにくい子供、16コマ。1~4コマ: 教室。先生(問題をもつ先生A)と生徒(いずれも補助者。問題の子Bとその友達Cとして登場)。地理の時間。生徒さわぐ(先生との面談から浮んだ問題場面)。先生がとがめる。5~10コマ: 休み時間中のけんか。11コマ: 観客(劇をみる問題の子)。12~13コマ: 教室。先生(問題の子が役割をとる)と生徒(いずれも補助者、前回と同じ)。14~16コマ: 休み時間のけ

んか（先生の役割をとつた問題の子が、けんかを裁く）。

〔劇のねらい〕 問題をもつ先生に対して：先生が日常の扱い方を再現。その役割を子どもが演じるのを観客として客観的にみる。そのことから、自分の役割を子どもとの関係でとらえる・子どもへの理解を深める・好ましい扱い方への洞察をもたらす。問題の子どもに対して：補助者の演じる子どもの役割を客観的にとらえる。先生の役割をとつて演じることにより、規範の内化に役立つ。問題場面の解決行為を通して、子どもとしての新しい役割の創造をもたらす。

〔その他〕 スライドで示した技法は、家族関係の調整に役立つこと。家庭での振るまい方から学校でのそれを類推して心配する母親に、学校での子どもの役割を演じてもらい、それを子どもがみての感想「お母さんのしたのは、お友だちBさんそつくり」。このことから、母親は、家庭と学校での振るまい方の相違を知る・場面の洞察を得る・子どもの理解を深める。既に「心理劇」を、母の会・父の会・研究会で実施し、家庭での「きょうだいけんか」の調整などにも役立つことがわかった。「心理劇」による生活指導の発展を期している。

牛島義友氏・一長島貞夫氏からは家庭条件と子供の性格とを直接結びつけることに対する疑問が出された。経済条件とか兄弟数と子供の性質とを直接結びつけるのは単なる社会学的な考察であつて心理学としては家庭の雰囲気だとか親の考え方などを媒介変数として取り入れなければ無意味である。たとえ経済的に貧困であつても家庭の雰囲気がそれを補うだけの健全な楽しいものであれば必ずしも子供の性質がひねくれたりするはずはないと主張された。また依田新氏からは家庭環境を客観的に把握するために名古屋大学において数年来努力されている研究を紹介された。これらの考え方や研究によつて親子関係についての研究が一層進歩することゝ思う。

しかし他方精神分析的な性格理論については加藤氏の指摘されるように単なる理論的な考察でなく実証的な事例に基づいた研究の必要が感じられる。また松村氏の心理劇は親子関係の診断が同時に親子関係の調整、治療になる点で極めて興味のある方法といえよう。今後ますます研究の進展することを望んでやまない。

## II 「色彩と性格」

| 司 会 者                  | 早 稲 田 大 学   | 戸 川 行 男 |
|------------------------|-------------|---------|
| 1, 色の好みと性格             | 茨 城 大 学     | 木 村 俊 夫 |
| 2, 描画における色と性格          | 東 京 学 芸 大 学 | 角 尾 稔   |
| 3, 形態色検査における色と性格       | 横 浜 市 立 大 学 | 外 林 大 作 |
| 4, ロールシャッハ・テストにおける色と性格 | 早 稲 田 大 学   | 本 明 寛   |
| 5, 色彩象徴テストにおける色と性格     | 山 梨 大 学     | 松 岡 武   |

## 14. 第21回大会発表取消者

本大会終了後の運営委員会で発表取消者を記録するようにとの要望があつたので、次に病気、公務その他の事情で取消された22篇を掲げることにした。

| (部 門)   | 〔 発 表 題 目 〕                                     | 〔 所 属 〕                   | 〔 氏 名 〕          |
|---------|---|---------------------------|------------------|
| (臨 床)   | ウエクスラー・ベルヴェー法テストに依る<br>保護少年の Scattergram の検討 II | 東京少年鑑別所                   | 袴 田 明            |
| (臨 床)   | 肢休不自由者の診断法の研究(その4)<br>"Body Image" について         | 国立身体障害者<br>更生指導所<br>早稲田大学 | 田 中 豊<br>金 子 精 宏 |
| (研 究 法) | 児童生徒の生活態度に対する調査の分析的研究(その4)                      | 名古屋大学                     | 太 田 稚 夫 他3名      |
| (産 業)   | 労働者のレクリエーションに関する心理学的研究                          | 東京大学                      | 松 井 三 雄          |
| (産 業)   | 日雇労働者の労働意欲について                                  | 労働省                       | 村 中 兼 松          |
| (人 格)   | 自律神経機能が人格形成に及ぼす影響に関する研究<br>—副交感神経緊張型を中心として— (2) | 大阪学芸大学                    | 中 西 重 実 他3名      |
| (教 育)   | 幼稚園児の偏食について                                     | 神戸市立教育<br>研究所             | 黒 橋 糸 一          |
| (教 育)   | 学級構造の形成と変動<br>—ある学級の二年間の記録—                     | 岡山県<br>琴浦西小学校             | 片 山 英 雄          |
| (教 育)   | 指導法についての一研究(第三報告)                               | 名古屋大学                     | 大 西 誠 一 郎        |

| 〔部 門〕  | 〔発 表 題 目〕  | 〔所 属〕                | 〔氏 名〕         |
|--------|--|----------------------|---------------|
| (臨 床)  | 精神薄弱者の犯行の裁判鑑定例を通じての所観                              | 広島大学神経科              | 小 沼 十 寸 穂     |
| (司 法)  | 死刑執行命令と命令官の特性                                      | 一 橋 大 学              | 植 松 正         |
| (検 査)  | SCT の信頼性についての研究                                    | 香 川 大 学              | 高 橋 茂 雄       |
| (検 査)  | 定時制高校生の劣等性意識について                                   | 東 京 教 育 大 学          | 横 山 雅 臣 他2名   |
| (職業指導) | ろろあ児の職業指導に関する研究(其二)<br>—クレペリン作業検査—                 | 新 潟 大 学              | 緒 方 利 則       |
| (学 習)  | 文字学習過程の研究(1)<br>—知覚過程の分析—                          | 岡 山 縣 校<br>浮 田 小 学 校 | 笹 野 完 二       |
| (記 憶)  | 記憶における弁別と類似について                                    | 静 岡 大 学              | 田 中 敬 二       |
| (記 憶)  | 児童の形態記憶について  | 大 阪 市 立 大 学          | 中 浅 西 田 ミ 昇 ッ |
| (教 育)  | 算数心理に関する実験的研究(その6)<br>—児童の数量に関する興味について—            | 佐 賀 大 学              | 副 島 羊 吉 郎     |
| (言 語)  | 読みにおける知覚説(触腕からみた決定文字説に<br>関する一実験)                  | 東 京 教 育 大 学          | 佐 藤 泰 正       |
| (臨 床)  | Rorschach Test に現れた拘禁反応並びにその<br>Protocol と行動特性について | 立 教 大 学              | 森 戸 俊 夫       |
| (司 法)  | 白か黒かラジオ商殺し公判の心理学的解剖                                | 徳 島 大 学              | 小 田 信 夫       |
| (言 語)  | 生活場面における言語のコミュニケーション<br>—口 げ ん か—                  | 国 立 国 語 研 究 所        | 村 石 昭 三       |

## 15. 日本応用心理学会い報

### I 沿革摘要

※昭和6年6月、東京帝大航空研究所において「応用心理学会」発会。会長松本亦太郎博士。以来毎年2回大会開催。

※昭和9年4月、京都帝大において応用心理学会と関西応用心理学会との合同大会開催。以来これを「日本応用心理学会大会」と称して隔年1回開催。その年には応用心理学会大会の開催は1回のこと。

※大会発表の研究成果は東京文科大学心理学研究室編集「教育心理研究」誌上に掲載。

※昭和15年4月の日本応用心理学会第4回大会 昭和16年6月の応用心理学会第17回大会以後は大戦のため中絶。

※昭和21年3月、応用心理学会復興第1回大会を日本大学において開催。

※昭和21年9月、「人間科学」創刊。同24年12月第4号刊行後中絶。

※昭和25年6月、「日本応用心理学会」と改称。

※昭和28年11月、「応用心理学論文集」第1集刊行。第10回から第14回までの大会発表研究論文収録。

※昭和28年4月から昭和29年6月まで、「心理学講座」編集。中山書店出版。

※昭和29年11月、「心理学講座」に対し1954年度「毎日出版文化賞」を受く。

※昭和30年1月から同年6月まで、「職業指導講座」編集。中山書店出版。

※昭和30年2月、「心理技術者養成に関する意見書」建議。

※昭和30年9月、「交通事故防止のための心理学的研究ならびに施設の強化についての意見書」建議。

### II 役員氏名・機構

※会 長 石 川 七 五 三 二

※副 会 長 古 賀 行 義

※運 営 委 員 (○印は常任委員)

|         |             |            |            |            |
|---------|-------------|------------|------------|------------|
| 天 野 利 武 | 石 川 七 五 三 二 | 今 田 恵      | 植 松 正      | 牛 島 義 友    |
| 大 場 千 秋 | 大 脇 義 一     | ○岡 部 彌 太 郎 | ○小 熊 虎 之 助 | ○小 俣 内 虎 夫 |
| 兼 子 宙   | 桐 原 葆 見     | ○古 賀 行 義   | 古 武 彌 正    | ○児 玉 省     |
| 阪 本 一 郎 | 相 良 守 次     | 佐 竹 隆 三    | 佐 藤 幸 治    | 塩 入 円 祐    |

○鈴木 清 橋 覚 勝 戸川 行 男 ○豊原 恒 男 ○中野 佐 三  
 ○中村 弘 道 正 木 正 増田 幸 一 ○松井 三 雄 ○松村 康 平  
 松本 金 壽 三 木 安 正 宮 孝 一 村 上 仁 ○盛永 四 郎  
 ○山根 薫 山根 清 道 結城 錦 一 ○横山 松三郎 依田 新  
 ○渡辺 徹

※名誉会員 淡路 円次郎 田中 寛 一

※学会事務局 事務局長 長谷川 貢 局員 大村 政 男(庶務) 山岡 淳(会計)  
 浅井 正 昭(庶務) 古牧 節 子(庶務)

※部会代表者 教育心理部会 中野 佐 三  
 産業心理部会 桐原 葆 見  
 犯罪心理部会 小 熊 虎 之 助  
 臨床心理部会 鈴木 清

※交通事故対策委員会 委員長 中村 弘 道

#### 備 考

- 1, 石川会長および古賀副会長の任期は昭和30年10月31日から昭和31年4月8日までである。
- 2, 昭和31年4月9日から昭和31年11月4日まで会長大脇義一、副会長石川七五三二。
- 3, 運営委員の任期は昭和31年7月4日から昭和33年7月3日まで。

### III 運営委員会・常任委員会記録

※昭和30年12月27日 運営委員会 於日本大学文学部第一会議室。

- 1, 第21回大会(会場山梨大学)の大会開催方式の件協議。
- 2, 会則の一部改正案討議。(名誉会員の条)

※昭和31年1月7日 常任委員会 於日本大学文学部第二会議室。

- 1, 名誉会員人選の件審議。

※昭和31年1月10日 運営委員会 於日本大学文学部第二会議室。

- 1, 名誉会員の規定、名誉会員の推薦方法の協議。
- 2, 会則の一部修正案討議。(名誉会員の条)

※昭和31年4月3日 運営委員会 於日本大学文学部第一会議室。

- 1, 名誉会員の候補者として淡路円治郎、田中寛一および渡辺徹の三氏を推薦。渡辺氏固辞。
- 2, 運営委員改選の件討議。
- 3, 会則の一部修正案討議。(名誉会員の条)

※昭和31年6月18日 運営委員会 於日本大学文学部第二会議室。

- 1, 常任委員選出。15名決定。
- 2, 淡路・田中両氏名誉会員快諾の件報告。
- 3, 日本心理学会との合同問題討議。
- 4, 「応用心理学会論文集」の規格に関する件討議。
- 5, 第22回大会(会場東北大学)の大会開催方式の件討議。

### IV 月 例 会

※昭和31年4月30日 午後3時から於日本大学文学部16号講堂。「最近欧洲心理学視察談」結城錦一。

※昭和31年5月16日 午後4時30分から 於東大講内学士会館。「アメリカにおける科学的カウンセリングの  
 発達について」E・G・ウィリアムスン

### V 部 会 活 動 状 況

#### ※教育心理部会

- 昭和30年12月10日「交通事故防止対策についての意見交換会」於教育大学。  
 昭和31年1月27日「交通事故防止対策小委員会(安全教育)」於日本大学。  
 昭和31年2月24日「交通事故防止対策小委員会(安全教育)」於日本大学。

昭和31年5月16日「ウィリアムソン氏から聞く会」(学会月例会と共催)於東大構内学生会館。

※産業心理部会

昭和30年12月3日(第18回例会)「産業心理学に期待するもの」日本労務研究会 荻坂 剛 服部時計店精工舎 吉村司郎 於立教大学。

昭和30年12月17日(第19回例会)「職業指導による教護技術」石原 登 於武蔵野学院。

昭和31年1月28日(第20回例会)「新聞社の採用試験」朝日新聞社調査部 堀川直義 「新聞記者の採用の問題点」朝日新聞社総務部人事課 市川重雄 「新聞社における T・W・I」朝日新聞社印刷局 夏目 勝 於朝日新聞社。

昭和31年2月25日(第21回例会)「外務員の適性検査」板倉善高 於東京都職業適性相談所。

昭和31年3月24日(第22回例会)「産業心理学の根本問題について」法政大学 乾 孝 「人間工学、精神工学の評価について」法政大学 芝田進午 於労働科学研究所。

昭和31年4月28日(第23回例会)「職場における人間関係」人事院 金平文二 「職場の適応性について」精工舎 浅野行雄 於レストラン・トウキョウ

昭和31年5月26日(第24回例会)「災害保償法上の災害職業病原因の所在」郵政省医事研究所 長谷川鉄一郎 「郵便作業能率改善に関する研究」金子秀彬 於レストラン・トウキョウ。

昭和31年6月23日(第25回例会)「トップマネジメントと社会」東京ガス 岸上英吉 「職場領域意識およびFB 調査とモラルとの関係」高月東一 於国際文化会館。

※犯罪心理部会

昭和30年12月14日(第18回例会)「青少年問題」日本女子大学 松本武子 愛光女子学園 大平エツ 於明治大学大学院。

昭和31年2月25日(第19回例会)「累犯受刑者の諸特性について」府中刑務所 奥沢良雄

VI 交通事故防止対策委員会

※委員長 中村弘道

※委員

|       |       |         |       |        |
|-------|-------|---------|-------|--------|
| 白井一壽  | 太田周夫  | 太田垣 瑞一郎 | 大脇 義一 | 小保内 虎夫 |
| 狩野 広之 | 児玉 省  | 佐伯 茂雄   | 末永 俊郎 | 相馬 紀公  |
| 高木 貫一 | 鶴田 正一 | 豊原 恒男   | 長谷川 貢 | 久田 富治  |
| 堀川 直義 | 中野 佐三 | 松本 洋    | 山本 晴雄 | 渡辺 徹   |

※委員会開催状況

昭和30年11月5日(於日本大学心理学研究室)

1, 活動分野の決定。2, 研究費の問題。3, 学会外関係者との連絡の件など。

昭和30年12月5日(於日本大学文学部第二会議室)

1, 委員長決定。2, 研究分担。3, 委員拡充の件など。

昭和30年12月27日(於日本大学文学部第二会議室)

1, 中村弘道委員長承諾。2, 研究テーマ決定。

昭和31年1月7日(於日本大学文学部第二会議室)

委員会内に次の小委員会が結成された。

- (1) 運転従事員に対する適性検査研究班
- (2) 交通事故頻発箇所心理学的研究班
- (3) 疲労と運転事故との関連性に関する研究班
- (4) 交通安全教育および交通安全宣伝に関する研究班

昭和31年1月30日(於日本大学文学部第二会議室)

1, 研究会開催「警視庁管下における交通事故の現状」警視庁交通第一課長 木村善隆 「東京都内小学校および幼稚園における交通安全教育」東京都指導主事 舞田正好

2, 文部省総合研究費申請の件。

昭和31年2月27日(於日本大学文学部第二会議室)

1, 第21回大会における発表の件打合せ。

2. 各小委員会研究状況報告。

昭和31年4月3日（於日本大学文学部第二会議室）

- 1, 「大阪における交通事故防止対策委員会活動状況報告」大阪大学 橋 寛勝
- 2, 警視庁から依頼の心理検査実施の打合せ。
- 3, 「欧米における交通対策の現状報告」北海道大学 結城錦一

昭和31年4月23日（於日本大学文学部第二会議室）

- 1, 警視庁から依頼の心理検査実施の打合せ。
- 2, 関係官庁に対する建議書の検討。

昭和31年4月26日（於都品川区大井鮫洲東京自動車運転免許試験所）

- 1, 交通事故頻発者に対する心理検査実施。
- 2, 検査終了後同所で委員会開催。

昭和31年5月28日（於日本大学文学部第二会議室）

- 1, 優良運転手検査についての打合せ警視庁交通第二課長 小尾外征年から内容の説明。
- 2, 末永俊郎 委員会に入会。

昭和31年6月18日（於警視庁第四・五会議室）

優良運転手に対して心理検査実施。

交通事故防止対策委員会を中心として昭和31年度科学研究費交付金（総合研究）58万円交付。  
研究課題「交通事故防止に関する心理学的研究」

VII 新入会員

昭和30年4月から昭和31年3月までの入会者

|       |       |       |       |       |       |        |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|
| 安香 宏  | 浅井 正昭 | 伊藤 巖  | 石綿三喜雄 | 稲毛登代子 | 梅田 昭吾 | 江口 妙子  |
| 岡本 健  | 太田 鉄男 | 上山 忠男 | 川島千恵子 | 片岡 義信 | 岸本 貞二 | 青木 民雄  |
| 新井 久子 | 飯田 とめ | 泉 美年子 | 今井 省吾 | 臼井 正輝 | 扇田 博元 | 大塚 博保  |
| 太田 雅夫 | 金子 精宏 | 川口 陽子 | 清宮 栄一 | 岸田 元美 | 相島 昇  | 天野 高信  |
| 石川 晶子 | 泉山 中三 | 今村 義正 | 上田 好一 | 小田富千子 | 大塚 一夫 | 大島 貞夫  |
| 加藤 正英 | 亀島 和子 | 北見 芳雄 | 菊地 哲彦 | 秋田 一貫 | 井本 博子 | 石毛 長雄  |
| 石川百合子 | 岩本 房雄 | 植村 孜  | 奥村 光堂 | 大谷 俊二 | 大熊 理市 | 加藤 千枝  |
| 片山 英雄 | 北里美智子 | 城戸 徳浩 | 喜田 史郎 | 駒崎 勉  | 沢田 慶輔 | 佐藤 望   |
| 齊藤 宗吉 | 志津野知文 | 須見 喜六 | 田中 昌人 | 高瀬 安貞 | 坪田 正男 | 豊田 国夫  |
| 徳田 安俊 | 夏目 智子 | 栗田 喜治 | 小玉 正任 | 沢井 幸樹 | 酒川靖一郎 | 椎名 新一  |
| 鎮目 光雄 | 菅 俊夫  | 武田みとし | 高橋 昱子 | 築添 正二 | 当山 支作 | 内藤耕次郎  |
| 長沢 有恒 | 国安 清香 | 小西 秀勇 | 笹野 完二 | 酒井 汀  | 椎名 悦子 | 品川 孝子  |
| 関根 浩  | 武田 専  | 田中 豊  | 寺井 俊健 | 豊田十三郎 | 奈良井仁一 | 中山三郎平  |
| 久世 敏雄 | 小島 一如 | 佐藤 桃平 | 酒井 敏夫 | 宍道 令子 | 未永 俊郎 | 空井 健三  |
| 武沢 信一 | 千羽喜代子 | 寺田 幸子 | 登倉 京子 | 鍋島 友亀 | 中西 信男 | 中村 貞二  |
| 西尾 忠介 | 畑山 和子 | 鱈崎 轍  | 古牧 節子 | 堀井千鶴子 | 松本 信子 | 三島 二郎  |
| 森 博子  | 山崎 純  | 吉田 専吉 | 中島三男人 | 西尾 豪之 | 晶瀬 稔  | 平林 一泰  |
| 古川 裕  | 堀 辰巳  | 松坂 末三 | 村中 義夫 | 山本 輝夫 | 山川 道子 | 吉田 敬子  |
| 西山 啓  | 半田 雅子 | 秦 安雄  | 樋口 吉弘 | 古市 和子 | 細谷 三男 | 松浦田鶴子  |
| 森脇多恵子 | 山田 豊治 | 山川 範子 | 横内 立身 | 西森 房子 | 原 祥子  | 広 光男   |
| 日上 泰輔 | 伏見 五郎 | 間野 昭  | 三木 アヤ | 森戸 俊夫 | 山下 素邦 | 吉岡 宏   |
| 渡辺 和子 |       |       |       |       |       | 以上148名 |

VIII 会計報告

※昭和30年7月19日から昭和31年3月31日までにおける本学会会計決算報告は次のとおりである。

|     |                   |         |
|-----|-------------------|---------|
| ◇収入 | 繰越金               | 45,307円 |
|     | 学会費 28年度(300円×32) | 9,600   |



|                     |           |
|---------------------|-----------|
| 学会費 29年度 (300円×112) | 33,600. 円 |
| 30年度 (500円×416)     | 208,000   |
| 31年度 (500円×2)       | 1,000     |
| 第18回抄録掲載料 (50円×11)  | 550       |
| 第18回抄録補助費 (50円×208) | 10,400    |
| 第20回抄録補助費 (50円×53)  | 2,650     |
| 第18回抄録売上 (100円×76)  | 7,600     |
| 寄 附 金               | 3,000     |
| 預 金 利 子             | 2,635     |

|      |                          |          |
|------|--------------------------|----------|
|      | 計                        | 324,342  |
| ◇支 出 | 郵 税                      | 12,895 円 |
|      | 電 報 電 話 料                | 585      |
|      | 会 議 費                    | 9,485    |
|      | 交 通 費                    | 8,116    |
|      | 消 耗 品 費                  | 604      |
|      | 国際応用心理学会会費               | 1,203    |
|      | 四 部 会 補 助 費              | 20,000   |
|      | 備 品 費                    | 3,015    |
|      | 謝 礼 金                    | 3,680    |
|      | 第15・16回抄録出版費 (180円×32) ※ | 5,760    |
|      | 第19回抄録出版費                | 77,948   |
|      | 第20回抄録出版費                | 48,897   |
|      | 印 刷 代                    | 650      |
|      | 事務局員手当                   | 12,000   |
|      | 計                        | 204,843  |

※昭和28年度学会費300円のうち120円を学会費180円を抄録出版費とするという内規によるもの。

|      |     |           |
|------|-----|-----------|
| ◇差 引 | 收 入 | 324,342 円 |
|      | 支 出 | 204,843   |

|                         |  |           |
|-------------------------|--|-----------|
| ◇別 会 計 (第15・16回大会抄録出版費) |  | 119,499   |
|                         | 繰 越 金  | 81,501. 円 |
|                         | 昭30, 7, 19~昭31, 3, 31における<br>昭和28年度学会費からの繰入金 | 5,760     |
|                         | 計  | 87,261    |

※昭和30年10月29日、30日に広島大学において開催された第20回大会会計決算報告は次のとおりである。

|      |                        |           |
|------|------------------------|-----------|
| ◇收 入 | 大 会 費 正 会 員 (300円×121) | 36,300. 円 |
|      | 中国四国心理学会員 (300円×113)   | 33,900    |
|      | 学生臨時会員 (50円×51)        | 2,550     |
|      | 抄 録 費 学 会 費 从 来        | 48,897    |
|      | 掲 載 料 (50円×111)        | 5,550     |
|      | 補 助 費 (50円×148)        | 7,400     |
|      | 懇 親 会 費 (200円×62)      | 12,400    |
|      | 写 真 代 (100円×84)        | 8,400     |
|      | 広 告 代                  | 26,000    |
|      | 計                      | 181,397   |
| ◇支 出 | 準 備 通 信 印 刷 費          | 1,690. 円  |
|      | 大 会 次 第 書 印 刷 費        | 19,500    |

|     |               |          |
|-----|---------------|----------|
|     | 抄録印刷費         | 45,000 円 |
|     | 郵税            | 19,975   |
|     | 消耗品費          | 2,858    |
|     | 会場設備費         | 2,485    |
|     | 運営委員会会議費      | 3,060    |
|     | 大会関係者会合費      | 1,180    |
|     | 手伝者謝礼費        | 11,000   |
|     | 講師謝礼および宿舎費    | 18,922   |
|     | 講師・運営委員・会員接待費 | 12,077   |
|     | 講師旅費          | 14,640   |
|     | 交通費           | 2,760    |
|     | 懇親会費          | 17,500   |
|     | 写真代           | 8,400    |
|     | 残務整理費         | 350      |
|     | 計             | 181,397  |
| ◇差引 | 収入            | 181,397  |
|     | 支出            | 181,397  |

0

※昭和31年7月14日現在における学会費納入状況は次のとおりである。

(イ) 昭和31年度学会費は名誉会員2名を除く正会員716名のうち223名が納入済み。493名は未納(納入率は31%)。

(ロ) 昭和30年度学会費はこの年度における正会員658名中、491名が納入済み。167名は未納(納入率は75%)。

## 学術会議会員候補者の推薦

### I 全国区候補者

8月6日の常任委員会において、来る12月10日までに行われる日本学術会議第4期会員選挙の全国区候補者として本学会から次の両氏を最適任者として推薦することに決定した。

全国区(専門別に選挙される候補者)

矢田部達郎氏

全国区(専門にかかわらず選挙される候補者)

小保内虎夫氏

### II 地方区候補者

8月21日の常任委員会において日本学術会議第4期会員選挙の地方区候補者として本学会から次の両氏を適任者として推薦することに決定した。

北海道地区

結城錦一氏

関東地方

戸川行男氏

# 応用心理学論文集 第7集

—第21回大会発表研究抄録—

---

昭和31年10月30日発行

編集兼発行者 日本応用心理学会  
会長 石川七五三二  
甲府市古府中町 山梨大学  
学芸学部心理学教室内

---

除 籍  
47.2.21  
57.2.24  
005160